

記念寄稿

— 一般 —

※50 音順とさせていただきますが、編集の都合上前後しておりますこと、ご了承願います。



記念棟から望む日光白根山 2578m、男体山 2486m、女峰山 2483、登頂各 1 回

バーベキューの思い出

日本赤十字社医療センター産婦人科

愛葉 美奈

石橋先生が長きにわたる教授職を全うされ、ご退任の日を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

石橋先生は東京大学医学部陸上部 OB で、私から見ると 36 学年上の大先輩になります。学生時代は短距離走でご活躍され、現在も部内の歴代記録に名が刻まれています。

新型コロナウイルスの流行までは、毎年陸上競技シーズンの終わる秋頃になると、石橋先生は陸上部の学生を大勢ご自宅に招いてバーベキューを開催してくださっていました。私は学生時代に凶々しくも 6 年連続で参加させていただき、卒業後にもお邪魔しておりましたので、バーベキューの思い出をつづらせていただきます。

よく晴れた 11 月の午後 3 時、閑静な住宅街を駅から 10 分ほど歩いてご自宅に伺います。インターホンを押すと先生が玄関に出てこられ、すぐに学生を迎え入れてくださいます。笑顔が素敵な奥様に促され、道中考えていたご挨拶の言葉を述べる間もなく、中庭に出て火起こしを開始します。慣れない学生たちですが、石橋先生の監督のもと、着火剤と炭を組み上げ交代で空気を送ります。炭火が安定してきたらビールで乾杯です。奥様が絶品の手料理を次々とキッチンから運んでくださった後、運動部の学生でも食べきれないほどたくさんのお肉がまた次々と出てきて焼かれていきます。石橋先生は部員一人ひとりのことをよく見て覚えてくださり、教授としての普段の姿も眼前に見えるようでした。また、現在も健脚は衰えず、マラソンや登山のお話に何度も驚かされました。

満腹になりすっかり日も沈んだころ、リビングルームに移動します。今まで飲んだことがないほど美味しいお酒を何本も開けていただき、途中で OB も合流して話に花を咲かせ、デザートやコーヒーまでいただいて記念撮影をして夜遅くに解散というのがいつもの流れでした。明るいリビングでは石橋先生と奥様が仲睦まじく言葉を交され、時にはお嬢様方も顔を見せてくださり、温かい家庭の姿が強く印象に残っています。学生だった当時、年に一度のこのバーベキューは、美味しいお料理とお酒をいただける上に、進学で実家を出てから触れる機会の少なくなった家庭の温かさも同時に味わえるような、とても幸せな時間でした。美酒に酔ってその場で眠り込んでしまうなど粗相を働く者も何人もいましたが、毎年温かく迎えてくださり、感謝の念に堪えません。

ご退任なさった後も素敵なお家庭の姿は変わらないと確信しております。石橋先生とご家族の皆様の今後一層のご多幸とご健康をお祈り申し上げます。

石橋 俊 教授ご退任に寄せて

獨協医科大学病院 病院長
獨協医科大学内科学(内分泌代謝)教授

麻生 好正



石橋 俊 教授、この度はご退任、誠にとおめでとうございます。22年に及ぶ長い期間、教授という重責を見事に全うされ、無事、定年を迎えられたことを心よりお喜び申し上げます。先生の普段の澁瀨とした若々しいお姿から、定年のイメージは全くなく、今年度を持ってご退任とのことで大変驚いております。また、私にも寄稿文の機会を与えて頂き、本当に光栄に存じます。

石橋教授と私の本当の意味での最初の出会いは、私が埼玉県から栃木県の獨協医科大学に異動した2012年1月に遡ります。石橋教授は、私の専門分野である糖尿病・内分泌代謝学の栃木県のトップでしたので、まずはご挨拶をと多少、強引に会食の機会をお願いしたところ、快く受けて頂きました。2012年の年明け早々に宇都宮市のステーキハウスで一緒したのですが、スタートして直ぐに、石橋教授は開口一番、「君は圧が強いね。アルコールが入る前からその機関銃トークなの?」、そして、「少し、疲れるね」と笑いながら言われたのです。第一印象が悪かったのでは心配したのですが、その後、11年間にわたり、温かい目で見守って頂き、辛抱強くお付き合いして下さい本当にありがとうございました。

この11年間、石橋教授とは、栃木県の糖尿病合併症対策、日本糖尿病協会栃木県支部の運営、糖尿病関連の研究会などお会いする機会が多く、その度、ご指導、ご支援を賜り、本当に感謝しております。特に、講演会では、数多く座長の労を取って頂き、いつも恐縮しておりました。私が講演中に、センスのないダジャレを発すると、苦笑いしながら反応して頂いた石橋教授のお顔が忘れられません。また、米国糖尿病学会では、広い会場の中、何回か偶然にもお会いして、勝手にご縁を感じておりました。

先生は診療、教育、研究と第一線で休みなく走り続けてきたと思いますので、定年後は、是非、リラックスする時間を作られることをお願いしたいと思っておりましたが、何と2023年2月に糖尿病内分泌内科クリニックを新規にご開業されるとお聞きしました。その気力、体力、エネルギーに驚嘆するとともに敬意を表したいと存じます。地域医療の担い手として、「赤ひげ」となって、臨床医の本来あるべき姿を追求するのではと推察しております。そして、石橋教授の優しさで、患者目線で、患者さんにとって最高の医療を提供することを確信しております。登山で鍛えた体力、元々の知力をフルに発揮され、これからも益々のご活躍をお祈り申し上げます。そして、私共、後進に対して、引き続き、ご指導のほど宜しくお願い致します。

令和5年1月23日

石橋俊先生との思い出

国立長寿医療研究センター 理事長

荒井 秀典

石橋俊先生、20年以上にわたる自治医科大学教授としての奉職を終え、無事退官に至りましたこと心よりお祝い申し上げます。退職後は地域医療に貢献されると伺っております。これまで、糖尿病、脂質異常症を中心に診療されてこられたかと存じますが、地域医療においては老年医学の重要性をますます実感されるのではないかと存じます。今後は生活習慣病のみならず、老年医学の視点からも協働することができればと存じます。

さて、石橋先生との思い出ですが、やはりダラスから LDL 受容体ノックアウトマウスの成果をひっさげて帰国された 1994 年以降になるでしょうか。私は 1997 年にアメリカから帰国しましたが、アメリカにいるときから石橋先生のご活躍については注目しておりました。私が帰国した頃には石橋先生はすでにアメリカでの研究を進展させ、動脈硬化学会や様々な講演会で華々しい研究成果を発表されており、圧倒されるばかりであったことを覚えております。その後も動脈硬化、リポ蛋白代謝に関して常にレベルの高い基礎研究を継続されるとともに臨床研究にも力を注がれました。また、多くの人材を輩出されたのも周知のところであります。

光栄なことに私は石橋先生とこれまで学会を始め一緒に研究をさせていただく機会を頂きました。まず、原発性高脂血症研究班においては石橋先生が班長をお務めの時に分担研究者として脂質異常症の実態調査に参加させていただきました。また、ある薬剤の開発に関しては 10 年以上にわたりご一緒させて頂きましたが、石橋先生のリーダーシップにより、その薬剤は順調に上市されました。その開発に共に携わらせて頂いたのは、大変光栄でよい思い出になっています。

ご存じのように石橋先生は研究者の中でも大変博学で、学会での質問では必ずいくつかの論文のデータを参照しながら、質問されていたことに敬服しております。

最後になりますが、これからも先生の知識と人柄で地域医療に貢献されることを祈念しています。石橋先生と言えば、山登りですが、お互い定年前後になってきましたので、機会があれば、山登りを一緒にしたいと思います。それまでにはなんとか腰を治して、しっかり筋トレしておきたいと思います。本当に長い間お世話になりました。今後ともよろしく願い申し上げます。

石橋俊教授のご退任に寄せて

帝京大学薬学部

新井 洋由

(元東京大学薬学系研究科教授 医薬品医療機器総合機構(PMDA)理事)

石橋先生、ご退任誠におめでとうございます。

先生は私の一歳年下のほぼ同期で、私が米国留学から帰国してからのお付き合いとなりました。留学中私は血漿リポタンパク質代謝、特に LCAT, CETP に関わる研究をしておりました、帰国後もその仕事を少々続けておりました。しかし、薬学部所属ということでヒト血液等のサンプルが手に入らず困っていたところ、当時第三内科におられた(故)山田信博先生を紹介して頂き、その時初めて石橋先生、後藤田先生、島野先生などグループのメンバーとお知り合いになりました。リポタンパク質代謝研究に際しては、当時 LCAT, CETP のみならずリポタンパク質やアポタンパク質も自前で精製しなければならない状況で、石橋先生をはじめグループの皆様から親切に御援助・ご助言を頂いたことをよく覚えております。

ヒトとマウスではリポタンパク質代謝は大きく異なっているため動脈硬化症の発症メカニズム解析にモデル動物の限界を感じた私は、その後コレステロールから脂肪酸代謝の研究に移ってしまいました。しかし、石橋先生が自治医大学内科学講座内分泌代謝学部門の教授にご就任された後も、肝臓におけるコレステロール生合成に関する研究、脂肪組織における新たなリパーゼに関する研究、内皮細胞のスカベンジャー受容体に関する研究、等いくつかの共同研究をさせて頂き、*J. Lipid Res.*, *Diabetes*, *J. Biol. Chem.*など一流誌に共著とさせて頂きました。改めてお礼申し上げます。また、2010 年に自治医科大学の特別講義にも呼んで頂きました。当時の講義スライドを振り返ってみましたら、線虫(*C.elegans*)を使ったアシル基導入酵素の同定とか脂肪酸二重結合の位置の役割といった非常に基礎的な話ばかりでした。臨床を目指す聴衆が多い中で基礎的過ぎる話をしてしまったと今更ながら反省しております。講演の後は駅近くだったと思いますが料亭のようなところでご馳走になりまして、なぜかその映像が今も脳裏に残っております。自治医大にも栃木県の周辺地域にも訪れた事はこれ一回きりで、いい経験をさせていただきました。

石橋先生はご退任後埼玉県羽生市のご祖父様ゆかりの土地で医院を開業されたことを知りました。大学における研究・教育・臨床とは違った環境に身を置いて新たな道を進み始められたこと、大変羨ましくも尊敬致します。また、地域の住民の方々にとっても基礎から臨床までご存知の素晴らしいお医者様が来られたことは誠に幸運なことと思います。先生は週末には約 15 km のジョギングをされていると伺いましたが、私も土日曜日の朝 10 km 程走っています。この調子なら 75 歳くらいまで走れるかなと思っていたのですが、最近猛暑のせいか途中でめまいがするようになりました。お互いにまだ後期高齢者までは少々時間がありますが、お身体にはくれぐれもお気をつけて新たなお仕事に励んでいただければと思います。ますますのご発展をお祈り申し上げます。

石橋 俊先生の教授ご退任に寄せて

熊本大学大学院代謝内科学講座

荒木 栄一



石橋 俊先生の自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授の定年でのご退任、誠にとおめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

石橋先生は昭和 57 年に東京大学医学部をご卒業され、内科医としての研鑽を積まれたのちに、東京大学の第三内科に入局し、糖尿病、脂質異常症、動脈硬化症などの内分泌代謝学のご研究と診療に当たって来られました。特に糖尿病合併症や動脈硬化症の発症機序などに関して、発生工学的な手法を用いた疾患モデル動物の作成など最先端の技術も駆使して、これらの難題に立ち向かっておられます。

私は昭和58年に熊本大学を卒業し、インスリン作用の研究といった石橋先生と近い領域で研究を行ってきましたので、以前から石橋先生のことを存じ上げておりました。しかし、石橋先生と親しくお付き合いさせていただくようになったのは、石橋先生が中心となってその作用機序や臨床効果、さらには臨床応用の研究を行って来られました K-877 の研究グループのメンバーに入れていただいた以降になります。K-877 (一般名ペマフィブラート) は SPPARM α と呼ばれる選択的 PPAR α モジュレーターであり、従来のフィブラート製剤よりも PPAR α に対する選択性が高く、強力で安全性の高い高中性脂肪血症の治療薬として開発されてきました。この研究グループのサポートによってその有効性及び安全性が確かめられ、K-877 は日本において脂質異常症の治療薬として承認・販売に至りました。

石橋先生は、他のメンバーの意見を十分に配慮された上で、確実かつ丁寧に研究グループの運営に努めて来られました。一方、オフの時間に食事をご一緒する際には、山登りの話など、積極的に色々な話題を提供いただき、石橋先生との食事は大変素敵な時間へと変わります。学術的な面だけでなく、人間的な魅力にも溢れた、大変素晴らしい先生だと思っております。2014 年にはウイーンで開催されました EASD (ヨーロッパ糖尿病学会) で石橋先生や何名かのメンバーの先生とご一緒する機会に恵まれ、食事をご一緒したり、ウイーン美術史博物館の夜間特別開館でクリムトなどの素晴らしい絵画を鑑賞したのが良い思い出として残っています。

先日、石橋先生からご退官されるというご挨拶とともに、ご退官後は開業されるというお話をお伺いした時には、何かアカデミックなお仕事に就かれると思っておりましたので、大変びっくりしました。しかし、実は石橋先生のお祖父様が開業されていた場所にご開業されると知って、納得しました。私の勝手な想像ですが、きっといつかはお祖父様の跡を継ぎたいと以前から思っておられ、それがやっと実現するのだろうか、と思っております。石橋先生の人当たりの良さ、丁寧なお話の仕方、そして豊富な臨床経験から、開業のご成功は間違いないと確信しています。

石橋先生の益々のご健勝と、いしばし糖尿病内分泌内科クリニックのご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。ご退官、そしてご開業、本当におめでとうございます。

石橋先生との思い出

国立国際医療研究センター、沖中記念成人病研究所
(臓器移植中央調整委員会 委員長、元埼玉医科大学内分泌・糖尿病内科教授)

粟田 卓也

自治医科大学内分泌代謝科の主任教授を長く勤められた石橋教授が退任するにあたり、少しばかり石橋先生の思い出を述べさせていただきます。

私は石橋先生の大学の1年先輩に当たり、自治医科大学内分泌代謝科にも葛谷健先生、岩本安彦先生がおられた時期に在籍し遺伝子解析(1型糖尿病のHLA遺伝子やミトコンドリア遺伝子異常症例など)を行っていたことはありますが、その後私は埼玉医科大学に移り、同じ職場の同僚となったことはありません。しかし、卒業後は生活習慣病を専門とし、北関東地区の医科大学の内分泌代謝疾患を担当する科の責任者を務めるなど、石橋先生とは共通点も多くいわば「同好の士」として、勝手に親近感を抱いておりました。

医科大学の主任教授といっても、結局は中間管理職であり、医科大学では診療・教育・研究の三本柱を高いレベルで行うことが求められるので(さらに自治医科大学は私立大学といっても「半官半民」のエリート大学でもあり)、私の経験から推察しても、かなりたいへんだったと思いますが、特に脂質代謝研究の日本の権威の1人として、見事に科の発展に尽くされたと感じております。お疲れ様でした。

さて、現在私自身は大学を定年となっていますが、その数年前に栃木県の医科大学に移った関係で栃木県の医療講演会の世話人として一緒することがたびたびありました。糖尿病の治療薬は多くの新薬が発売され、その関係の講演会が多かったわけですが、幸いコロナ禍の前であったため、石橋先生や埼玉県で親しくしていた獨協医科大学の麻生好正教授(以前は旧・獨協医科大学越谷病院の所属)などと世話人会、講演会やその後の情報交換会で交流させていただいたことが楽しく思い出されます。石橋先生は栃木県の生活習慣病診療の中心として、講演会のオープニングやクロージングでダンディーな紳士然とした格調高いご挨拶をされていました。

石橋先生は、存じ上げなかったのですが埼玉県のご出身ということもあり、退職後は羽生市のクリニックでの診療もされるとのこと、今後のご健勝とご多幸をお祈りいたします。

心と感謝を込めて

東京大学医学部附属病院 国際検診センター長/糖尿病・代謝内科

飯塚 陽子

石橋俊先生とはじめてお目に掛かったのは 1995 年頃、研修医として東大病院第三内科で研修した時です。石橋先生が大ベンとして、学生や研修医の私達に対し大変分かりやすく熱心に教えて下さり、脂質や糖尿病代謝学について熱く語っていらしたのが大変印象的でした。石橋先生に導かれ、11 研究室に入り、研究に対しても石橋先生による大変きめ細やかなご指導に恵まれ、研究の手法のみならず、研究者としての心構えもしっかりと教わりました。自治医科大学にご栄転の際に、石橋先生の外来や外勤を引継ぐことになり、石橋先生の診療のエッセンスに触れる機会に恵まれ、大変勉強になりました。

今から振り返ると、自分が代謝学を目指す大切なきっかけを作って下さり、臨床や研究の重要な礎を作って下さったのが石橋先生であり、自分が現在代謝学の臨床・教育・研究に携わることができたのも、ひとえに石橋先生の一貫した温かいご指導・心強いご支援の賜物だとこの場を借りて深く感謝申し上げます。

自分のライフワークの一つである医療の国際化に対しても、いつも気にかけて下さり、講演の機会を頂く等いつも温かいご高配を賜り、重ねて御礼申し上げます。これからも自分の強みをフルに活かし、win-win が得られるよう、人類共通の財産で・限られた資源である医療のために貢献していくことが、石橋先生のご指導へのせめてもの恩返しになれたらと思っています。今後ともご指導を宜しくお願い致します。



1998 年 11 月 東大 2/11 研歓送迎会

石橋教授にご指導いただいた論文の思い出

東京大学医学部附属病院 糖尿病・代謝内科 五十嵐 正樹



この度は、石橋教授の退任に際し、ご寄稿させていただき感謝申し上げます。

私は、2004年に大学院生として、東京大学第3内科2、11研で基礎研究を開始しました。石橋先生は東大2、11研を離れ、すでに自治医科大学教授に就任されておりましたが、石橋先生が東大で進めておられた研究プロジェクトに関わらせていただきました。具体的には、ホルモン感受性リパーゼ欠損マウスで残存するマクロファージコレステロール水解酵素を担う候補遺伝子である NCEH1 の機能解析を行い、論文をいくつか発表いたしました。論文の投稿から採択まで、石橋先生のご指導のもと取り組ませていただきましたが、お宅に何度もお伺いさせていただきまして、論文のご相談をさせていただいたのを思い出します。

石橋先生に論文の原案を提出すると、私の書いた文章の原型がなくなるほど修正されており、自分の未熟さを実感するとともに、論文を執筆することの難しさを実感いたしました。それでも、少しずつではありますが、回を重ねるごとに石橋先生の修正が少なくなって参りまして、私の論文を執筆する能力が向上したと実感いたしました。

中でも、思い出深いのが、私が留学前に石橋先生と発表したヒトの NCEH1 の論文です。reviewer のコメントにすべて回答したにも関わらず、論文が reject されてしまいました。しかし、Reviewer の評価の不当であると、石橋先生が反論の手紙を書いてくださりまして、驚いたことにその主張が認められたのです。3人だった reviewer がさらに2人追加されて再び review が行われました。この時も石橋先生のお宅にお邪魔して、何度もご相談をさせていただきましたが、最後にはすべての reviewer のコメントに回答することができまして、なんと最終的に論文が採択されたのでした。私の留学の渡米が差し迫ったギリギリの採択であり、まだ家具などが配置できていない米国ボストンのアパートの一室で石橋先生から受け取った proof の確認を行いました。石橋先生とともに闘って勝ち取った論文であり、今でも、私の研究人生で最も思い出深い論文となっております。

石橋先生には、海外の学会参加、学会発表を促していただき、また、海外に研究成果を発表することの重要性とその難しさを教えていただきました。現在、私も、若い先生の研究や論文作成の指導を行う立場となりましたが、その礎となっているのが東大2、11研での研究と石橋先生の教えであることは疑う余地もなく、この場を借りて厚く感謝申し上げます。22年間おつかれさまでございました。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



2015年6月 Boston にて

岩手の山でお待ちしています

岩手医科大学医学部内科学講座糖尿病・代謝・内分泌内科分野

石垣 泰

このたびは、22年間におよぶ自治医科大学教授生活を完結されるにあたって、石橋俊先生に心からお祝いを申し上げたいと思います。脂質代謝、糖代謝の領域における多大な業績と薫陶を受けた多くの後進を残された22年間だったと思います。

私は、大学院生時代にリポ蛋白受容体に関わる研究に取り組んでいた時分、石橋先生がご留学時代に作成されたLDL受容体欠損マウスとその関連の論文を読み返しておりました。実際に、仕事で石橋先生とご一緒させていただいたのは、2011年の厚生労働科学研究費補助金・原発性高脂血症に関する調査研究に声をかけていただいたのが最初でした。石橋研究班は、現在も続くPROLIPIDなど多くの作業を手がけ、私も班員の先生方の仕事ぶりに接することで貴重な経験をさせていただきました。

石橋先生は御父上の出身大学の関係で、子供の頃は宮城県や岩手県に住んでいたと聞き、とても親近感を覚えたことを思い出します。また、岩手在住の私も登頂したことがない岩手山を息子さんと制覇したエピソードや白濁した露天風呂が印象的な藤七温泉を教えていただくなど、石橋先生の後ろを追いかけてながら岩手県の自然を再認識しています。

これからお時間ができた折には、岩手の山を楽しみにいらしていただければと思いますし、その時までには私が案内できるようになっていることを目標にお待ちしています。

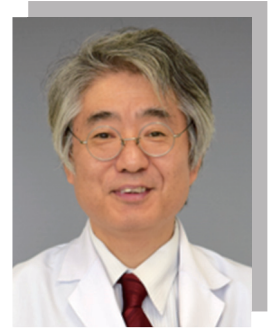
石橋俊先生のご退任に寄せて

群馬大学生体調節研究所 遺伝生化学分野

泉 哲郎



私は、東京大学医学部学生同期として、石橋先生(先生と呼ぶのは少し抵抗がありますが)の若い頃から存じ上げている一人と思います。第一印象では、物静かで穏やかな性格の方かと思いましたが、実際に接してみると情熱を秘めた活動的な方であることがわかりました。学生時代はアイウエオ順で実習ベンチが近く、卒業後も、ともに東京大学付属病院第3内科に入局し、彼は動脈硬化、私は糖尿病を専門とする近縁の研究室に所属するなど、近い関係にありました。言うまでも無く動脈硬化は、脳卒中、虚血性心疾患など、頻度の多い疾病の基礎となる重要な病態であることはわかっていましたが、その当時、実臨床の場においては脳神経外科や循環器内科の医師が担当することが多く、それを専門とする医師は多くはなかったと思います。スタチンの製品化からもあまり時間が経っていない時期でした。研究を指向する医師が多かった第3内科においても、動脈硬化を研究する先生は、糖尿病、内分泌、循環器などを専門とする、いくつかの研究室に分かれていました。その後、(筑波大学長になられた)第3内科糖尿病研究室出身の山田信博先生が、独立した研究室としてまとめたという経緯があります。私自身、動脈硬化の研究の重要性は理解していましたが、それを専門とする臨床医というのを、十分に想像することができませんでした。しかしながら、その後、石橋先生は、中性脂肪やコレステロールの代謝に関わる酵素の同定やその遺伝子欠損マウスの解析、マクロファージの病態への関わりなどに関する業績を次々に上げられたことは周知の通りです。そして自治医科大学内科の教授に就任され、広く内分泌代謝疾患の研究・臨床を先導されることとなり、先生の見聞の明に改めて感心することとなりました。私自身は、留学後、群馬大学生体調節研究所で、臨床の場から離れ、基礎医学研究にもつばら関わるという立場の違いは起きましたが、ともに北関東の大学に転出したことなどで、数々の接点があり、学会や種々の研究会でご一緒し、彼に群馬大学でセミナーをお願いしたこともあります。また、糖尿病や肥満の遺伝学的成因について研究していた自分が、思いがけず脂肪分解酵素や脂肪組織マクロファージの研究を行うことになり、石橋先生の論文を参考にすることもありました。このように、先生とは長いお付き合いとなりました。石橋先生が、地域に根差した臨床医学に注力しながら、研究を重んじて来られたことは、その実績からもうかがえますが、ご退任後は開業するというのを聞きました。一瞬、意外な決断と思いましたが、初めて会った頃の彼の心優しい人柄を思い起こし、彼らしい選択と納得しました。開業の場でも、きっと良い臨床医となることと思います。古くからの友人として、ますますのご活躍を祈念すると共に、今後は、より気の置けないお付き合いができればと思っています。



令和五年三月をもって、石橋先生が自治医科大学を定年退職なさると言うことを半年ほど前にかがいました。いつも若々しく、思慮深く、お優しい石橋先生がそんな年齢になられたのかと小さな驚きでした。まさしく光陰矢の如し、若輩者の私自身の人生を重ねつつ、石橋先生の退職を感慨深く感じています。

私は、平成元年、母校埼玉医大より、恩師河津捷二先生のご紹介で東京大学第三内科 11 研に国内留学をさせて頂きました。当時、血気盛んな山田先生が研究室の講師として、若手研究者を率いて大変活気に溢れていました。そんなところに右も左もわからない、研究の「け」の字もわからない私のような者が飛び込んでいきました。若手の先生方もきっと煩わしさを感じていたのではないかと思います、そんな私を手取り足取り、優しく、指導して下さいたのが他でもない石橋先生です。先生のお陰で、実験のテクニックや動物の世話など大学院生として、なんとかマスターでき、その後の研究生活での基礎を学ばせて頂きました。家にも招いて頂き、埼玉より単身東大に乗り込んだ私を随分、親身になって面倒をみて下さいました。私が母校に戻った後も、学会や同窓会など、お会いする度に親しく接して下さい、そのお人柄の良さに救われた人がたくさんいらっしゃるのではないかと思います。

石橋先生には、改めて感謝を申し上げると共に、第二の人生でのご活躍を心よりお祈り申し上げます次第でございます。

石橋先生へ感謝を込めて

分子病態治療研究センター・人類遺伝学研究室

岩本 禎彦

石橋先生におかれましては、内科学内分泌代謝学部門教授として定年まで職を全うされ、多くの学生、研修医を教育すると共に、輝かしい業績を上げて御退任に至ったことに対し、心よりお祝い申し上げます。

石橋先生とは、いくつかの研究プロジェクトで一緒させていただき、数は多くないものの、それなりにインパクトのある共著論文を公表させていただいた。その背景を含めてご紹介させていただくことで、石橋先生の鋭い透察力と学問に対する真摯な姿勢をご理解いただければ、幸いである。

最初にお仕事を一緒にさせていただいたのは、2008年頃に遡る。2003年から始まったCOEプログラムに本学が採択され、約2万1千人を登録した大規模地域ゲノムバンクをプロジェクトの一環として構築した。当時としては、規模感のあるゲノムバンクをどう使おうか逡巡していたところに、石橋先生から、当時、英国で始まったゲノムワイドSNP関連解析によって新たに検出された血清脂質レベル関連遺伝子を日本人で大規模に検証してはどうかと提案していただいた。モンゴルから石橋先生の元に留学していたBayasgalanさんの助けを借りながら、約1ヶ月かけて12SNPをタイピングし、論文はJ. Med. Genet. (2009;46:370-374)に掲載された。驚いたことに、日本人ではヨーロッパで深い関連が検出されたSNPの2/3しか検証されなかった。これには、ゲノムの人種的な連鎖マップ構造の違いや遺伝子頻度の違い、生活習慣の違いが影響していることなど、興味深い事実がのちに明らかになる契機になった。ResearchGateによると、今日までに70以上も引用されている。さらに、脂肪組織における遺伝子発現解析を目的に、手術患者様から術前にICを取得した上で、皮下脂肪と内臓脂肪を収集するプロジェクトを共同で実施した。当時、大学院生だった永島秀一准教授と一緒に手術室に駆け上り、約50検体を収集した。これを用いて、私たちはRBP4遺伝子の発現解析を(Obesity. 2010;18:1006-14.)、永島先生はトリグリセライド分解酵素の発現解析を実施し(J Atheroscler Thromb. 2011;18:190-9.)共著論文として公表した。最近にも、次世代シーケンサーを用いたゲノム解析によってApoBのレアバリエントを見出した高橋学先生の論文共著(J Clin Lipidol. 2021;15:569-573.)にさせていただいた。この他にも、もう1報、脂質関連遺伝子多型の人種的影響について共著論文(Hum Genet. 2010;127:685-90.)を報告したが、その筆頭著者の中山講師(当時)は、後に東京大学大学院新領域創成科学研究科へ准教授として栄転した。

以上のように、石橋先生は私たちにもポジティブな影響を振り撒きながら、自らの研究テーマを強力に推進してこられたことが分かる。また、決して他人の足を引っ張ったりすることなく、研究成果のシェアもフェアにさせていただいた。退任後は内科クリニックを開業されると聞いていますが、引き続き、ご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、先生の長年にわたるご功績に対し改めて衷心より敬意を表しますとともに、益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

石橋 俊 教授のご退任に寄せて

朝日生命成人病研究所名誉所長
公益財団法人日本糖尿病財団 理事長

岩本 安彦



石橋 俊 先生には 22 年間の長きに亘り、自治医科大学内分泌代謝学部門教授として教育・診療・研究に邁進され、このたびご退任を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

先生は自治医科大学設立以来の吉田 尚 教授、葛谷 健 教授、斎藤寿一教授が築かれた内分泌代謝科に新進気鋭の教授として赴任され、臨床的および基礎的研究テーマに脂質異常症と動脈硬化症が加わり、自治医科大学内分泌代謝学部門の発展に大きく貢献されました。私自身は 1983 年から 11 年間、自治医科大学内分泌代謝科に奉職し、葛谷教授、斎藤教授の下で務めさせていただきましたが、自然に恵まれた環境、広いキャンパスの中で、のびのびと仕事させていただいたことを懐かしく思い出しています。

先生と私とは時期と立場は異なりますが、自治医科大学で充実した教職としての生活を過ごすことが出来た仲間であります。ここで石橋教授と私との最近の仕事上のお付き合いにも触れたいと思います。私は現在、公益財団法人日本糖尿病財団の理事長を務めていますが、石橋教授には 2016 年 11 月に「糖尿病予防キャンペーン東日本地区 in 栃木」の代表世話人をお務めいただき、興味深いプログラムを企画下さり、会場のとちぎ健康の森には 300 名余の参加がありました。石橋教授には、日本糖尿病財団が実施する研究助成の選考委員としても重責を担っていただいています。

先生には自治医科大学の教授を退任されますが、末永くご健康に留意され、益々ご活躍下さいますようお願い申し上げます。



2016 年糖尿病予防キャンペーン後の慰労会

石橋 俊先生と辛夷の会

医療法人財団慈生会野村病院常勤顧問
東京慈恵会医科大学名誉教授

宇都宮 一典



石橋 俊先生の定年ご退任に際し、長年に亘って立派に講座担当教授としての職責を全うされたことに、心からのお祝いを申し上げます。私が石橋先生の名前を知ったのは、東京大学の山田 信博先生のもとで発表されたトップジャーナルの論文からでした。その頃の石橋先生は遺伝子改変マウスの作成で我が国のトップを切っており、手品のように次々と遺伝子を操作される先生に畏敬の念を抱き、学者肌の風貌もあって、近寄りがたい方のように感じていました。ところが、東京学芸大学附属高校(附高)の先輩、当時東京医科歯科大学におられた田中 明先生から、石橋先生が自治医大教授として赴任されること、そして附高の後輩であることを知らされ、びっくりしました。後日、夕食をご一緒させていただく機会があり、高校時代の思い出話で大いに盛り上がり、その真摯なお人柄に改めて感銘を受けました。この高校は個性を尊重する自由な校風を持つ一方、同窓間の繋がりが希薄な面があり、長く面識のある者同士が、同窓だと聞いて驚くことがよくあるのです。実際、千葉大学の横手幸太郎先生、東京医科歯科大学の藍 真澄先生、朝日生命成人病研究所の大西由希子先生など、斯界で活躍する赫々たる方々が附高出身であることを知ったのは、それぞれの知己を得た後でした。しかも、各先生方の下に、附高出身の優秀な若手が多数いることが判ったのです。流石にこの人脈を利用しない手はないだろうということになり、写真は2010(平成22)年4月、日本女子栄養大学に移られた田中先生のご発案で、同大のレストランで昼食会を催したときのものです。その場で、糖尿病・代謝領域の診療・研究に従事する同窓に声を掛けて研究会を立ち上げ、cutting edgeにある研究者から功成り名を遂げた著名人に講演を依頼し、研鑽と親交の場とすることを決めました。この研究会を「辛夷(こぶし)



の会」と命名しました。これは附高の文化祭、「辛夷祭」に因んだものですが、在学生は秋にあるこの文化祭に向けて全力投球し、3年生に至っては、終了後に本格的な受験勉強を始めることが習わしになっており、同窓生なら誰でも慣れ親しんでいる言葉だったからです。2011年2月、第1回の研究会を開催、田中 明先生に特別講演をお願いしました。当日は30名を超す参加者があり、旧交を温めるとともに、この中から、将来この領域のリーダーシップを担う人材が育つことを期待させる熱気を感じました。最近の世情から研究会の名称を変更しましたが、今でも継続されており、楽しみな年中行事になっています。

定年退任といっても、その日を境に知力・体力が急に衰える訳ではありません。退任後は、糖尿病・内分泌疾患を専門とするクリニックを開設し、地域医療に貢献されるとのこと。長年培ってこられた医療に対するご自身の思いを実践されるお考えと拝察し、石橋先生らしいご決断と大変嬉しく存じております。これまでのご厚誼に衷心からのお礼を申し上げるとともに、今後の一層のご活躍を祈念致しております。

石橋俊教授の退任に寄せて

サンライズクリニック(東京都台東区)

江藤 一弘

石橋俊先生

誠におめでたい退任、こころよりお祝い申し上げます。

教育者や研究者としての生活に一区切りということですね。

人を教育するとは考えれば考える程、難しいものですね。私の個人的経験では遠い過去に教わった先生たちのなかで素晴らしく記憶に残るのは、中学の国語の先生、高校の体育の先生などでした。理屈よりも人を感化する力、成長の糧になる言葉や態度を操る力、そんなものが大事なのかと顧みます。

先生ご指導下の三年間は深く胸に刻まれました。北関東の自然、風土、人情にも触れさせていただいた貴重な期間でもありました。

研究者としての先生は、新薬候補の探索などもされていました。疾病のメカニズム解明→治療薬の開発という流れは、内科系医師のキャリアをかけた大目標の一つとなってきました。古くからある良質な薬剤をきちんと使うことはもちろん大切ですが、新たなカテゴリーの薬剤登場は診療現場に活気をもたらします。引き続き、共同研究などでの活躍を期待しております。

さて、これからは、診療者としての力を存分に発揮できますね。地域の一大拠点となり、住民の方々を広く診てゆかれることと思います。鋭い洞察力と広範な知識とで、埋もれていた問題点が明らかになって、患者から喜ばれる場面がすでに想像されます。

最後になりますが、これまでやや離れて暮らされていた家族、特に奥様との時間を末永く大事になさってください。また、医者の不養生だけは避けてください。沢登りやサイクリングではヘルメットを着用しましょう。

以上、簡単ながら謝辞とさせていただきます。

たいへんお世話になりました。有り難うございました。



2007年糖尿病シンポジウムにて

石橋先生から学ぶ

公益財団法人結核予防会 複十字病院 糖尿病内科

及川 眞一

石橋先生との初めての出会いは動脈硬化学会の学会場であったと思います。先生がダラスへの留学から戻って間もない頃と記憶しています。当時は山田信博先生が中心となってグループを率いていた時期と思います。東大第三内科での新しい息吹を感じさせる若手が、颯爽と現れたと感じました。LDL受容体機能解析をさまざまな手法で行い、業績を積み重ねてきたことが思い出されます。「ダラス派」の一人として日本での脂質・動脈硬化研究の第一線を走ってこられました。この度は、「恙なく、めでたく、ご退職」となり、まことにおめでとうございます。

石橋先生とのエピソードといっても、個人的なお付き合いはあまりなく、なかなか、おもしろいエピソード持ち合わせていません。登山がお好きで、講演の合間に山の写真を見せて頂くことが多くありました。

学会の中で親交を深める、というよりは周辺の研究会などで親しくお話をしていました、**Atherosclerosis and Biolipid (AB)**カンファランスは質問時間が延びに延びて、予定時間を超過することが「習い」になっていました。議論の応酬は激しく、石橋先生は座長として、穏やかに議論をまとめていた印象があります。私が世話人を担当したときには気仙沼に来て頂きました。石橋先生のみならずグループの先生方が多く、参加されたと記憶しています。懇親会でご案内した居酒屋は津波で破壊されましたが、ご主人兄弟は無事で、今も、気仙沼で忙しい居酒屋を切り盛りしているようです。

Lipid Clubでは千葉県研修施設で関東の先生方が集まりました。参加される教室からは必ず若手の先生方を同行することになっており、脂質代謝についての新しい話題を聴講し、議論しました。石橋先生の質問は鋭く、たびたび、演者が困ったのではないかと感じていました。

動脈硬化 **Up-Date** は、よりフォーマルな会で、ミニ学会的な会でした。支援会社のご尽力で、研究費申請を受けつけ、交付していた貴重な会でした。採用論文については、先生は選考委員の一人としても活躍されました。

動脈硬化学会での活躍は多くの方がよくご存じと思います。学会誌 **JAT** の編集委員会としては大変お世話になった先生のお一人で、あらためて感謝申し上げます。

また、原発性高脂血症調査研究班では班長を務められました。大阪大学第二内科・垂井清一郎教授が班長として組織されたことが始まりです。私も班員として研究班に参加し、石橋班長のお世話になりました。学会や多くの研究会で一緒に、常に、静かに議論する、といった姿勢を学ぶことができました。感謝します。颯爽とした身のこなしは、若々しく、うらやましい！ 退任後はクリニックを開設される由、良く決断されたと思います。糖尿病は高血糖、インスリン、動脈硬化を中心に動いています。その中で脂質代謝に造詣の深い石橋先生が臨床の第一線で活躍されることは幅広い臨床の眼で臨床治療に貢献するものと思います。ますますのご活躍をお祈りいたします。

”Shun Ishibashi”が抜けている！

国立がん研究センター中央病院 総合内科(糖尿病腫瘍科)

大橋 健



石橋先生に初めてお会いしたのは1994年のことです。場所は、虎の門病院内分泌代謝科の部長でいらした村勢敏郎先生のお部屋でした。米国留学からの帰国のご挨拶に来られた石橋先生に、当時虎の門病院のレジデントだった私を村勢先生がご紹介下さったのです。学生実習での山田信博先生とのご縁で、私は翌1995年4月から大学院生として東京大学第3内科11研でお世話になる予定でした。石橋先生のお名前は山田先生・村勢先生から何度も伺っており、LDL受容体ノックアウトマウスの樹立という輝かしい業績を上げられたメジャーリーガーの颯爽としたお姿に、強い憧れを抱いたことをよく覚えています。

迎えた1995年4月1日は土曜日でした。前日に病院の寮から東大近くのアパートに引っ越し、深夜まで片付けをして爆睡していた私は、電話の音で目が覚めました。

「大橋くん？ どうした？ まだ来ないのか？」

なんと石橋先生からでした。研究室デビューは4月3日の月曜日からと勝手に思い込んでいた私は、初日から寝坊して遅刻することになってしまったのです……。思えばその日以来、実験も論文も、石橋先生にはずっと「どうした？ まだできないのか？」と言わせ続ける不肖の弟子となってしまいました。

さらに、考えられない失態もありました。はじめてAHAでポスター発表したときのこと。出発ぎりぎりようやく仕上げた私のポスターには、なんと”Shun Ishibashi”のお名前が抜けていたのです。会場で貼ったときにも気づきませんでした。気づいたのは、そのポスターの前で石橋先生と待ち合わせしていた留学時代のご親友、J先生です。気づかぬふりをしてくれればよかったのに、「君の名前がないぞ」と石橋先生に……。それを石橋先生から聞いたときのことを思い出すと、今でも冷や汗が出ます。大慌てで会場のPCコーナーで作直したのですが、石橋先生、本当に申し訳ありませんでした。

その後も遅々として研究の進まぬ私に、先生はしびれを切らしておられたのではないかと思います。それでも先生は待つて下さいました。11研で石橋先生から直々にご指導を受けられたことは、私の医師人生の大きな財産です。また、先生は自治医大に移られてからも折に触れて私のことを気に掛けて下さり、自治医大で講演する機会を頂戴したり、学会評議員にご推挙いただいたりと、常に温かく見守って下さいました。長年にわたり診療・研究・教育の最前線でリーダーシップを発揮してこられた石橋先生に敬意を表するとともに、この場をお借りしてこれまでに賜ったご指導に改めて感謝申し上げます。

石橋先生、大変お世話になりました

小山イーストクリニック

大橋 博

2001年に石橋俊先生が、自治医科大学内分泌代謝学の教授にご就任以来、公私ともども大変お世話になりました。

この度ご退任され、お祖父様が開業されていた埼玉県羽生の地で糖尿病甲状腺クリニックを開院されるとのこと、大変おめでとうございます。

私共は、1989年に小山市で糖尿病を中心とした内科クリニックを開業、以来外来では対応しかねる重症患者さんなどを自治医科大学病院内分泌代謝科でお願いして参りました。当院にとってとても心強い病診連携病院、後方支援病院として、当時の葛谷健教授を初めとし岩本安彦教授など、多くの教室の先生方には大変お世話になりました。

2001年、石橋俊先生が自治医科大学の内分泌代謝科教授に就任され、先生の親身になってお話し頂く、気さくなお人柄も相まってより一層の関連性が深まりました。患者さん紹介・逆紹介のみならず、非常勤医師派遣、糖尿病講演会や研究会など大変お世話になりました。深謝いたします。

特に印象に残っているできごとは、2010年11月に宇都宮市で行われた第29回関東甲信越地区糖尿病セミナーです。石橋教授が当番世話人となり、関東甲信越の糖尿病の患者さんの集会在宇都宮の栃木県総合文化センターメインホールで行われました。通常の学会とは異なり手作りの集会で、教室員のお手伝いや地域の糖尿病の先生や看護師さんなどメディカルスタッフあるいは協賛メーカーの担当者などの協力で行われた会でした。多数の糖尿病の患者さんが集まるので、様々なおもてなしと健康人の集会とは異なる細やかな対応が要求され、企画立案に様々なバリエーションが必要でした。

石橋教授の指示のもと我々も含め多くの糖尿病療養関係者が一致、協力して事故もなく盛会裡に幕を下ろすことができました。当日は石橋教授のこまやかなお心遣い、臨機応変のご対応、機転の速さを目の当たりにし、学問を離れた石橋俊先生のフットワークの軽さに、まさに"俊"と感じました。当日は奥様も舞台裏で細々とお協力いただき、教授夫人とは気づかず大変失礼致しました。ここにお詫び申し上げます。

この度、羽生の地で糖尿病甲状腺クリニックを開業されるとのこと、ある意味お膳立てされた大学とは異なり、一から自分で計画立案実行することとなり大変なこととは存じますが奥様のご協力も得て、クリニックの診療理念に沿う医療実現されると確信します。

東大陸上部の強さ、忙しい診療の合間を縫って日本百名山踏破を目指すフットワークの軽さ、計画性、極められた学問知識経験を持ってすれば、まさに鬼に金棒です。

今後のご活躍を期待するとともに、陰ながら応援させていただきます。



2010年4月糖尿病センター合同カンファ 大森安恵先生

2023年節分

ご退任記念の退任記念集によせて

京都大学医学研究科腫瘍生物学講座

小川 誠司

石橋先生、この度は多年に渡る自治医科大学 内分泌・代謝学分野 教授としてのおつとめご苦労様でした。自治医科大学との直接の関係のない、若輩の私が先生の退任記念集に寄稿させていただくというのは、大変に僭越ではございますが、先生から是非とのお言葉を賜りまして、一言、先生への感謝の気持ちとして、主として、東京大学第三内科時代の先生との思い出を記させて頂ければと存じます。

先生とはじめてお目にかかったのは、1988年に東京大学医学部を卒業して、当時、昨年ご逝去された高久史麿先生が主宰されておられた東京大学医学部第三内科で研修を始めた時でした。第三内科に入局する以前でしたから、多くの、色々な研究室の先生方にお世話になりました。石橋先生は、当時脂質代謝を専門としておられた山田信博先生のチームで、新進気鋭の医局員の一人として活躍されておられました。先生とは、病棟、あるいは赤十字(当時第三内科の医局の宴会?はそう呼ばれていました)でしばしばお世話になりました。わけでも記憶に残っているのは、年末の忘年会で六本木のディスコに言った折のことでしょうか。当時はバブル絶頂期でしたから、とくに華やかな記憶として蘇ります。先生とは6年以上年下で新米の私達、研修医に対しても、見下ろす感じではなく、大変にフラットに接して下さいましたので、頼りがいのある兄貴的な印象で、大変に親近感を覚えたわけでありました。そういった、先生のお人柄はおそらく、もっと年下の医局員、学生さんたちと接する際にも、同じような感覚で接しておられたのではないかと思います。

先生が自治医科大学に赴任されてからは、専門もことなり、また自分も京都大学の基礎の講座に赴任したこともあり、年賀状でのご挨拶は続いていたものの、直接にお目にかかる機会が無かったのでありますが、一昨年の秋、コロナもまだ2年目で世の中の規制もまだ厳しかったと記憶しておりますが、京都の学会にご出席された後に、小生の研究室を奥様とご一緒に訪ねて来て下さいました。本当にもう二十年ぶり以上になるでしょうか。しかし、お目にかかるとそのような長い時間が忘れられるように、話は思い出話に花が咲き、当初の予定の時間を大きく過ぎて、いろいろな先輩や後輩の先生のお話、自治医科大学でのご苦労のお話、とともに、以前と変わらず大変ご多忙の毎日を精力的に過ごしておられるご様子を伺うことができました。また、最後は共同研究のお話までいただきまして、わずかではありますが、先生と研究をご一緒する機会にも恵まれました。

昨年2022年の年末に自治医科大学ご退任のメールをいただいたおりに、時の経つことの早さに愕然とするとともに、大変寂しい気持ちがいたしました。しかし、退任されるとはいえ、先日お目にかかった際にも、まだまだ現役以上にお若く、とても退任と言う言葉がそぐわない思いがいたしております。実際、最近、共同研究に加えて頂いた論文も投稿にまで至った旨ご連絡をいただきました。今後とも我々是非後進のご指導賜ればと念じております。

石橋 俊 教授の御退任に寄せて

自治医科大学 名誉教授・客員教授

小澤 敬也



石橋 俊先生は2001年から自治医大内科学講座内分泌代謝学部門の教授を務められてきましたが、とうとう定年退職されるとのことで、大変お疲れ様でした。20年以上というのは長いようで、実はあっという間に過ぎ去ったのではないかと想像されます。私自身は2018年に現役をリタイアしましたが、最後の4年間は東大医科学研究所に異動になりました。つまり、私が自治医大の内科学講座血液学部門の教授職を神田善伸先生にバトンを渡してからは9年経ちますので、教授会や内科学講座の会議で石橋先生と顔を合わせる機会がなくなって、随分と経ちます。一方で、石橋先生も私も東大旧第三内科(三内)の出身ですので、三内時代のお付き合いを含めると、随分と長くなります。

東大三内は奇人変人が多いところで、私自身も直接的な影響を受け、大分苦労しました。一方、石橋先生は大変温厚な方で、奇人変人とは対極的な存在でした。おそらく、自治医大の医局でも同様だったのではないのでしょうか？ 外では温厚な印象の人でも、医局の中では大変厳しく医局員に恐れられている人の話を耳にすることがあります。石橋先生の場合は、そのような噂は皆無ですから、興奮されることも喧嘩をされることも本当になさそうです。

自治医大関係の行事では、21世紀COEプログラムによるThe 3rd Nikko International Symposium 2006で石橋先生にご協力いただきました。このシンポジウムでは海外から3名の演者を招待していましたが、この第3回の時は、石橋先生にRudolf Zechner博士(オーストリア)をご推薦いただきました。石橋先生と同じ研究領域の先生で、競争相手だったようです。石橋先生には、シンポジウム翌日の日光観光と、さらに鬼怒川温泉ホテルでのサテライト・シンポジウム(合宿のような感じで、主に若手に英語発表をしてもらいました)にもお付き合いいただきました。今では大変懐かしい思い出です。

石橋先生は、退職されてからは、「いしばし糖尿病内分泌内科クリニック」を開院され、地域の診療現場で益々ご活躍されるご予定と伺っております。これまでご多忙な生活でしたから、これからは余りご無理されず、ご趣味の山登りなどを大いに楽しまれることを願っております。



2006.10.26 COE 高久学長らと



2006.10.26 Rudi Zechner 先生らと

石橋俊先生のご退任を祝して

梶尾 裕

私は石橋俊先生には大変お世話になりました。石橋先生がこの度自治医科大学教授をご退任され、新たにクリニックを開業されるとのこと、心よりお祝い申し上げます。

石橋先生との最初の出会いは研修医の時でした。第3内科を回ったときに、研修医へのクルズスのときに、村勢敏郎先生からご紹介されて受けた動脈硬化の講義が最初でした。大変クリアーで精緻な講義で、先生のすばらしさを感じました。第3内科の研修医の時には専門的な見地から色々ご指導をいただき、研修医2年目に結婚した際には、わざわざ2次会にご出席いただき、お言葉を賜ったことは今でもありがたく感じています。

その後、私は第3内科(高久文麿教授)に入局させていただき、糖尿病のグループに入れていただきました。最初の専門研修の場は虎の門病院でした。虎の門病院では当時赴任されたばかりの村勢先生のもと、糖尿病の研鑽に励みました。その時、その後の進路について迷うことがあり、村勢先生のご配慮によって、第2研究室、第11研究室をご紹介いただきました。以後、山田信博先生や石橋俊先生、島野仁先生をはじめ研究室の皆さんには大変温かくサポートしていただきました。特に、石橋先生には、私が1998年夏に米国留学から大学に戻り、翌年春に自治医大大宮医療センター(金澤康徳センター長、川上正舒教授)に異動することになるわずか1年足らずの間でしたが、留学中に暖めていたインスリン分泌機構の未開拓の部分の研究を開始したいとご相談したところ、ウサギを使った抗体作成の段階から、細かなところにも心を配っていただいたことを、今でも忘れません。その後、研究室の集まりがあるときにはいつでも「元気でやっている？」とお声をかけていただき、その都度励まされました。思い返してみても、あらためて石橋先生のお人柄に触れた感じがしておりました。他の方も、同じような思いを抱かれたのではないのでしょうか。

私は2001年から国立医療センター(矢崎義雄総長、葛谷信明部長)(現在の国立国際医療研究センター)に異動しましたが、2014年から春日雅人理事長がご提案された新たなプロジェクトを立ち上げることとなりました。石橋先生にご相談したところ、快く施設としての参加をご承諾していただきました。これが、J-DREAMS(診療録直結型全国糖尿病データベース事業)の始まりです。石橋先生のお陰で、何とか多施設共同研究としての体をなし厚労科研をいただくことができました。研究ははじめからはすんなりとは進みませんでした。班会議のたびに色々アドバイスをいただき、何とか形ができて、翌年からAMEDの大型プロジェクトとして全国展開を進める事ができました。

最後に、私にとってうれしかったことは、2018年に石橋先生から、しもつけ糖尿病ミーティングでの講演の機会をいただいたことです。その時に特別講演として、石橋先生が日頃お世話になっておられる先生方の前で、このJ-DREAMSをご紹介できたことは、本当によかったと思いました。

改めて、石橋先生からいただいたご恩を思い返し、石橋先生のこれからのことを祝させていただきますと思います。

石橋俊教授の御退任に寄せて

公益財団法人朝日生命成人病研究所 所長

春日 雅人

石橋 俊先生は2001年より20年余にわたり自治医科大学教授として同大学内科学講座内分泌代謝学部門を主宰され、多くの素晴らしい成果を挙げられました。心からお祝い申し上げます。

石橋 俊先生は1984年に東京大学第三内科の脂質グループに入局されました。当時、私も米国留学から帰国して第三内科の第一研究室(糖尿病グループ)で診療・研究に従事していました。隣の第二研究室は内分泌グループでしたが、村勢敏郎先生が下垂体後葉の研究から脂質代謝に研究テーマを変更され、そこに山田信博先生が加わりお二人で新しい研究グループをはじめられたところでした。40年近く前のことですので記憶が定かでない点もありますが、山田先生が今度石橋君が研究グループに入ることになったと大変喜んでいたのが記憶に鮮明に残っています。山田信博先生は1983年にサンフランシスコのハーベル教授の研究室に留学されていますので、私の記憶違いかと思い石橋先生にこの辺の経緯をおたずねしたところ、脂質異常症の患者さんを受け持ったことでこの領域に興味を持ち、山田先生にはサンフランシスコでお会いして誘われ、グループのアットホームな雰囲気も気に入って入局を決められたとのことでした。その後1989年に石橋先生が留学されるまで、高久史麿先生が主宰されていた第三内科で共に内科学を勉強しました。2001年に石橋先生は自治医科大学教授に栄転されました。私は同じ代謝でも糖代謝を専門にしていたので、学会や研究会でもなかなか御一緒する機会はなかったのですが、私が関係しているAPDO (Asia-Pacific Diabetes and Obesity Study Group)という研究会があり、2007年のこの会に石橋先生が参加してくれることになりました。この年は初めての中華人民共和国での開催ということで多少不安はあったのですが、なかなか開催場所が決まらず、結局上海から車で4-5時間かかるChina Medical City, Taizhoでの開催となり、石橋先生に非常に御迷惑をおかけしてしまいました。このような状況にもかかわらず石橋先生にはAdipocyte lipolysis and metabolic syndromeというタイトルで立派に御講演いただいたのが印象に残っています。また、何かの機会に石橋先生と雑談をしていて、石橋先生の趣味がランニングとおうかがいしたのも非常に印象に残っています。陸上部に所属していた学生の頃から走っていて、その後もその習慣を継続されており、フルマラソンにも7-8回出場されたとのこと、まさに筋金入りのランナーと拝察しました。いつも姿勢正しく清々しい印象の石橋先生ですが、これはランニングの効果かも知れません。

御退任後は、羽生市のご祖父様が開業されている地で「いしばし糖尿病内分泌内科」を開院されるとお聞きして、非常に驚きましたが、考えてみると石橋先生らしいのかなと思っています。医師としての原点に立ち返って、地域医療に尽力されることは誠に素晴らしいと思います。今後の一層の御活躍を期待しています。



2007年APDO会議終了後上海にて

石橋先生と私

周防大島町立東和病院 内科

勝部 聡太

石橋先生、ご退官おめでとうございます。石橋先生との思い出は、同期の平良亘君(沖縄県)と古村芳樹君(富山県)と3人で参加させて頂いた学生向けセミナーが印象深く残っております。英語が不得手であった私は宿題の解説に四苦八苦しておりましたが、石橋先生の解説は至極明快であり、セミナー受講後は『そういうことだったのか!』という体験の連続でした。セミナーの中で最も印象的であった内容は骨粗鬆症の項目になります(JAMA.2004 Dec 15;292(23):2890-900.)。身長が縮むことでも推測は可能であるが、身体診察では肋骨骨盤間距離が狭くなる(通常では4横指入るが、2横指以下の場合では陽性尤度比3.8)というものでした。身体診察から病態を推測し鑑別を挙げることの重要性を理解させて頂きました。このことは医師人生、特にへき地診療所での診療に大変生かされています。また我々セミナー受講生は石橋先生のご自宅へお招きに気づかりましてお庭でバーベキューをご一緒し、大変楽しい時間を過ごさせて頂きました。大学卒業後は一度だけお会いする機会がありました。山口県下関市で学会(2015年5月、第58回日本糖尿病学会年次学術集会)になります。石橋先生のシンプルで力強い講演を拝聴した後で、隣接する魚市場(唐戸市場)にあるお寿司屋さんに入り食事をさせて頂きました。当時初期臨床研修医2年目の私は医師として社会人として多くの悩みを抱えておりましたが、石橋先生は私の話を親身になって聞いて下さいました。そんな私自身ですが今年度で無事義務年限を終了し、令和5年度からは埼玉県で勤務を予定しております。石橋先生も埼玉県で開業されると伺っており、同県で再びご一緒させて頂くことを大変うれしく思います。転居後は義務年限終了の報告を兼ねて一度御挨拶に伺わせて頂きます。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



石橋俊先生の自治医科大学教授退任を祝して

公益社団法人地域医療振興協会 会長 川上 正舒

自治医科大学の内分泌代謝科は、初代の吉田尚先生から葛谷健先生、斎藤寿一先生とそれぞれ内分分泌学会、糖尿病学会の重鎮が主宰されたこの分野での日本を代表する教室ですが、石橋先生は、若くしてこの名門の教室を継承され4代目の教授として立派にさらなる発展を遂げられたことをお祝い申し上げます。先生は、糖尿病やいわゆる内分泌疾患に留まらず、脂質異常症の病態解明と治療の開発に研究を挙げられ、輝かしい業績を挙げられました。

今でこそ高コレステロール血症は動脈硬化症の原因として広く認知されておりますが、コレステロールが動脈硬化の原因であると明確になったのは比較的最近のことで、1970年前後にはコレステロール負荷の動物で動脈硬化が促進するというようなことが一流医学雑誌に報告されるような状態でした。この領域の大きなbreakthroughはMS BrownとJL Goldsteinが家族性高コレステロール血症の研究から、LDL受容体を発見し、コレステロールと動脈硬化の関係をその機序を含めて極めて明確にしたことが大きいと思いますが(1985年ノーベル医学生理学賞)、これも石橋先生が医学部を卒業されるわずか6年前のことで、先生が東京大学で研究を始められた頃は、脂質代謝異常は内分泌代謝領域の中でも主要な分野という認識は無かったように思います。石橋先生が所属された教室では村勢敏郎先生(現沖中記念成人病研究所理事)がトロント大学のG Steinerの研究室から帰国され、糖尿病グループの山田信博先生(元筑波大学学長)を誘って東大病院ではじめての高脂血症の専門外来を始められたばかりの時期でしたので、この小さな研究グループに飛び込まれた石橋先生はこの時点から非常に開拓精神に富んでいたのだと思われま

す。その後、スタチンの発見から高コレステロール血症の治療が可能になり、この領域が大きく発展したことは周知の通りであります。石橋先生も村勢先生とリポ蛋白リパーゼの研究からアポリポ蛋白へと研究を挙げ、さらには、米国留学から帰国された山田先生の指導で分子生物学の手法を取り入れた研究へと発展されましたが、その後、自らもBrown & Goldsteinの研究室に留学され、LDL受容体のノックアウトマウスを用いて、もう1つのLDL代謝経路の存在を示すなど非常に多くの重要な成果をあげられました。自治医科大学に赴任後も教室に分子生物学的研究手法を導入し、多くの後進の指導にあたられたことは教室員はじめ大学の皆さまがご存知の通りです。

診療面でも脂質異常症はもとより、糖尿病領域では葛谷先生以来の伝統を引き継いでいる長坂昌一郎先生(現昭和大学教授)と共に文字通り栃木県の内分泌代謝疾患の中心的医療施設としての役割を継続してこられました。

これからは、より地域に密着した医療に守備範囲を広げられると伺っています。定年になられたとは言え、未だまだお若く、山歩きで鍛えたお体も非常に健康とお見受けします。益々のご活躍を期待いたします。

川上正舒

石橋 俊先生の御退任に寄せて

自治医科大学 名誉教授

葛谷 健

石橋 俊先生が自治医大に赴任されたのは、ついこの間のように思っていたので、先生から来年定年退職するというメールをいただいたとき、月日のたつ早さに驚いた。

先生は 1982 年に東京大学医学部を卒業後、東大医学部第 3 内科に入局され、以後第 3 内科の糖尿病・代謝グループに属して研究・診療に従事された。糖尿病・代謝グループには赤沼安夫先生、山田信博先生たちを中心とする脂質代謝研究のサブグループがあり、石橋先生はこのグループに入って研究の手ほどきを受けられた。その後 1988 年から 1994 年にかけて米国テキサス州ダラスの Department of Molecular Genetics, University of Texas Southwestern Medical Center に留学され、分子生物学的研究方法を身につけられた。そのときの指導者はコレステロール受容体の研究でノーベル賞をもらった M. Brown、J. L. Goldstein である。石橋先生は LDL 受容体ノックアウトマウスを作成し、それがヒトの家族性高コレステロールのホモ接合体と類似の所見を呈することを明らかにした。帰国後も分子生物学的研究を駆使してリポ蛋白の機能などを研究され、その一つとしてホルモン感受性リパーゼノックアウトマウスではオスが不妊症になること、などを見いだされた。

2001 年東京大学講師を経て自治医科大学内科学講座第 4 代の内分泌代謝学教授に就任された。その後も脂質代謝の研究を続けられ、いくつかの遺伝性脂質代謝異常症を見つけるなど、基礎的研究のみならず臨床面でも成果を挙げられた。その研究成果の多くは英文誌で発表されている。

分子レベルの研究の一方、日常の診療では、栃木県糖尿病協会支部長に就任され、栃木県の糖尿病患者組織の指導者として、糖尿病患者の治療レベルアップに貢献された。その後、自治医大に糖尿病センターが設けられることになり、先生は初代センター長として活躍された。

学会活動としては、日本動脈硬化学会、日本糖尿病学会などで理事や評議員などの役員を務められている。さらに次年度の日本動脈学会長として、学術集会を宇都宮で開催される予定とお聞きしている。

自治医大の同じ教室前任者として感謝していることは、自治医大内分泌代謝科の同門会を設立されたことである。多くの医科大学と異なり、自治医大の卒業生は出身した都道府県で初期研修を受けるので、医局はいつも人手不足がちとなり、先輩後輩のつながりもできにくい状態にあった。先生は教授就任直後から同門会設立を強く望まれていたようである。同門会ができたことは教室の成熟の一つの表れといえるが、石橋先生の熱意がなければ、同門会は今でも存在しないか、できたとしても設立はずっと遅れたことだろう。

同門会誌の中で石橋先生は夢を語っておられ、未来の医療を変えていけるような診療、たとえば未だ評価の確定しない治療の検証や栃木県の糖尿病診療レベルの向上などを挙げておられる。先生が在任中には種々の新しい糖尿病薬が開発され、治療の選択肢が広がった。新しい薬剤の使い方が複雑になってきた一方で平均的な糖尿病診療のレベルは改善してきたように思う。

お聞きしたところでは今後、先生は出身地の埼玉県羽生市で内科医院を開業されるとのことである。立ち位置は変わってもこれまでの知識・経験を生かして地域の医療の発展に尽くしていただけるもの期待している。

石橋俊教授のご退官を祝して

群馬大学名誉教授
藤岡市国民健康保険鬼石病院地域連携医療センター長

倉林 正彦



石橋俊先生、ご退官、誠におめでとうございます。石橋先生も定年をお迎えになるとのことで、時の流れの速さに驚いているとともに感慨深く思い起こしております。私の「退官記念誌」に先生から頂きましたご寄稿文にもありましたが、先生とのお付き合いはある患者さんがきっかけでした。研修医1年目に私が受け持っていた期間には代謝異常の明らかな原因が特定できなかったのですが、引き継いでいただいた石橋先生は、ミオパチーが基礎にあり、その結果、骨格筋由来のリポ蛋白リパーゼの活性低下と高TG血症をきたしたことを解明して、内科学学会誌にまとめられました。この症例との出会いによって先生がその後、脂質異常症の基礎と臨床の道に進まれたとすれば人生の妙味を感じます。

石橋先生とは、毎年1月に東京で「北関東心血管内分泌リサーチミーティング」でお会いすることが恒例になっていました。北関東の3大学の気の置けない仲間内で研究の面白さを実感する楽しい会でした。石橋先生や島野仁先生(筑波大学教授)と東京大学第三内科で基礎研究に没頭していた若き日を思い出す時間であり、また、討論後のワインを飲みながら談笑したり、教授職の苦労話をして癒されたりする時間であり、私たちにとって至福の時間でした。また、ダラスやニューオーリンズでのAHAでおいしいステーキをご一緒したことも楽しい思い出です。

石橋先生は Joseph Goldstein 教授、Michael Brown 教授のラボにて LDL 受容体の欠損マウスの作製とアデノウイルスベクターを用いた LDL 受容体の補充による LDL-C の低下を実証し JCI に報告されました。この論文は、世界の脂質研究者をうならせました。遺伝子欠損マウスの作製や遺伝子導入が現実可能な技術とはなっていなかった時代ですから、ずば抜けて先駆的で感銘しました。その当時、私は南カリフォルニア大学に留学しており、ラボの同僚がエリスロポイエチン cDNA を含むプラスミドベクターをマウス骨格筋へ注入して貧血を改善させる研究をしており、先生のお仕事の先駆性はよく理解できておりました。自治医大では、HMG-CoA 還元酵素、LCAT、マクロファージや骨格筋のリポ蛋白リパーゼ(LPL)、cholesterol ester hydrolase、CETP など脂質代謝に関わる多数の酵素の生体での役割を解析され、脂質異常症のヘテロな病態を解きほぐしてくれる感がありいつも勉強させていただいておりました。冒頭の東大病院での患者さんとリンクしているとも勝手に想像していました。

石橋先生と私は同世代で同じ東大第三内科の同窓生ですが、なぜかそれ以上に親近感を持たせていただいております。先生とはいろいろな場面で「馬が合う」と失礼ながら感じています。先生のご出身が埼玉県で私と同じ公立育ち、ということも一因かなと思っています。ご退官後は埼玉県羽生市でクリニックを開院されるとの由、ご選択に大変共感しています。お忙しい毎日になるかと思いますが、どうぞお元気で、奥様とのゆっくりとした時間もお楽しみください。私は退職後、故郷の片田舎の公立病院で入院患者も持ちながら一臨床医をしています。フレイルな高齢者を診ておりますと、医療の限界を感じずにはられません。そんな悩みを解消してくれるのがサイエンスであると思っています。これからもまた一緒に盛り上がりましょう。この度は、誠におめでとうございます。また、大変ご苦労様でした。

Professor of Medicine

Fredric B. Kraemer

Division of Endocrinology, Gerontology and Metabolism, Stanford University

I am very pleased to be able to have the opportunity to contribute to the tribute for Dr. Shun Ishibashi on his retirement and in doing so will primarily provide an account from a personal perspective. In trying to remember when I first met Shun, I believe that we first met at a Deuel Conference for Lipids that took place in California when he was a postdoctoral fellow with Mike Brown and Joe Goldstein at UT Southwestern in Dallas. However, it was not until years later after he had returned to Japan and established his own lab and research program first at Tokyo University and then at Jichi that we started to interact fairly regularly. Actually, it was the generation of hormone sensitive lipase (HSL) knockout mice by Shun in the late 1990s (published in 2000) that prompted us to start, at least from my perspective, a very fruitful collaboration, since I had been investigating HSL for several years prior to then. Shun and I were able to publish a number of papers over the ensuing years on HSL, and the HSL deficient mice generated by Shun were an invaluable resource for my lab as we continued to pursue studies of HSL. In addition, I had the pleasure and benefit of having several trainees from Japan come to my lab at Stanford based on recommendations of Shun. They all were quite productive, wonderful to get to know as people and only strengthened our ties. Throughout this time, I obviously benefited greatly from Shun's scientific insights, his willingness to generously share reagents, and his friendship.

I would be remiss if I did not mention Shun's kindness and generosity when he hosted my wife, daughter and me for a visit to Jichi Medical University and Japan. We had an absolutely wonderful and enjoyable time. Not the least of which was due to Shun. Regrettably, I don't think that I ever fully reciprocated during his visits to Palo Alto.

Finally, as someone who recently stepped down as Chief of the Division of Endocrinology at Stanford after holding the position for over 20 years, I can relate to some of the issues outside of research questions that Shun has had to deal with over the past 22 years as chair of the Division of Endocrinology and Metabolism, both good and bad. Thus, I am sure that it is with mixed feelings that Shun approaches his retirement, but I am certain that he takes great pride in the people whom he has hired and in the program that he has built.

Shun, I wish you all the best in your retirement and hope you truly enjoy this next phase of your life.

In this essay, I want to share with you some personal reflections and impressions of my friend and colleague, Dr Shun Ishibashi. I will also discuss his scientific contributions, though my coverage of this work will of necessity be incomplete. Dr Ishibashi has remained remarkably prolific throughout his scientific career, and even the generous space I have been allocated by the editors would be insufficient to provide a comprehensive discussion of each aspect of his work. I have known Dr Ishibashi for a long time – we first met in 1990 when we were post-doctoral fellows in the Department of Molecular Genetics at UT Southwestern Medical Center in Dallas, Texas. We were both new arrivals in the USA, but it quickly became apparent that Shun had, at that time, a much stronger scientific training than me. He was already adept at molecular biology and had published several papers, some of which I had read even before my arrival in Dallas. Over the next 3 years, as I grew more familiar with his work, it became obvious that his papers were often at variance with standard orthodoxy. He looked at each question from a different, usually novel perspective, taking seemingly unrelated data from disparate fields and applying it to his own experiments.

At the time we met in Dallas, Shun had spent enough time in the US to be able to look at American culture with both a Japanese and an American understanding. At the same time, he could look at Japan with a clear, dispassionate view and without being self-conscious. That was a great education for me because I got to see both cultures from his perspective.

Impressions of Shun's scientific contributions

Shun's research can be considered in three phases:

1. Early work 1982-1989 (Pre-Dallas)

Before coming to Dallas, Shun had shown that the cytokine monocyte colony-stimulating factor (M-CSF) decreased plasma levels of cholesterol in LDLR-deficient rabbits by about 35%. In these experiments the lipoproteins were taken up primarily into the spleen and bone marrow, rather than the liver, and the uptake was independent of LDLR activity. M-CSF treatment also caused a remarkable increase in cholesterol esterification in macrophages. These findings strongly suggested that i) cytokines such as M-CSF and GM-CSF play an important role in cholesterol metabolism in macrophages, and ii) M-CSF increased the activity of a LDLR-independent pathway that promoted the clearance of modified LDL from the circulation. This observation remains interesting and important because it implies an alternative to the LDLR pathway for clearance of lipoprotein remnants from the circulation, and that the pathway could be targeted for therapeutic intervention via M-CSF.

Shun then performed a series of mechanistic studies which provided direct evidence that M-CSF increased the uptake of modified low density lipoproteins (acetyl-LDL) by monocyte derived-macrophages. The increased uptake of modified LDL in the M-CSF treated-cells was associated with an increase in binding of acetyl-LDL to a protein of ~240kD which they initially called SREC1 (scavenger receptor expressed in endothelial cells). The formal gene name was later changed to SCARF1 (Scavenger receptor type F number 1) to indicate its position in the scavenger receptor lineage. Studies of SCARF1 knockout mice showed that inactivation of SCARF1 largely abolished the uptake of modified lipoproteins by macrophages, but had little effect on plasma levels of cholesterol or triglyceride. This result highlights an important limitation of knockout mice as a validation test for biochemical purification or genetic association.

2. The Middle Period (Dallas 1989-1994)

In 1989 Shun moved to Dallas to work with Joachim Herz in the Brown and Goldstein group. Joachim was just starting to get targeted gene knockout methodology established in his laboratory. Shun's goal was to learn how to knock genes out in mice. This would be a simple feat today but in those pre-CRISPR days it was a major challenge. One difficulty was that the transition from "test tubes" to mice required a complete shift in thinking and in methodology. The classical biochemistry-based approaches that he had learned earlier were rigidly focused on proteins whereas the skillset he would need to make genetically manipulated mice was almost entirely molecular. In the molecular laboratory, the nucleic acids reigned supreme and almost all methods are based on base-pairing.

Shun started his Dallas scientific adventure by knocking out the LDL receptor in mice. In humans, mutations in the LDL-receptor cause familial hyper-cholesterolemia, the most common and most severe of the genetic hyperlipidemias. He showed that LDLR knockout mice have very high circulating levels of LDL-Cholesterol, and that they accumulate cholesterol deposits in the skin and blood vessels, strongly reminiscent of human FH. Challenge with a high cholesterol diet resulted in massive xanthomas and atherosclerosis, which could be restored to normal by restoring LDL receptor expression in liver alone. The closely matched phenotypes of LDLR deficiency in humans and mice provided an encouraging proof-of-principle study for the gene knockout technology.

A primary objective of generating these mice was to test the hypothesis that LRP1, a gene cloned by Joachim Herz, was the functional chylomicron remnant receptor.

The most definitive test for the proposal that LRP1 is the chylomicron remnant receptor would be to knockout LRP1 and test the ability of LRP1- mice to clear chylomicron remnants. This conceptually simple experiment was, of course, the first one that was tried, but LRP1-null mice did not survive long enough even to provide cells for immortalization. The chylomicron remnant receptor had proved elusive to all approaches used so far. There was consistent evidence for a LDL receptor-independent pathway; LRP1 was a major contender. In subsequent studies, Brown and Goldstein and others showed that mice lacking ApoE had much higher plasma

levels of cholesterol than did LDLR knockout animals. Based on these and other findings they proposed a two-receptor model for chylomicron remnant clearance.

LDLR and LRP1 remain the prime candidates for clearance of chylomicron remnants.

Sticking with membrane proteins that were strongly expressed in liver and could potentially function as chylomicron remnant receptors, Shun then knocked out the asialoglycoprotein receptor subunit 1.

Asialoglycoprotein receptor is an endocytic receptor that is expressed predominantly on the sinusoidal surfaces of hepatocytes. Its function remains largely unknown. The knockout mice were completely unable to clear asialoorosomucoid, a high affinity ligand for asialoglycoprotein receptor, but they do not accumulate desialylated glycoproteins or lipoproteins in the circulation. Therefore it seems unlikely that the asialoglycoprotein plays a significant role in the clearance of remnant lipoproteins.

Shun then collaborated with David Russell to knock out cholesterol 7 α hydroxylase (Cyp7a1). Cyp7a1 catalyzes the first step in the biosynthesis of bile acids from cholesterol. Cyp7a1^{-/-} mice exhibit a complex phenotype consisting of abnormal lipid excretion, skin pathologies, and behavioral irregularities, and about 90% die within a few weeks after birth. The remaining 10% of animals recover from these symptoms and have normal life spans. Surviving mice had several 7 α -hydroxylated bile acids in bile, including cholate, chenodeoxycholate and β -muricholate. These data suggest that a second 7 α -hydroxylase is present in Cyp7a1^{-/-} mice that is induced at three weeks of age and compensates for the missing cholesterol 7 α -hydroxylase activity. David Russell subsequently proved that the residual cholesterol 7 α -hydroxylase activity is conferred by a related enzyme (CYP7b) that will accept side-chain hydroxysterols as substrates.

During his years spent in Dallas, Shun made important contributions to our understanding of dietary lipid metabolism. His extensive training in the methods required to generate genetically engineered mice formed the basis of his career as an independent scientist.

3. Independence (Post-Dallas)

Shun returned to Japan in 1994. He very quickly established a laboratory to generate and study genetically manipulated mice. At that point he faced the critical decisions that confront everyone who embarks on an independent scientific career: What was the fundamental question that would define his career? In keeping with his non-conformist inclination, Shun elected to knock out genes that most people would not consider. One prime example was hormone-sensitive lipase (HSL). HSL was uniformly accepted as the major insulin-responsive, intracellular lipase in adipose tissue and liver. To the great surprise of almost everyone in the field, genetic ablation of HSL (by Shun and colleagues), had little effect on fat metabolism in liver or in adipocytes. In reporting these results the authors concluded with the modest claim that “HSL is required for spermatogenesis but is not the only enzyme that mediates the hydrolysis of triacylglycerol stored in adipocytes”. Subsequently Rudy Zechner showed that ATGL (also known as PNPLA2) was the major triglyceride hydrolase in adipose tissue.

A second and perhaps even more extreme example is Shun's decision to knock out HMGCR, an enzyme that is essential for the biosynthesis of cholesterol. The cholesterol biosynthetic pathway was one of the most

thoroughly studied pathways in biology, and HMGCR was the most thoroughly studied enzyme in the pathway. Whole body knockout of HMGCR was lethal as expected, but by using conditional knockout methods Shun was able to generate mice in which HMGCR was knocked out only in selected tissues, such as liver, or muscle. Liver-specific deletion of HMGCR resulted in hepatic steatosis with jaundice and hypoglycemia. Deletion of the gene in muscle resulted in rhabdomyolysis. The development of rhabdomyolysis in mice with cholesterol-depleted muscle due to loss of HMGCR parallels the rhabdomyolysis that develops in some humans treated with statins. Therefore these mice may provide a genetic model of statin-induced myopathy.

Personal Reflections

If I had to come up with a single word to describe Shun it would be “maverick”. A maverick is an independent-minded individual. The term applies both scientifically and to Shun’s life outside the lab. As I got to know him better it became obvious that what appeared to me as a perennially orthogonal perspective was not a deliberate attempt to be different or to stand out. Rather it arises from a desire to confirm assumptions underlying any scientific argument. He obviously recognized this characteristic in himself and would often use gentle humor to calm intense discussions. Shun was very hard-working, very focused and very competitive. Yet at the same time he was very generous with his time and kind with his humor. I have many fond memories of the lovely hospitality shown to me by both Shun and his wife Junko, both in Dallas and in Japan.

One theme that dominated many of our discussions was differences between Japanese and American societies, how these differences arose, and how they affected individuals in each society. I should note that the prevailing societal context was strikingly different from the one that prevails today. The Japanese economy was booming, and there was a palpable sense that the USA, burdened as it was with an inadequate school system, crippling Government debt, and overly generous trade policies, would never catch up. There was also a strong sense in many quarters that at least part of this success was the misappropriation of American technology by technologically nimble Japanese companies, like Sony and Toyota.

Shun had two perspectives on these issues that have remained with me. The first was that many of the characteristics of Japanese culture that outsiders found so impressive: politeness, honesty, industriousness, were maintained by very strong social disapproval and even ostracism of those who did not conform. He illustrated this point with an aphorism. In the USA, one uses the phrase “The squeaky wheel gets the grease”; a celebration of individualism at the expense of conformism. In Japan, the corresponding wisdom would be “The nail that sticks up gets the hammer”; clearly not an exhortation to individualistic behavior. Thus societal compliance came at a cost to the individual.

Shun’s second perspective was paradoxically that “people are people”, much the same (on average) everywhere. One reason American and Japanese societies appeared so different is that Japanese society has

evolved very formal rules that explicitly guide and govern many aspects of day-to-day interaction. By contrast, interactions among Americans have fewer formal rules, but also fewer guidelines for appropriate behavior. Shun believed that ultimately, American and Japanese societies have the same overall goals. Just different ways to attain them.

There is little doubt that the biomedical science community lost one its most enthusiastic participants with Shun's retirement from research. From my perspective, Shun looks and sounds very much like the man I met in Dallas more than 3 decades ago. He remains intensely curious and fascinated by new ideas and information. I will watch with interest to see where his energies and interests take him next.

SOUTHWESTERN MEDICAL CENTER
Department of Molecular Genetics

Joseph L. Goldstein
Michael S. Brawn

Dear Shun:

Congratulations on your retirement. We still remember your arrival in our laboratory when we had just begun to use the new technique of gene knockout in mice. Your knockout of the LDL receptor gene was a major advance. Before your experiment, some people refused to believe that cholesterol was the cause of atherosclerosis. They based this false idea on the observation that feeding cholesterol to mice or rats does not cause atherosclerosis. We thought we knew the reason: livers of mice and rats express high levels of LDL receptors so the plasma LDL level does not rise when cholesterol is fed.

You proved this theory correct when you knocked out the LDL receptor gene in mice. When the knockout mice were fed cholesterol, their plasma LDL rose dramatically, and they developed severe atherosclerosis. Your 1993 *Journal of Clinical Investigation* paper describing the knockout mice has been cited 1951 times. Your 1994 *Journal of Clinical Investigation* paper describing the resultant atherosclerosis has been cited 887 times. Both papers had a major influence on public health. They helped convince the most skeptical people that LDL cholesterol is the cause of atherosclerosis.

When you returned to Japan you brought the gene knockout technology with you. Over the next 30 years you used this technology in clever ways to make many discoveries regarding lipid metabolism. We are proud of you.

We wish you great satisfaction and great happiness on your retirement.

Yours sincerely,



Michael S. Brown

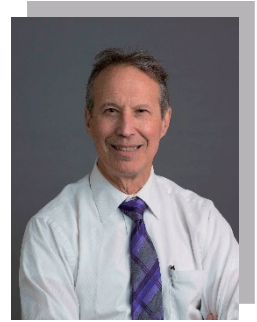


Joseph L. Goldstein

B16/016

Director, Division of Endocrinology, Diabetes and Metabolism
NYU Langone Health

Ira J. Goldberg



I have known Shun for decades and am impressed that he could chair an endocrinology division for over 20 years. Although I have read many of his papers, running a Google search I see he has over 400 publications. Wow! What I know best are his studies on lipoprotein lipase enzyme and atherosclerosis performed along with Dr. Hiro Yagyu and others. They showed that a deficiency of this enzyme in macrophages reduces atherosclerosis. Subsequently, they published that the mice also have reduced obesity on a high fat diet and the reduced fat mass associated with fibrosis. His other research work explored the interaction of cholesterol and islet cell function, circadian rhythms, HMG-CoA reduction and bone marrow, and cholesterol ester hydrolase.

Most impressive to me, is that Shun had the time to write a series of clinical papers on response to fibrates, mutations in MTP and abetalipoproteinemia, Kallmann syndrome, LCAT deficiency, and factors associated with the development of diabetic retinopathy. He has done this while also participating in some of the most important large-scale trials of lipid-altering drugs. How did he find the time to do all this and still direct a busy clinical division? Is he such a good manager that he could do all this and still have time to sleep?

I had visited Jichi once and look forward to doing so again this summer and hearing about how you will hopefully be enjoying some well-earned time away from work.

Good luck,

February 15, 2023

A handwritten signature in black ink, appearing to read "Ira J. Goldberg". The signature is fluid and cursive, written on a white background.

石橋先生、つつがなく定年を迎えられご退任されますことをお祝い申し上げます。

石橋先生とは、私が東大第3内科第11研究室(山田信博室長)でお世話になったのがご縁です。といっても私は老年病科に所属しており、脂質、動脈硬化の研究をするためにお世話になった1989年~92年当時石橋先生はダラスにご留学中であつたため、実際にお目にかかったのは石橋先生が帰局され、私が老年病科に戻った1993年以降のことです。私が11研にお世話になった頃は、島野先生(現動脈硬化学会理事長)や後藤田先生(現杏林大学医学部生化学教室教授)をはじめバリバリの脂質研究者が日夜(本当に寝ていませんでした)研究に没頭されていた頃であり、その先を行く石橋先生はいったいどういう人だろうとあたかも天井人のように想像していたのを覚えております。山田信博先生が筑波大学に異動された後、石橋先生が11研の室長を引き継がれた際、想像以上のハードワーカーでいらつしゃつたので、天井人というより宇宙人ではないかと畏怖の念すら持つようになったことも記憶しております。

それが動脈硬化学会の専門医制度委員会でご一緒させていただくようになってからは、実は冗談好きな気さくな先生でいらつしゃることがわかり、最近はややく下界でお付き合いさせていただけるようになりました。石橋先生には問題作成委員長として良問を作成していただき大変感謝する一方、これからどなたを頼りにすればよいのか心細さを感じております。

プライベートなエピソードとしては、拙宅の隣にあるイタリアンレストランに石橋先生ご夫妻は時々いらつしゃるようで(一度高久先生にもお目にかかりました)、その際には私のことを気にかけてくださり、突然店に来るようお誘いを受けたのは懐かしい思い出です。奥様も非常に楽しい方で、なるほど石橋先生の気さくさはこの夫婦関係の中で築かれているのかと勝手に想像しております。

普段は冗談好きな気さくな下界人、仕事となると怖い宇宙人、これが私の石橋先生像です。ご退職後もうぞ呼び鈴を鳴らしてください。

冷静に本質を見つける:石橋俊先生の科学

東京大学先端科学技術研究センター がん・代謝プロジェクトリーダー

児玉 龍彦

石橋先生に初めてお目にかかったのは、先生が東大病院で研修された昭和 57 年ではないかと思います。医師として冷静で科学的であり、また人間的には温かく信頼できる素晴らしい先生でした。

私が MIT に移動する直前に内科の脂質の研究室にはいられ、1989 年のノーベル賞受賞後のブラウン、ゴールドスタイン研に移られ、発生工学を駆使して LDL 受容体ノックアウトマウスを樹立され世界に貢献されました。ダラスにご訪問してご自宅で歓談したことが懐かしく思われます。ご指導を受け、*Nature* に共著の論文も発表させていただきました。

御帰国後、脂質代謝に関わる酵素の研究でマウス発生工学を駆使され、重要な成果をあげられ、自治医大の教授にご就任されました。臨床面でも、中性脂肪の代謝とその疾患の解明にも大きな役割を果たされます。

そして、脂質代謝異常の新たな治療薬である選択的 PPAR α モジュレーターの開発をご一緒に進めました。石橋先生が中心になりこの薬の臨床試験を勧められ、フェーズ 3 の大規模臨床において容量依存的な肝機能の改善のエビデンスを明らかにされ、脂肪肝の治療への道筋を開かれます。

石橋先生のお仕事は科学をしっかりした見通しの上に着実に一步一步積み重ねて行き、大きな発見に辿り着く、とても大切な役割を果たされていると思います。複雑な人間の代謝を解き明かすため、いつも穏やかで、温かく、患者さんのための医学医療に貢献されてきた石橋先生の姿勢に多くのことを学ばせていただいております。

この度、地域医療にさらに本格的に貢献される挑戦を始められること、心からお喜び申し上げ、応援させていただければと考えております。一層のご活躍に期待しております。



2012 年 12 月日本内分泌学会地方会

石橋俊先生のご退任に際して

杏林大学医学部代謝生化学教室 後藤田 貴也

石橋俊先生のご退任に際し、感謝の念を込めて拙文を寄稿させていただきます。

石橋先生は私の内科研修医時代の最初の指導医(中ベン)であり、この出来の悪い研修医にとっても根気よく付き合ってくれました。当時、石橋先生は比較的口数が少なく朴訥な雰囲気を感じ、少しシャイな性格もあり決して押し付けるような断定的な物言いをせず、不出来な研修医にとっては心地よくてありがたい指導医でした。患者さんの治療に関する質問等で夜遅く研究室(東京大学旧第三内科2研)をお伺いすると、いつも他に誰もいない机の前でじっと腕組みして前を見つめ座っていた姿が思い出されます。当時の私にとって研究は未知の世界でしたが、夜遅く静寂に包まれた研究室で一人思考を巡らせる孤高の姿に初めて研究の世界に対する興味が芽生えました。私が旧第三内科に入局したのも、やはり石橋先生から受けた影響が少なくなかったものと思います。

東京大学の研究室(旧第三内科2・11 研)でボスの山田信博先生のもと、“狭いながらも楽しいわが家”を地で行く弱小研究室で苦楽を共にさせて頂いたことは、私にとってもかけがえのない思い出です。メンバー全員で切磋琢磨し、なかでも互いに歳が近いと、石橋先生、島野仁先生、そして私を“だんご三兄弟”と呼んでくれる方がいましたが、三兄弟の長男として石橋先生にはいつもボスや周囲からのプレッシャーの風除けになって頂き感謝しておりました。

2・11 研のヘッドとなられてからは、2研の大規模リノベーションや発生工学研の立ち上げなど、私の存じえないような様々なご苦勞があったものと思います。そのような中であってヘッドとしての石橋先生は、まさに「剛毅木訥は仁に近し」で、ぐだぐだ言わずに懸命に頑張る自分の背中でメンバー全員を引っ張ってくれる頼もしいリーダーでした。

ご退任後はおじい様ゆかりの地でご開業されると聞き、最初は正直驚きましたが、やがて合点が行きました。石橋先生は昔から研究の最前線にあっても常に臨床的な視点を大切に、それが臨床医として活躍されたおじい様とお父様に由来していること、そして、都会育ちでありながらどこかカントリーボーイ然とした石橋先生のルーツがご開業の地にあることを知り、石橋先生にとって退任後の開業は極めて自然な流れであることが理解できました。

個人的には、一緒に海外での学会の夜の部(?)で羽目を外したことや、家族ぐるみの軽井沢旅行などとても懐かしい思い出です。今度は、自然豊かなクリニック周辺のゴルフ場などでぜひ一緒させて頂ければ嬉しいです。

最後になりましたが、石橋俊先生の自治医科大学の無事ご退任を祝し、新クリニックのご繁栄をお祈り申し上げます。

石橋 俊教授のご退任に寄せて

自治医科大学名誉教授

齊藤 寿一



平成13年の春に私は後任として自治医科大学の内分泌代謝学講座主任教授が内定した石橋 俊先生と、教室の活動や大学における役割など引継ぎをかねた懇談の場を持ったことをつい最近のこの様に思い出します。米国での研究生活から帰国された気鋭の研究者として脂質代謝を中心とした新任地となる教室でご活動の構想を伺い、意欲にあふれたご着任の熱意をひしひしと痛感した次第です。私は自治医科大学の特徴として、教育、診療そして研究の発展への期待と併せて、特に卒業生全員が卒後9年間、各出身県にあって地域医療に専念するという当時は全国的にも唯一であった実態を踏まえて特に地域に根差した診療の視点が不可欠であるという期待をお話しました。以後22年間、教室の前任者としてその発展を注視して来ました。石橋教授はご在任中には多くの学会の主催や国際的なトップクラスの学術誌への学術論文の発表など、期待を大きく上回る活動成果を発信され私は、前任者として大変に嬉しく心強く感じてきました。このほど石橋教授から令和5年3月で自治医科大学を定年退任されるとうかがい、教室の発展に尽くされた教授のご尽力を改めて敬意をもって想起した次第です。そしてご退任後のご予定については開業を考えていると伺い、正しく自治医大教授のご退職後の活動の場として相応しいとの思いを深めた次第です。

私自身、大学を離れてから20年余、活動の場を市中の病院に移して、地域で開業して居られる医師の方々と親しく交流し、また病院団体に属して我が国の地域医療体制について体験し、考える日々が続きました。その中で常に痛感してきたことは医師の活動の基盤となる原点は開業の先生方の診療室にあるということでした。地域住民の視点に立った予防、検診、そして診療活動に寄せられる開業する医師への期待は今後、我が国でさらに膨らみ続けるものと思われまます。このことは過去数年、わが国でも猖獗を極めた新型コロナウイルス感染症の流行を経験して改めて痛感させられることとなりました。医療の場でも電子機器が普及した昨今、実地医家の視点もともすれば患者の表情から離れ、電子機器の画面にくぎ付けとなり勝ちであることが否定出来ません。どうか石橋先生には患者の想いを深く理解し、それを診療活動に反映させるという医の原点を踏まえて、医師にとって常に新しい課題に満ちた実地医家という「地域医療の新しい地平」に挑んでいただきたいと心から期待する次第です。

石橋 俊 先生の医学研究へのご貢献に感謝、 そして、これからのご活躍にエール

東北大学大学院医学系研究科
東京大学先端科学技術研究センター

酒井 寿郎



このたびは、自治医科大学糖尿病代謝内科のご退職、そしていしばし糖尿病内分泌内科クリニックの開業、おめでとうございます。長年にわたり、糖尿病や動脈硬化に関する研究に従事され、多大な成果を上げられましたことは、私たち後身にとっても大変誇らしいことです。ご退職は少々淋しい思いですが、同時に、石橋先生のこれからの新しいステージに対する期待と、ご自身が開業されるクリニックによる患者さんへの貢献に対するエールを送りたいと思います。

石橋先生は、テキサス大学の Goldstein 博士、Brown 博士の研究室において、LDLレセプターのノックアウトマウスを作成され、このマウスを用いた研究によって、動脈硬化の病態を解明されたことで、世界中で高い評価を受けています。さらに、この研究は、高脂血症治療に関する新しいアプローチを提供し、医療現場に大きな影響を与えました。私も石橋先生のあとに Goldstein 博士、Brown 博士の研究室で過ごした者として、石橋先生の人望の厚さがとても印象的でした。私が大学院時代に携わった VLDL 受容体のノックマウスを作製し解析していた Philip k. Frykman という石橋先生が面倒見ておられた MD., PhD.の学生が、初対面の私に、” I like Syun!” と言っていたのをついこの間のように覚えております。このように、石橋先生は、研究者としてだけでなく、人としても尊敬される方でした。石橋先生は、学生や後輩たちに対しても、常に優しく、温かいご指導をされておられました。私たちの悩みや相談にも、いつも真摯に耳を傾け、的確なアドバイスを下さいました。そのおかげで、私たちは自信を持って研究や診療に臨むことができました。

石橋先生は、卓越した医学的知識と豊富な経験、そして人柄の魅力を持ち合わせている方です。そして、研究者としても、患者さんに対する医療者としても、常に自分自身を高めるために努力されてきました。多くの糖尿病や脂質異常症の患者さんの治療にあたられてこられたことは、医学界にとっても、社会にとっても大変な功績となっています。石橋先生が開業されるクリニックは、必ずや、その地域において多くの患者さんの希望となることでしょう。石橋先生がこれまで築いてこられた人脈や人望は、クリニック開業後も、多くの方々から愛され、信頼されることでしょう。そして、石橋先生の優れた医療技術や温かい人柄が、患者さんの病気と向き合う力となることでしょう。

石橋先生のご退職という節目に、改めてその業績と人柄に敬意を表し、これからの新しいステージでのご活躍を心よりお祈り申し上げます。また、これまでの研究者としての業績、医師としての貢献、教育者としての指導など、あらゆる分野において、多大なる貢献をいただいたことに対して、深く感謝申し上げます。

令和 5 年 2 月 14 日

東北大学大学院医学系研究科
東京大学先端科学技術研究センター
教授 酒井寿郎

石橋俊先生の教授退任に寄せて

東京証券業健康保険組合診療所
(元東京女子医科大学教授)

佐倉 宏



石橋俊先生には22年の長きにわたり自治医科大学内分泌代謝学部門教授として教室を主宰され、このたび無事退任されること、心からお慶び申し上げます。

私と石橋俊先生とは1982年東京大学医学部卒業の同期であり、学生の頃から石橋先生のごことはよく存じ上げています。石橋先生は、当時から勉学は勿論のこと運動部活動にも非常に熱心に取り組まれていました。先日お聞きしたところ、現在も日曜日の朝は15kmのランニングを日課にされているということで大変驚嘆いたしました。まさに医学研究者としても、食事・運動療法が重要な糖尿病・代謝疾患を専門とする医師としても、鑑のような生き方だと感じました。

初期臨床研修修了後の1984年に、私も石橋先生も、同じ東京大学附属病院第三内科第一研究室に入局しました。ただ、私は糖尿病研究室、石橋先生は脂質代謝研究室と、専門分野は近いものの異なる研究グループに属していたことや、留学・出向・医局を離れた時期がずれていたことなどから、医師になってからは存外一緒には過ごしていません。そんな中で、1,300ページを超える大著である「カラー版糖尿病学 基礎と臨床」(2007年、2009年アップデート版、西村書店)に共同編集者として一緒に参画させていただいた思い出があります。

この文を書くにあたり、自治医科大学附属病院内分泌代謝科のホームページを拝見しましたが、多くの医局員が在籍され、素晴らしい診療・研究業績を残されていることから、石橋先生が卓越した手腕を持って教室を主宰され、繁栄に導かれたことがよくわかりました。私は石橋先生の半分にも満たない期間しか臨床教室のリーダーを務めていませんが、それでも在職中は気が休まらない日々で、退任したときは大変安堵しもう十分という気持ちでした。22年もの間、教育・研究・臨床・教室の運営を当たられたというのはそれだけでも大変なことであり、時にはご苦勞されることもあったのではないかと推察しますが、改めて頭が下がります。また、私ごとで申し訳ありませんが、私は、石橋教授の先々代教授の葛谷健先生が主宰されていた1984～1985年にシニアレジデントとして自治医科大学附属病院内分泌代謝科に在籍しました。当時はまだ自治医大駅から大学まで建物が1つもなく、夜歩くのはとても怖かった思い出があります。しかし、私にとって自治医科大学は、糖尿病の臨床・研究生活のスタートを切った地であり、出身者のひとりとして今後も教室が益々発展されることをお祈り申し上げます。

さて、石橋先生は、ご退任後は、心機一転、埼玉県羽生市で開業されると伺っています。現在は開業するのも簡単ではない時代になっていると聞き及んでいますし、石橋先生と私の共通の恩師である小坂樹徳先生は、よく「開業される先生は大学の勤務医と異なり、すべて一人で責任を負わなければならないから、大変なものです。」とおっしゃっていました。しかし、埼玉県北部は医師不足地域であることや石橋先生の力量を持つてすれば、必ずしや成功することは間違いないものと確信しています。あと数十年間はご活躍できると思いますので、是非頑張ってください。石橋先生とは、東京の自宅がすぐ近いこともあり、時々はお会いする機会もあります。つい先日には、大学の同級生数人とともにご自宅で行われたバーベキューパーティーに招待していただき、大変楽しいひと時を過ごさせていただきました。今後も末永くお付き合いいただければ幸いです。

ダラスでの懐かしい思い出

東京大学大学院農学生命科学研究科・特任教授
東京大学名誉教

佐藤 隆一郎

石橋俊先生、ご退任を迎えられ大変お疲れさまでした。留学先では3年半ほど同じ研究室で苦楽を共にし、懐かしい思い出ばかりです。

私は1989年の頃から留学先を決めるべく、情報集めをしていました。ある晩、当時人気番組であった久米宏の「ニュースステーション」を見ていると、特集コーナーで「全米一犯罪都市ダラス」が紹介されていました。日本人撮影クルーがダラス郊外の一軒家でインタビューをしていると、数発の銃声が近隣から轟き、あまりの恐ろしさにここにだけは行くまいと思ったことを覚えています。そうなるはずであったのですが、なぜかダメ元で何のコンネクションもないままに Goldstein/Brown 博士に手紙を送ったところ、来ても良いという返事を頂きました。G&B 研究室では、ノーベル賞受賞後に難解な HMG CoA 還元酵素分解研究は中断されていましたが、それを再開したいという変人(?)に両博士が興味を示して下さいったのだと思います。

女房より一足先にダラスに恐る恐る到着した私は、何とも贅沢なことに横出正之先生に空港までお迎えに来ていただき、アパートの手配その他をお手伝いいただきました。さらに石橋先生には、車購入のために複数のディーラーと一緒に足を運んでいただき、値引き交渉までしていただきました。石橋先生は、ディーラーのお兄ちゃん相手に巧みな話術で大幅な値引きを要求して相手を愕然とさせ、そんな交渉を楽しんでいる大物ぶりに私も唾然とさせられました。石橋先生と私は理3と理2の違いはあるものの、東大同期入学でもあり、その後は気楽なお付合いをさせていただきました。それも石橋先生のどなたとも分け隔てなく笑顔で会話されるおおらかな性格が、そうさせてくれたのだと思います。

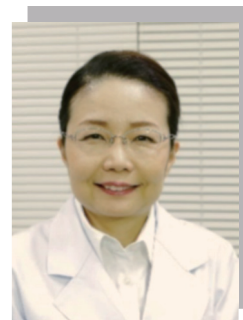
石橋先生ご帰国の4か月後に私も帰国し、その後先生が自治医大にご転任される2年前に母校に戻ることができ、退任するまで過ごすことが出来ました。G&B 研で学び、そこで得た成果がその後の人生を豊かなものにしてくれました。そしてその記憶の中では、石橋先生との思い出が色褪せることなく輝いています。今後は近隣住民の健康と福祉の向上に尽くされるとのこと、益々のご活躍を祈念しております。



ダラス到着直後の歓迎会で石橋先生ご夫妻と

基礎研究から行政まで、動脈硬化の世界に大きな貢献

大阪医科薬科大学 斯波 真理子

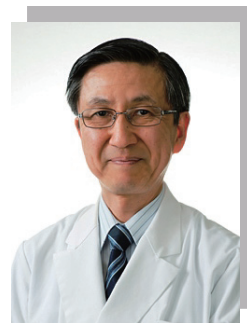


石橋俊先生には、これまで多岐にわたり、大変お世話になりましたことを御礼申し上げます。私は、石橋先生に直接お会いする前に、細胞に出会っております。私は滋賀医科大学の大学院生の時に、皮膚線維芽細胞を用いて LDL 受容体に対するインスリン作用の実験を行っており、私のスーパーバイザーの日高先生が、何故か石橋先生の線維芽細胞をお持ちでした。私の学位の実験の初期のデータは、実は石橋先生の細胞を使用させていただいたのでした。大学院卒業後、国立循環器病センターに異動し、ポストドクとして働き始めたころに、生の石橋先生に初めてお会いすることができました。石橋先生は、ダラスの Goldstein, Brown の研究室にご留学され、家族性高コレステロール血症のモデル動物である LDL 受容体ノックアウトマウスを作成され、全世界の動脈硬化研究の発展に寄与されました。私も、常染色体性劣性遺伝高コレステロール血症の病態モデルを用いた実験を行っている際に、そのマウスをいただき、大変良い結果を出すことが出来ました。石橋先生は、2012 年に山田信博先生の後任として、厚生労働省 難治性疾患政策事業 原発性高脂血症調査研究班の班長になられ、2017 年まで務められました。その間の 2015 年には、小児慢性疾患と成人の難治性疾患について、脂質異常症におけるそれぞれの対象疾患の範囲が大幅な拡大がなされました。原発性脂質異常症の中からレシチンコレステロールアシルトランスフェラーゼ欠損症、シトステロール血症、タンジール病、原発性高カイロミクロン血症、脳腱黄色腫症、無βリポタンパク血症の7疾患が、それまでの FH ホモ接合体に加えて新しく指定難病に認定されたこと、さらに3疾患について PROLIPID のレジストリーが開始されたことなど、脂質異常症の世界の大きな転換点となりました。2018 年より、石橋先生の後任として私が班長に任命され、引き続いて全脂質異常症難病のレジストリーの開始、全疾患の和文および英文の総説作成を介して、脂質異常症難病の啓発に取り組んでおり、石橋先生の多大なご指導をいただきながら務めさせていただいております。このように、石橋先生には、研究の大事な局面で大きなサポートをいただいて、ここまで進めることができましたことを、深く感謝いたしております。これまでは教育、研究、診療、さらには行政の面より医学へ多大な貢献をされてきましたが、これからはクリニックを開設され、地域医療へと活躍の場を変更されますが、これまでのご経験を元に、大きな貢献をされることと存じます。お身体に気を付けながら、ご活躍されますこと、さらに後輩へのご指導も継続いただきますよう、お願いいたします。

石橋俊教授のご退任に寄せて

埼玉医科大学 内分泌糖尿病内科

島田 朗



石橋俊教授のご退任に際し、一言、御礼申し上げます。

石橋俊先生は、20年以上の長きにわたり、自治医大において教授職をお勤めになられたとのこと、それだけでも大変なご業績かと思えます。一教室の責任者には、基本として、質の高い診療、世界レベルの研究、優れた医師の育成、が求められるわけですが、加えて、診療における医療収入、大きな研究費の獲得、多岐にわたる人事、さらには、対外的な責務、特に学会を軸とした国全体に関わる役割や先導、などなど、数えきれない程の重責がありますが、先生におかれましては、常に紳士的に、スマートに種々の事柄に対応されておられると拝察しておりました。

以前、おそらく私が慶應の講師だった時代と記憶しておりますが、高々私学の一講師を自治医大までお招きいただき、講演をさせていただくという大変光栄な機会を頂戴しました。その際も、非常にアカデミックなディスカッションをさせていただき、感銘を受けた記憶がございます。さらに、講演後もアットホームな懇親の場を設けていただき、先生のお人柄で多くの教室員の方が集まって来られていることを目の当たりに致しました。その節は、誠にありがとうございました。

先生は動脈硬化関係、特に、脂質代謝の権威と承知しておりますが、私が1型糖尿病研究のお話をさせていただいた際にも、非常に熱心に、また、物事の本質をつくご質問をされておられ、サイエンスに対する真摯な向き合い方をご教示いただきました。今回、ご退任されてからも、大所高所からご指導を賜りたく存じます。

これからもお体にお気をつけられて、益々ご活躍されますことを祈念しております。

石橋俊先生と私の 20 年間

新小山市民病院 院長

島田 和幸

石橋俊先生が自治医大内科学講座内分泌代謝学部門の教授に就任されたのは、今から 20 年以上も前のことになる。石橋先生は、私とは専門領域は異なるが、東京大学第3内科の同門で、私より 10 年後輩である。自治医科大学は、開学時、全国の大学に先駆けて第1、第2のようなナンバー内科を廃止して、専門領域ごとに独立した内科学講座を開設した。このことは、自分が卒業した大学のナンバー内科に「入局」することが普通だった時代には、全国の医学部から専門性を求める卒業生を呼び込むことに成功した。しかし、石橋教授が着任された頃は、時代は進み、専門分化のみならず内科全体を統合化する方向に舵をきろうとしていた時期であった。当時、私自身は新設された内科学講座の主任教授を斉藤壽一教授から引き継いだ。石橋先生は、大学の後輩で、かつ脂質の研究面でも重なるところがあったため、私には最初から身近に感じていた。そのせいもあって、時に先輩ぶった言動で先生に接したことがあったと反省している。先生のご退官にあたり、誌面を借りてお詫び申し上げる。自治医科大学は、診療のみならず、研究・教育を重んずる学風があり、それぞれの教室を主宰する教授のご苦労は、私自身よく知っている。まずは教室員を獲得し、多様な医局員が志向するところと教室の目指すべき方向を擦り合わせなければならない。着任直後は東大とは違う教室の雰囲気にもまず適合し、新たな方針を打ちださなければならない。そして地域の医療需要にもなんとか応えなければならない。石橋先生は、最終的にはみごとにそれらをやり遂げた。現に、新小山市民病院は、自治医大内分泌代謝の医局から素晴らしい、優秀な医師を継続して派遣していただいております、さらに地域医療に従事している内分泌代謝の医局出身者の何人かとも私たちは強力な支援をいただいている。大変感謝している。

石橋先生は、温厚で、仕事に対して終始誠実を貫かれるお人柄であり、最初の教授選任のときの印象から一つも変わっていない。アカデミアを退官後は、診療所を開いて地域医療に従事されると聞いているが、「患者さんに好かれる開業医」になることは疑いがない。

石橋先生の今までのご活躍、ご貢献に対して心からの拍手を送るとともに、これからのますますのご活躍を祈念する。

「医学研究の道」へ導いてくださった恩師

相模女子大学 栄養科学研究科 教授

嶋田 昌子

私が初めて石橋 俊先生にお会いしたのは、東京大学医学部医学科の6年生の春でした。卒業後の進路について、内科臨床医をしながら医学研究にも携わりたいと考えており、特に代謝学分野に興味を抱いていました。学生実習の担当医が脂質代謝のご研究をされていることを知り、そのご縁で当時の第三内科第11研究室を訪れました。研究室で黙々と楽しそうにご研究されている石橋先生のお姿を拝見して、この先生のご指導を受けてみようと思いつき、それ以降数カ月にわたって実験の手解きをしていただきました。研究に全く無知な私にとっても穏やかに丁寧に接してくださったのが大変有り難かったです。その後、石橋先生は、1985年にノーベル医学生理学賞を受賞された米国ダラスのテキサス・サウスウエスタン大学の Michael S. Brown と Joseph L. Goldstein 博士もとにご留学されました。私が前期内科研修後、入局までのフリーの時期を利用して渡米した際には、石橋先生のご留学先のダラスの研究室を訪問し、両教授に面会させていただきました。また、その折にご自宅に温かく迎えてくださった先生のご家族への感謝の気持ちは今も忘れることができません。石橋先生は帰国後自治医科大学に異動され、私も渡米してしまい疎遠になっておりましたが、ある年、先生がニューヨークで招待講演をされた際にボストンで研究をしていた私にご連絡をいただきました。奥様と3人でマンハッタンにてご一緒させていただいた折には、昔のことがとても懐かしく思い出され、本当に楽しい時を過ごすことができました。ただ、先生のお好きな村上春樹の小説の舞台であるボストンの街のご案内が、私の在住中に叶わなかったことが、今でも心残りです。

石橋先生は、長い年月に渡り、臨床、および医学研究の第一戦でご活躍され、多くの業績を築いてこられました。本当にお疲れ様でした。そして、公私ともに大変お世話になり、どうもありがとうございました。これからの先生の益々のご発展とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

ご退任にあたり 団子三兄弟次兄から長兄にむけて

筑波大学医学医療系内分泌代謝・糖尿病内科

島野 仁



石橋先生“ご卒業”おめでとうございます。

先生が東大糖尿病代謝内科から自治医大にご栄転される際、研究室(2研 11 研)でのお祝いの会だったか、元ボスの村勢敏郎先生、故山田信博先生をはじめ我々メンバーの前で、これから一国一城の主としての矜持を披露されていたのを昨日のように思い出します。少々はにかみながらでしたが、使命として地域の医療を支え後進を育てなければならぬと話され、先生、後藤田貴也先生(現杏林大教授)と若かりし頃 団子三兄弟と呼ばれ実験三昧の緩い気持ちでいた私は、noblesse oblige としての薫陶に背中がピリッとしました。そのご姿勢は先生のご在任期間、一貫されていたと感じています。

研究では、皆様よくご存知の通り、マクロファージの脂質代謝、動脈硬化巣での泡沫化機構の解明、ご留学中の家族性高コレステロール血症の動物モデル LDL 受容体 KO マウス作成。その後の発生工学動物を軸にした脂質糖尿病病態の解析は、2研 11 研の研究に方向性をあたえ、また屋台骨のエンジンとして研究室を引っ張ってくださいました。動脈硬化学会、糖尿病学会、内分泌学会などに大きな足跡を残され、同じ研究室出身として誇らしい思いをさせていただいています。

私が筑波に移ってから、後輩のよしみでいろいろ共同研究させていただいています。根源的な問いに答えを与えてくれるプロジェクトでいまだに展開にワクワクしております。同じ北関東ということで研究会など一緒にする機会も多く、先生の独自のお考えや時に厳しいご意見をいただき、勉強になるとともに背筋がまたしても伸びたものです。

具体的なエピソードをここであげるには、あまりにたくさんの思い出や万感の思いがありますが、長きにわたるおつきあいからふりかえると、どうしても若い時のことがまず頭に浮かびます。

旧東大第3内科に入局したてのころ病棟を終えて研究室で夜な夜な頑張っていると、毎晩のように新婚の先生にお誘いいただきお宅でご馳走になった楽しい場面場面。その後ダラスのテキサス大学サウスウェスタン医療センターGoldstein, Brown 両教授ラボへの留学は入れ替わりになったので、ここでも公私ともに入局の時と同じようにご夫婦にお世話になりました。

私が脳卒中で倒れたときは自治医大病院で先生に大変お世話になりました。節目節目で先生に助けていただいたこと感謝の念に堪えません。順子奥様には先生以上に頭が上がりません。

家族一緒に旅行した際、山道でひよんなことから先生とかけっこ競争することになりました。そのとき私は内なる力を最大限に出したつもりでしたが、どうしようもない先生の深い力を実感した感覚が今も離れません。陸上部の先生、あたりまえに勝ったと思われていたでしょうが、近しい中にも当時のこういう緊張感は大切だと思ひ返します。

先生は、羽生で開業をされるとのこと、ご両親のお仕事を繋いでいき、文頭のお考えを新しい形で紡いでいかれるのですね、ご発展を祈念いたします。これからもご後進の方々を高い位置からご指導されると思います。古巣のグループもよろしく願い申し上げます。

石橋先生、無骨で野武士風の貴族？

国立国際医療研究センター、(公)微生物化学研究所

清水 孝雄

石橋教授とは同じ東大第三内科の同門ですが、専門も違うこともあり、それほど交流があったわけではありません。文京区の私の賃貸マンションのすぐ隣に、立派なお屋敷があり、どういう人が住んでるのかな、と覗いていたら、ある日、そこから、ひょいと顔を出されたのが石橋先生で、それ以来のおつき合いです。2019年には自治医大にお招き頂き、講演会のホストを務めて下さいました。永井学長より、感謝状を頂いたり、また、大学内のレストランで美味しいフレンチを頂きながら、先生方とお話し出来たのは大変嬉しい経験でした。先生とは山登りも同じ趣味で、涸沢診療所で御一緒したこともあります。私は滑落事故後は、もっぱら関東近辺や、京阪の低山徘徊を続けていますが、先生は四季を通じて、全国の百名山は踏破したと聞いています。Fbでも綺麗な風景や山の写真が印象的ですし、また、思ったことはまっすぐに発信しておられ、無骨で、野武士風の正義漢というのが私のトータルな印象です。アシル転位反応で、もう少し共同研究が進めば良かったのですが、ご退職と聞いて、本当に残念に思います。しかし、お元気な先生ですから、次の頂きを目指しておられると思います。今までのご厚誼に心から御礼申し上げます。



2019年6月10日大学院特別講義

石橋俊先生ご夫妻とのドライブ旅行

大阪大学大学院医学系研究科 内分泌・代謝内科学 下村 伊一郎

石橋先生、この度は自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授のご退任、そしてご開業の新しい人生のスタート、まことにおめでとうございます。

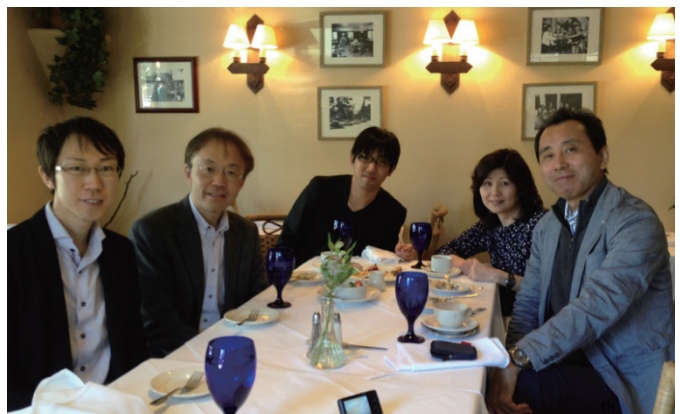
私にとって、石橋先生は、時期は重なっていませんが、ゴールドスタイン・ブラウン研の大先輩です。私がいた頃、石橋先生はまさしく legendary ポスドクの先生でした。LDL レセプター欠損マウスという歴史の大きな1ページとなる仕事をされたことに加え、ゴールドスタイン・ブラウン先生はじめテクニシャン・秘書さん達まで皆が、“Shun, Shun, Shun は元気になっているのだろうか？”と微笑む、皆からの愛され度が格別の先生でした。

帰国後2015年、西海岸の有名リゾート地・モンレーで、ゴールドスタイン・ブラウン先生が中心となられて脂質代謝を中心とする”Duel conference ”を開催されました。私は、教室の大学院生二人を連れて行きました。最終日、出立までほぼ1日の時間ができ、どうしようかと考えていた際に、石橋先生より、「下村君、学生さん達、連れてこられているから一緒にドライブに行かない？」とありがたいお声がけを頂きました。

そしてその朝から深夜までのドライブ旅行は、私にとって学生達にとって忘れがたいものとなりました。朝、ホテルフロントで初めて奥様とお会いし、それからレンタカーを借り、近くにあるという話題のカフェへ。思いの外遠く、慣れぬ道にも散々迷い、結局カフェにたどり着くのに1時間以上かかり、私も学生もグタ～、となっている時も、石橋先生はいつものとおり泰然悠然とされておられ、奥様はとてもお元気で、「あら、先生達、疲れちゃったの？お若いのに大丈夫？」と。それからおそらく4時間くらいをかけたスタンフォード大学までのドライブも、ナビもまともな地図もない、あるのは古い「地球の歩き方」のページの端の方にある大雑把で正確かどうかともわからないとても小さな地図だけ。なんとかスタンフォードまで行って、暗くなった道をモンレーまで戻って帰ってきたのも深夜近くで、遅くに開いていたレストランで遅いディナーを食べる頃には、皆も打ち解け、ご夫妻からは「大学院生の僕ちゃん達も、今日はほんとドライブお疲れ様でした。きっと偉くなってね。」と言っていただけだ。我々皆、疲れ果てたが、道もわからず明るくアメリカの道をドライブし、ちゃんと言って帰って来られた醍醐味感、ようやく着いたスタンフォード大学キャンパス内の有名な大きな中庭の芝生の上に皆で寝転んで見上げた時の空の青さ・爽快感、いずれも人生の中で至極の思い出の1ページとなっています。

石橋先生、奥様、あの時の僕ちゃん達(藤島裕也先生、小幡佳也先生)も今や私の教室の超中心メンバーとして大活躍、教官として教室を引っ張ってくれています。彼らにとって、あの時のお二人との時間は、大学人としての明るさ・おおらかさ・タフネスを教えていただいた貴重なものであったと思います。

これからもますますお元気で、人生を謳歌下さい。そして、いつかまたあのような至極のひと時、一緒にさせて下さい。



At Café “Porta Bella”, Monterey in California, March 7, 2015.

命の恩人

浜松医科大学腫瘍病理学講座

梶村 春彦

石橋先生御退官、御開業おめでとうございます。石橋先生とは本郷で一緒になりましたが、陸上部というか、山岳部というかストイックな雰囲気は暗めの私にはまぶしいものでした。

何故かスキーに誘ってくれたことがあり、当時私は5年に一度くらいしかスキーをしなかったのですが、ゲレンデの変な塊として転がっていたものです。スキーで宿に帰る時、なだらかな下り坂の道を降りて行ったのですが、道のはじめで転びました。転んだ本人はたいしたことでもないと思って、のんびり、立ちあがろうとしていましたら彼がすぐやってきてくれて、お前、ここは道のはじめでそのまま落ちたら大変なところだったぞと心配してくれました。長年山をやっている人の危機管理能力なのでしょう。その後、留学先で大きな仕事をされ、比較的早く、自治医大で独立されたかと思います。私の留学中にも一度訪れてくださったのですが、あろうことか、そのとき私が運転でへまをして、同僚の方々共々にご迷惑をかけたかと思います。というわけで、長らえているのが不思議な私と比べて、自治医大で、優秀な医師を育てられた後、今度はご先祖の地で開業をされ、さらに、人々のために尽くすということ、羽生市の皆様の大きな期待でもありましょう。とかく時にはひどいことを言われたりすることもある同窓会の中でもどこに出しても恥ずかしくない医療人の模範だと思います。

先生の時々発信するSNSなどの中で、映画や読書の感想がある時があり、私は、そういう映画などは石橋が推薦するのだから、と言って見ることにしています。確かによかったと思うことが多いです。ありがとうございます。

遠藤周作に灯のうるむ頃という小説があり、権威にいじめられながらも、がんの研究をする町医者像が描かれており、私自身はそういう方向で甲斐なき努力を続けて、ご迷惑をかけ続けるのではと思います。

石橋俊先生に育てていただいて

筑波大学 医学医療系 内分泌代謝・糖尿病内科

関谷 元博



石橋先生と私の出会いは2000年にさかのぼります。大学を卒業後、そのまま東大病院で研修医として各内科をローテートしておりました。当時、内科は悪性腫瘍の患者さんが多いものの最後には救命し切れず、気心通じた患者さんが次々に亡くなり、いろんなことを考えておりました。ところが、最後に回った循環器内科や糖尿病・代謝内科は生活習慣病科の色彩が強く、そうした悩みが少ないことと、石橋先生のグループは基礎研究もしっかりされていながら目先の成果に振り回されて大事なものを見失ってしまうようなところがないことから、石橋先生のところでさらに研鑽を積ませていただくことにいたしました。

石橋先生の教育スタイルは積極的に能動的に取り組ませるもので、若手であってもベテランと同等にどんどん難しい問題にチャレンジさせていました。研修医のうちからたくさん総説も書かせていただきましたし、研究室に入ってからもうすぐ一人前の研究テーマを与えていただきました。これは実際にはついていくのが大変なのですが、若いときに一人前に扱っていただくのはうれしいことですし、頑張っただけ取り組んでいくとすごく力が伸びます。自分で考えて自分でやる。そして自由な発想も大事にしてください。この繰り返しで本当に鍛えられました。英語論文の書き方も優れた研究者の優れた表現をどんどん自分のものに取り入れていきなさい、というご指導でどんどん自分で書きました。1, 2 報目は恥ずかしいものでしたが、3-4 報目には自分でほとんど書いたものが editor に well written と評価されたり、うれしかったのを覚えています。昨今は教育が非常に‘受け身’になっているように感じることも多いですが、よく考えられるべき部分かと思えます。

また石橋先生は山登りなど仕事以外も楽しまれており、私も入門を決める前に山登りに連れて行っていただきました。私自身は学生時代から卓球を継続しているのですが、成果主義の色彩も比較的強かった当時は他の研究室の先生には‘よくそんな時間あるね’など言われたこともあったのですが、今振り返ってもそうした全体のバランス感覚のようなものはもう一つ石橋先生に教えていただいたものであり、大事にしています。

私自身はまだ自分のこれまでを振り返るのは早いのですが、振り返ると私自身の中核的な部分を育てていただいたことに感謝の気持ちで一杯になります。石橋先生の教えは目先の成果主義ではないので、研究をしているとその延長上にこの世の成り立ちやそこにある科学的基盤に思いを致すことになります。そうした中で現時点の私が好きな言葉が‘總蛄(けいこ)春秋を知らず伊虫あに朱陽の節を知らんや’です。我々は科学も発達し、かなりの部分を理解したつもりになりがちですが、実際には1-2割程度しか理解していないのではと思っています。数学、量子科学、様々な手掛かりから世界の成り立ちを考えると、最新の科学と古典の不思議な一致を見たりします。こうした深みのある思考を楽しむことこそ科学の醍醐味かと思えます。こうしたところまで連れてきていただいた石橋先生の教えに本寄稿をお借りして感謝いたします。本当にありがとうございました。

石橋俊教授の御退任によせて

新潟大学大学院医歯学総合研究科
血液・内分泌・代謝内科 教授

曾根 博仁



石橋俊教授が、自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授を勤め上げられ、このたび御無事に定年をお迎えになるにあたり、この場をお借りしてお祝いと御礼を申し上げます。

サイエンスに対する研ぎ澄まされた厳しいご姿勢の一方、誰にでも温和で気さくな石橋俊教授は、私自身が教授になる前もなった後も、常に理想の教授と仰いできた先生であります。最初に先生にご指導いただいたのは、すでに御逝去なされた山田信博筑波大学元学長が教授として筑波大に赴任され、その下で私が大規模臨床研究 JDCS (Japan Diabetes Complications Study) の担当をさせていただくことになった時でした。全国の糖尿病専門医のご協力により実施された本研究は、欧米以外では初めての、糖尿病患者対象の大規模臨床試験として主に生活習慣介入の効果を検証する研究です。石橋先生は、山田先生と朝日生命成人病研究所の赤沼安夫名誉所長の下、初代事務局長としてそのスタートアップと運営に多大なるご尽力をなされ、私はそれを引き継がせていただく形で、運営面、研究内容とも、その後長きにわたり多くのご指導を賜りました。おかげさまで本研究は、先生の御専門の脂質や動脈硬化関連を含む多くのエビデンスを通じて、わが国の糖尿病診療に大きく貢献しました。

石橋先生は広く知られているように、わが国において、初期からノックアウトマウスなど最先端の発生工学を駆使した基礎研究をけん引されてこられた第一人者ですが、同時に臨床研究においても常に深く、はつとさせられるような洞察をもってご指導いただき、どれだけ助けられたかわかりません。この分野広しと言えども、先生のように、基礎研究と臨床研究の両面について同じ高みでご指導なされる先生は決して多くありません。石橋先生は学生時代、陸上部の短距離選手だったとお伺いしておりますが、その後はマラソンもなされ、さらに登山でも、私も含む多くの人の憧れの日本百名山踏破を達成されており、その広範囲にわたる稀有な万能ぶりは、御趣味の世界にまで及ぶことに改めて感銘を受けたことを思い出します。

教授として大きな足跡を残された石橋先生が、続く人生を医師としての原点に戻られ、地域医療に貢献されることから、多くの学びをいただいております。基礎・臨床研究両方の豊富なご経験を基盤に展開される最前線の現場医療のお話しが今から大変楽しみです。どうかくれぐれもご自愛の上、末永くご活躍いただくと共に、今後とも変わらぬご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。この度は、誠にありがとうございました。



2013年8月29日 新潟での講演会後の慰労会

学生時代の思い出

長野県立阿南病院

平良 亘

長年のご勤労本当にお疲れ様でした。私は自治医大 37 期生(沖縄県)で石橋先生にはマクギーの身体診断学の原著教科書を和訳して輪読するという勉強会でお世話になりました。学生時代はもちろん、医師となった現在ではより一層先生から直接ご指導いただけたことを大変ありがたく感じております。それだけではなく先生のご自宅に招いていただきお食事までご馳走になり、先生は学生の私たちと同じ目線にたって話してくださりとても楽しい時間を過ごすことができました。卒業後も SNS を通して近況を機にかけてくださり本当にありがたく思います。そのような先生の人柄が今回のこのような記念誌を作成する運びになったのではないかと思います。これからも益々のご活躍をお祈りいたします。お体ご自愛下さい。

地域医療への貢献～一味違う石橋先生～

医療法人寿朋会 高田クリニック

高田 良久



石橋俊先生が自治医科大学内科学講座内分泌代謝部門教授に就任されたのは平成13年(2001)、御年45歳。卒業年は私と同じ昭和57年(1982)だった。年代が同じなだけだが、親近感を抱き、これから石橋先生のご指導の下、栃木県の医療を担っていくのだなあという予感のようなものを感じた。

先生は、地域の研究会にもよくご参加くださった。

写真1は平成28年(2016)2月13日、第2回北関東糖尿病診療連携フォーラムで挨拶される石橋先生だ。茨城の遅野井先生の提唱で始まった研究会だが、栃木、茨城両県の糖尿病を専門とする医療機関が集まり、それぞれの取り組みを紹介したり、課題を検討したり、と意義深かったけれど長時間に及ぶのと両県間の移動はそれなりの負担だった。にもかかわらず、先生はご参加くださった。栃木県開催の時は、ホスト役を買ってでてくださいったと思う。

写真2は、石橋先生企画による「しもつけ糖尿病ミーティング」の第2回、令和元年(2019)10月24日の情報交換会だ。先生は特別講演に岐阜大学の矢部大介教授を招かれ「糖尿病治療薬の効果と食事療法」を勉強する機会を作ってくださいった。矢部先生が関西電力病院時代から研究されている「食事がDPP4阻害薬の効果に影響する」という、我々開業医の診療の実際に生きる事柄の学問的裏付けを与えてくださったのだ。他にも国立国際医療センターの梶尾裕先生、京都大学の稲垣暢也先生、



写真1



写真2

東京大学の山内敏正先生といった石橋先生ならではの人选で、一味違った勉強をすることができた。

先生は、県の糖尿病予防推進協議会などにもご出席くださり、含蓄あるご発言で会に深みを与えてくださった。

こうして思い返すと名残惜しく寂しい思いが湧いてくる。

石橋先生、20余年にわたり、栃木県の地域医療をもご指導賜り、本当にありがとうございます。新天地でのさらなるご活躍をお祈り申し上げます。

脂質の道をお示し頂いたことに感謝申し上げます

東京大学医学部附属病院 糖尿病・代謝内科

高梨 幹生

石橋俊先生、長きに渡る教授職を全うされ、この度ご退任されますこと心よりお祝い申し上げます。

多くの先生方が研究やお仕事の上でのことをご寄稿されることと思いますので、私は自身が現在の道に進む契機となった陸上部での関わりについて記したいと思います。石橋先生に初めてお目に掛かったのは2002年秋の三医大戦でのことでした。当時私は6年生であり、石橋先生は自治医大に異動をされて間もない頃になります。この大会で初めて応援にお越しになり、内分泌の教授をしている旨の自己紹介をされました。当時の私は内分泌科志望であり、これは何かのご縁と思いお話をさせて頂いたことが昨日のことのよう思い起こされます。その後、高校の先輩であることも判り、ますますご縁を感じる中で、東大の研究室の見学やお食事にお誘い頂くようになりました。気付いた頃には本来の志望であった下垂体や副腎ではなく脂質の道へ方向が定まり、内分泌内科ではなく糖尿病・代謝内科の脂質グループへ所属することとなりました。あの大会は自身の引退試合でもあり、まさにラストチャンスでの奇跡のような出会いとなりました。現在に至るまでの道をお示し下さったことに深く感謝を申し上げます。

その後は陸上部の大会にお越し頂くことも増え、若手OBとして学生と同じように大会に参加する私に「そんな暇があったら研究をせよ」とご指導頂く一方で、手頃な大会があると「一緒に走らないか?」とお声掛け頂いたり、陸上部の学生を集めたご自宅でのBBQにお誘い頂いたりするなど、奥様と共に家族ぐるみで大変可愛がって頂いており大変有難く存じます。

現在の私は出会った頃の石橋先生の年齢を超え、多くの若手医師や学生と接する立場となっています。あの時の石橋先生のように、若手に道を示せるような指導者でありたいと思います。これからもご指導のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。手頃な大会へのお誘いはこれからも是非よろしくお願い致します。可能な限りお応え出来るようトレーニングもしておきます。これからもよろしくお願い申し上げます。



2010年11月 三医体戦後の打ち上げ

石橋俊先生の自治医科大学退任によせて

高橋医院

高橋 慶一

石橋俊先生と私の関わり合いは、年月は長いが散発的で希薄であった。最初は東大医学部の鉄門陸上部だった。年次が数年違い、私が本郷の後半に石橋先生は駒場で、年に何回かの対抗試合や大会のときだけ顔をあわす程度。石橋先生は長身で短距離が速かった。卒業後は卒後研修、第3内科入局と、会う機会もなく数年たち、石橋先生が同じ研究室に来て再会した。一緒の仕事ではなく、たまに姿を見て居るなと思う程度だったが、二つほど強い記憶がある。石橋先生が結婚されるとき式に招待されたが、会場が東京全日空ホテルの開業初日だったこと。1986年にハレー彗星が来たときのある週末、レンタカーで清里高原に彗星を見に出かけた。暗くなって多くの人が空を見上げる中、持参の双眼鏡でハレー彗星を見ていると私を呼ぶ大きな声がする。約束していたわけではないが石橋先生が妻同伴で清里に来ていて、私を捜していたのだった。翌日は3人で近くの丘にハイキングに行き、石橋先生の健脚を実感したことを覚えている。その後私は留学したあと、1990年に埼玉医大に移った。石橋先生はダラスに留学して活躍されたあと、自治医大に移られ長く活躍することになった。そのころ研究室の仲間とアメリカの学会に行ったおりに、ダラスやサンディエゴで会う機会があった。どちらかの時に同伴していた双子はもう成人されているだろう。私は家の事情で1998年に郷里に戻って開業して今日に至るが、学会には毎年行き、会場で姿を遠望し、すれ違って挨拶する事はあった。最近の宇都宮での学会で久しぶりに少し話し、この文を書くことになった。大学退任後は開業され地域医療にご活躍とのこと、再び近い世界になった気がしてうれしく思っている。先生の今後の長い健康と活躍を祈る。

2024年10月

私と自治医大と石橋先生

東京都健康長寿医療センター 糖尿病・代謝・内分泌内科

田村 嘉章

石橋先生、定年御退官心からお祝い申し上げます。東京都健康長寿医療センターにおります田村嘉章です。私は東大糖尿病・代謝内科時代に石橋先生の研究室にいらしていただき、学位をとらせていただいたあと、現在の職場に移って現在に至ります。

私は研修2年目を自治医大で過ごしました(1997年)。当時はまだ内分泌代謝を専門に思っていなくて、内分泌代謝科は回りませんでした。当時は学生寮の奥の一番北側にできたレジデント寮に住んでいましたが、いまもあるのでしょうか？研修医生活はとても楽しく、大学の隣の居酒屋「吉四六」でよく飲み会をしていましたが、もうないようですね。毎週末は真岡井頭温泉につかるのがルーティンでした。益子・芳賀・市貝の温泉巡りもして、入浴中にポケベルで呼び出されたことも懐かしいです。

石橋先生には東大での1年目の時からお誘いいただいていましたが、上記2年目の時、研究室の某先生の熱心なお誘いで入局しました。石橋先生は高校の先輩でもあり、その後うちの高校から何人か研究室に入りましたね。入局後もたびたび先生のお宅にお邪魔させていただいたり、カラオケに連れて行っていただいたり、大変お世話になりました。沢登りにまで連れていかれ死ぬ思いをしたのは閉口しましたが。もちろん、研究や論文執筆の面でも大変お世話になりました。臨床を大切にされ、臨床と基礎の両方の論文を書きなさい、内分泌も大事にしなさいとおっしゃっていたのが今も心に残っています。石橋先生は常にお忙しそうにされていましたが、夕方になると必ず泳ぎに行かれていますのが印象的でした。その石橋先生が自治医大に来られることになったときは、不思議な縁を感じたのを覚えています。その後私も東大から離れてしまい現在に至りますが、時あるごとに私の近況を気にかけてくださり、ありがとうございます。

私個人の思い出話ばかりになってしまいましたが、私と自治医大と石橋先生にはちょっと特別な関係があり、書かせていただきました。石橋先生、このたびはおめでとうございます。体力のある先生に心配は無用ですが、お体を大切にお過ごしください。



谷川連峰仙の倉沢西ゼン登攀前

石橋教授とモンゴル人留学生の思い出

医療法人社団聖仁会 我孫子聖仁会病院 医長 為本 浩至

石橋教授とは研修医のころからお世話になっています。11 研究室は村瀬先生が立ち上げた脂質の研究室で私は糖尿病研究の1研でした。山田先生がハウプトの11 研は雰囲気がよく、内心うらやましかったことを思い出します。自治医大の生化学教室にお世話になるようになってからカンファに顔を出させていただいたことがあります。そのご縁で留学生のボロルマーさんの指導を依頼されました。ボロルマーというのはモンゴル語で聖母マリアのことだそうです。インスリン受容体の変異の作用を細胞に発現させたモデルで検討する実験でした。PCRを使って変異受容体を作成して培養細胞にトランスフェクトします。ネオマイシン選択で生き残ったコロニーを単離してインスリン結合を調べ、効率のよいものを選びます。これを使って受容体のチロシンキナーゼ活性を調べました。私が拙い英語で教えるのですが、なんとか完成にこぎつけました。以前に群馬大学で中国人留学生、自治医大の大宮医療センター(現さいたま医療センター)でベトナム人留学生と仕事をしていたのが役に立ちました。彼女本人のアイデアでやりたい仕事を指導できればもっと発展があったのかもしれない。限りのある時間の中でまとめるので筋道が見える仕事にせざるを得ませんでした。彼女は留学生のバザールのときにモンゴルのゲルにさそってくれたのですが、地元の外勤のために行けなかったのが残念です。

石橋教授との思い出

医療法人長崎病院

千葉 泰子

新教授としてご就任された石橋先生と初めてお話したのは、ある研究会後の懇親会でした。当院の外来患者数の増加に伴い、医師派遣を依頼した際に、先生が東京大学医学部陸上部に所属されていたことを知りました。当時東京大学と私の母校である新潟大学の陸上部は交流があり、一年ごと東京と新潟の地で交互に定期戦が行われていました。先生が、私の恩師であり友人でもある新潟の先生と仲良くされていたことを伺い、一気に親近感を覚えました。そして、医局の先生(最初に来てくださったのは高橋学先生です。)を派遣していただき、現在まで自治医科大学の先生方にお世話になっております。当院の糖尿病外来が継続して行えるのは、自治医科大学の先生方そして石橋先生のおかげといつも感謝しております。

仕事以外の思い出もたくさんあります。

ある時、高橋学先生が当院スタッフと足利尊氏マラソン大会に出場する事になり、研究会後の懇親会で、その話題で盛り上がっていましたら、石橋先生も参加されることになりました。皆と同じコースに参加するというので5kmだと思っていたら、ハーフマラソンにエントリーされました。陸上部での専門は短距離と伺っていたので、心配していたところ、先生からメールが届きました。「マラソンについて何冊か本を読みました。全く走っていない人が20km走るには、まずは、〇〇日まで〇〇km、そして、1ヶ月前までには〇〇km走り込み、最終調整を行うと走れるということです。現在ランニングを始めています。」目標を完遂するために計画を立て実行していく姿を目の当たりにし、驚嘆致しました。これ以後先生はフルマラソンもされており、2019年には、TDJのメンバーとホノルルマラソンにも参加されたと伺っています。

尊氏マラソンにご一緒するようになって2年目か3年目の2014年に、先生から雨飾山に登りませんかというお誘いを受けました。登山などしたことのない私ですが、主人ともども参加させていただくことにしました。登山初心者私達に、お忙しい中登山用品の買い物まで付き合ってくださいました。先生は山岳部にも所属し、百名山を極めようという大専門家でしたが、買い物の際には、大切なものを強調するもの、押し付けはなく、緩やかにリードして下さいました。登山当日は、先生と奥様、主人と私の4人で登りましたが、先生は一番あとからガードしてくださり、初心者のペースに合わせお休みもたくさんとり、食べ物の食べ方も懇切丁寧に教えてくださいました。先生が計画された登山日はお天気がよく紅葉もきれいで、お陰様で初めての登山は最高の思い出となっています。その後私達夫婦は登山にはまり、時に百名山・時に低山を登って楽しむようになりました。石橋先生は百名山を制覇されましたがその最後の山にご一緒できたことも、また至極楽しい思い出です。頂上での先生との百名山登頂記念写真撮影も感無量でしたが、下山後、すそ野のキャンプ場で、奥様がけんちゃん汁を作って待っていてくださり、ご一緒した先生方と温かい汁やお肉を頂きながら、「百名山登頂の歴史」を伺った時間もととても幸せなひと時でした。「登山は、運動機能の維持や眺望を楽しむだけでなく、気象学や地形学、天文学・歴史学・風土学などいろいろな学問を学ぶことができ楽しい」とおっしゃっていました。

先生には、医療活動面で世話になったばかりでなく、登山を通じて、また、幅広い教養や生き方のお話しから、私達の人生の幅を広げてくださったと心より感謝しております。これからも宜しく願い致します。

今後は地域医療にご尽力されると伺いました。ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。



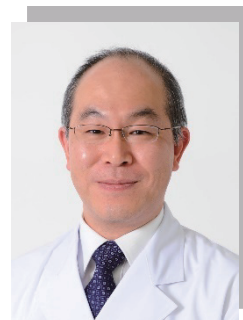
新潟長野頸城連峰雨飾山山頂

足利市 医療法人長崎病院 千葉泰子

石橋俊教授のご退任によせて

帝京大学医学部内科学講座

塚本 和久



石橋俊先生の教授ご退任によせて、学問面のみならず私生活でも非常にお世話になった者の一人として、謹んでお祝い申し上げます。

私が初期の研修をおえて東京大学に戻ってきた1989年には、丁度石橋先生が米国にご留学され、また石橋先生が帰国された1994年には私が留学した関係上、実際に私が石橋先生と直接面識を持つようになったのは私が帰国した1997年以降でした。しかし、研究室こそ異なるものの、同じ分野(脂質代謝・動脈硬化)の研究を行う研究室に属していたため、石橋先生のハウプトの山田信博先生や私の研究室の先輩から、石橋先生が卓越されていることはよくお聞きしていましたし、何より1993年にLDL受容体欠損マウスを作成されて発表された時には、すごい先生だな、と実感したことを覚えています。LDL受容体欠損マウスに関しては、私の留学中および帰国後の研究において使わせていただき、その恩恵にあずかせていただきました。

1998年の東大病院の内科編成に際しては、病棟でも一緒に働かせていただくようになり、また動脈硬化学会のみならず脂質代謝・動脈硬化の様々な研究会ではご一緒させていただきました。石橋先生は脂質代謝のみならず非常に広い範囲にわたる生命科学の最新の知識をお持ちで私にはわからない質問をよくされており、常に広い視野にたって多面的、多角的に考察し、研究を推進されているのだと感嘆していた次第です。

個人的にもいろいろと一緒に楽しませていただきました。ご自宅にも数回呼んでいただいて夜遅くまでご馳走になりましたし、また、私の家族ともども、石橋先生の奥様とも一緒にイタリアンで楽しい時間も過ごさせていただきました。私が会津に赴任していた時には、石橋先生の趣味の山登り(確か安達太良山;石橋先生は目を輝かせて安達太良山の愛称を連呼されていました)も同行させていただき、下山してから「芋煮会」で楽しんだのも新鮮な思い出です。石橋先生がしばしば竿頭となった船釣り(beginner's luckと謙遜されていました)などもありますが、今でも一番印象に残っているのは、ダラスで学会があった時のこと。毎日のようにいろいろなお店に連れて行っていただき、そして滑り台のある店では、子供のようにはしゃいで滑っていた先生(私もそれ以上に滑りましたが)を思い出します。ご退任後は、羽生でクリニックを開業されると伺っております。新天地でのご活躍を祈念するとともに、脂質代謝や動脈硬化の分野で、今後いろいろとご指導ご鞭撻をぜひよろしくお願い申し上げます。



久里浜での釣り

石橋 俊教授との思い出

横浜市立大学 内分泌・糖尿病内科学

寺内 康夫

石橋先生、自治医科大学を定年退官されるとのこと、月日が経つのは早いもので、永年にわたりお世話になり、ありがとうございました。

東京大学時代から、脂質異常症の診断・治療で迷ったときは、いつも石橋先生に相談していました。低コレステロール血症を呈する方の診断の進め方を相談したことがありましたが、追加すべき検査、治療方針を懇切丁寧にご指導くださいました。石橋先生のお人柄がよくわかりました。

また、栃木県内で開催される糖尿病・代謝疾患に関する講演会に度々お声掛けいただきました。コロナ禍で、宇都宮まで行く機会はなくなりましたが、以前は講演会に参加された先生方との情報交換することで、楽しいひと時を過ごすことができ、加えて臨床・研究に重要なヒントを得ることができました。貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。

退官されましても、クリニックを開設され、診療に当たられると聞いています。新しい環境下でもご活躍されますことを祈念いたします。

石橋俊教授の思い出

大学時代に寮が一緒であったこともあり、石橋俊先生の方が学年が一つ上でありながら今日まで親しくさせて頂いてきました。卒後、内科の2年間のローテーションを終えて入局した東京大学の第三内科の研究室も、気が付いてみれば隣の研究室で、石橋先生は脂質と動脈硬化、私は糖尿病の研究室でした。昭和57年(1982年)卒は、高久内科に多くの優秀な先生方が入局されましたが、その中でも石橋先生とは親しく付き合いさせて頂くことができました。当時の第三内科の研究室はどこも不夜城を競うがごとくハードワークの方がたくさんおりましたが、石橋先生もその一人でした。

その後、石橋先生は **Brown&Goldstein** 博士のところに留学をされました。「ノーベル賞」は、今よりずっとずっと遠い存在でしたので、ノーベル賞受賞者のラボのところに留学することに、畏敬の念を抱いたものです。石橋先生は留学先で **Gene targeting** の系を立ち上げられ、**LDL** 受容体欠損マウスを作製・解析し素晴らしい論文を書いて帰国されました。ちょうど、私どもの研究室でも為元先生が **IRS-1** 欠損マウスを作製していた時期に重なります。

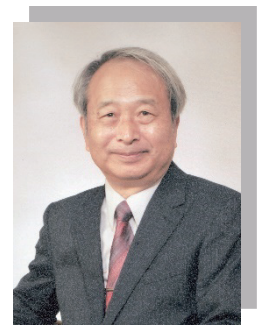
私はインスリン初期シグナルと脂肪細胞の研究を経て脂肪組織のマクロファージの研究に移り今日まで続けております。石橋先生の動脈硬化の分野の「血管マクロファージが **LDL** 粒子を取り込んで泡沫化し、炎症をともなった血管のリモデリングの引き金になる」という知見に、知らず知らずのうちに刺激をうけていたのかもしれない。

その後、石橋先生は自治医科大の教授となり、私は富山大学へと、ともに第三内科を離れましたが、様々な研究会で顔を合わせると「どうしているか」と気遣ってくれる石橋先生でした。第三内科の時と同様に、胸には熱い情熱を秘めながらもいつも温和で、そして誠実に時には厳しく見詰めていてくれる石橋先生でした。学生時代の寮が一緒という不思議な縁ですが、これまでどこかで心の支えになっていてくれたのが石橋先生です。

笑顔が素敵な石橋俊先生とのお付き合い

自治医科大学 名誉教授

富永 眞一



石橋俊先生のことを初めて知ったのは、東大の第三内科に同級生の山田信博先生を訪ねた時でした。「もうすぐ優秀な弟子が海外留学から帰ってくるので、よろしく頼むよ。」と言われ、信博君(わがクラスには山田君が4人いるので、皆は下の名前呼び合っていました。)が言うのだからきっと飛び抜けた俊才に違いないと期待していました。

その後自治医科大学に赴任された石橋先生とお会いしました。正直に申しますと想像していた人物像とは大変異なっていました。ニコニコと柔らかな笑顔が素敵な好青年という印象で、とても生き馬の目を抜く群雄割拠の第三内科で生きてきたとは思えぬお人柄でした。その後私が定年退職するまで、長きにわたり公私共にお世話になりました。

まず公の部分ですが基礎研究、特に実験科学に身を置く私は何よりも目の前で生じた現象を大切にしてきました。その現象を正しく解析するためにはどのような方法を用いるのが良いか、方法がなければ自ら開発しその妥当性を十分に検証した上でデータに基づく考察を加えるといった一見まわりくどい手法で研究活動を行ってきましたが、石橋先生が醸し出す雰囲気にも似たような匂いを感じていくつか共同研究をさせていただいたことがあります。先生の研究は臨床研究というよりも基礎研究に近いもので親近感をいただいています。

これ以下は私事になるのをお許しください。実は私には母親譲りの高脂血症があり同級生の信博君たちにも「研究対象になるほどだな。」などと言われ、石橋先生の外来でお世話になっていました。ある日外来受診後研究室で仕事をしていると石橋先生から電話があり、「血液検査の結果CPKが5,000近くに上がっているので至急来てください。」と言われました。「心筋梗塞を見逃したら洒落にならない。」とおっしゃりECG検査をしたり、検査室に残っていた血清を調べて否定して下さり二人で胸を撫で下ろした記憶があります。結局薬物の副作用による横紋筋融解だろうとのことで薬を変えて現在まで無事に過ごしています。

さらに私的な話になりますが、ある日「霧降高原にreasonableなステーキのお店がありますが、行ってみてはどうですか。」と教えていただきました。早速家内と行きましたが、上質な黒毛和牛(たしか前沢牛)であるにもかかわらず驚くほどの値段で調理も行き届いていました。このように趣味も多彩な先生には人間としての余裕を感じさせるところがあります。また当時自治医大でレジデントをしていた愚息も内分泌代謝科をローテーションしている時にご自宅に招待して下さり、まさに家族ぐるみのお付き合いをさせていただきました。

雑多な思い出話をしてしまいました。私は定年退職後に自治医大の卒業生が設立した「地域医療振興協会」で、全国に展開する卒業生と学生、教職員との連携を深める仕事をさせてもらっています。石橋先生にも自治医大OBとしてこれまで培ってこられた経験、人脈を活かした地域医療分野でのご活躍を祈念しております。そして今後も現役時代と同様に“共同研究(事業)”ができると幸いです。

石橋俊先生との思い出の断片

北里研究所・北里大学(特任教授)

供田 洋

石橋先生、ご退官おめでとうございます。

先生との出会いはもう 25 年くらい前になるのでしょうか。先生が東大の医学部 3 内に米国での留学から戻られていた頃、東大薬学部の新井洋由博士に先生をご紹介いただいたのが契機であります。当時、北里研究所の我々の研究室で発見した微生物由来のステロール O-アシル転移酵素(SOAT、当時は ACAT と略されていた)阻害剤ボーベリオライドについて、動物での動脈硬化進展に対する薬理効果を検証したいという目的でありましたが、先生は快く引き受けてくださいました。先生が構築・保持されていた LDL 受容体のノックアウトマウスと apoE ノックアウトマウスを用いて、私どもの研究員・生田目一寿君(現アステラス)が 2 年間にわたり動物実験のご指導をいただきました。薬理実験とは無縁であった我々の研究室であったこともあり、生田目君は大変苦勞したこととは思いますが、先生のご協力のおかげで明確な結果を持ち帰ることができ、その成果は PNAS (2004 年)に発表することができました。その後、私が薬学部に移った折、医薬基盤研究所からの助成(2006-2010 年度)を受けることができ、再び先生のお力にお縋りすることとなりました。この時先生は、(あつという間に)自治医大の教授としてご栄転されておられました。SOAT に 2 種の機能の異なるアイソザイムの存在が明らかとなり、SOAT2 を選択的に阻害することがわかってきた化合物ピリピロペンの薬理効果の実証でありました。先生はそれまで SOAT1 のご研究をされておられましたが、この時も快く共同研究を引き受けてくださりました。研究室で博士号を取得したばかりの大城太一君(現在、私の退官後の研究室の教授)が今度は先生のもとでご指導をいただくこととなりました。大城君も着実に成果をあげ、先生との共同研究として ATVB (2011 年)や JPET (2015 年)などの雑誌に成果を残すことができました。生田目君も大城君も大酒飲みでありましたので、この点でも先生には大変ご迷惑をお掛けしたのではないかとずっと心配しております。ピリピロペンの研究は着実に？進展させることができ、より優れた誘導體 PRD の創製、さらに創薬を目指し 2021 年にはベンチャー PRD Therapeutics を設立し、現在、臨床試験を目指して準備をしています。先日も自治医大の先生方のご意見を伺いに押しかけ、これからも先生のお力を頼りにしている次第です。大城君のあとも、先生のもとには研究室の卒業生が押しかけました。坂井謙斗君(現山梨大学)はポスドクとして、さらに山室大介君は最後まで先生のもとで研究を続け、学位の取得までなし遂げたと伺い、私はホッとしております。今思い浮かべても、本当に多くの人間が先生のもとでご指導を受け、さらなる成長を続けておりますことに、心より感謝申し上げます。また、私自信、先生のお計らいで身に余る場所で講演させていただく機会を与えてくださいました。特に、動脈硬化 Update (2008/9/4@東京プリンス)と第 20 回動脈硬化教育フォーラム教育講演(2020/2/2@京王プラザ)が思い出されます。とても光栄なことであり、感謝しかありません。先生のいつもにこやかな笑顔を思い浮かべながら、これからの先生の人生がますます充実したものとなりますことをお祈りします。本当にありがとうございました。

石橋 俊先生の教授ご退官に寄せて

国立がん研究センター理事長

中釜 斉



石橋俊先生、教授ご退官おめでとうございます。長年にわたり、教授の重責を果たされてこられたことに対し、友人の一人として、深く敬意を評したいと思います。

大学時代を振り返ると、学業面での石橋先生(以後、石橋君と呼ばせて下さい)との共通の話題は必ずしも多くなかったと思いますが、スポーツに没頭した点では互いに共感するものがあったのではないかと思います。私はバレー部に所属し、自らの役割を意識しながらチームに勝利をもたらすべく励んでいました。一方、石橋君は個人競技である陸上部に所属し、常に自らに高いノルマを課すかのように、御殿場グラウンドで一人黙々と短距離のトレーニングに励んでいた姿がとても印象的でした。チームの中で自らが貢献できるピース(役割)を見出し、チームとして成長するための技術向上にメンバーが一丸となって取り組むチームスポーツと比べると、短距離競技に打ち込む学生時代の石橋君は正に孤高の求道者というイメージでした。大学教授としての石橋君のイメージも求道者そのものであったのか、皆様からの寄稿文を今から楽しみにしているところです。

1982年に医学部を卒業した後、石橋君とは二年間の初期研修をともに過ごしました。最初の一年間は東大病院で研鑽を積み、二年目は小平記念東京日立病院(現在の東都文京病院)で丸々一年間を共に過ごしました。同級生ではもう一人の英才、大石展也君(東京通信病院呼吸器内科部長)とも一緒でした。大学病院での研修では2~3名の患者さんを受け持ち、医学書や文献を読みあさりながら、多少の余裕を持って医学知識の集積と診療経験を積むことができたのですが、二年目の東京日立病院では多様な病態の10名前後の患者さんを一度に受け持つ必要があり、毎日が火の車状態であったと記憶します。自らの医療行為が適切なものなのかを常に自問自省しながら、時に強い不安を抱えながらの研修だったのですが、その際にも、堅実で充実した医学知識を持ち合わせていた石橋・大石の両君と一緒に過ごすことができたのは私にとってはとても幸運でした。二人の優秀な同級生との切磋琢磨の二年間で、内科医として少しばかりの自信と耐久力を育むことができたことは、その後の私の人生において、大きな財産になったことは間違いないと思っています。

研修医生活を終えて、共に東大病院第三内科(当時、高久史麿教授)に入局。内分泌・代謝学と消化器・肝臓病学と異なる専門分野を選択したことから(*大石先生は呼吸器病学)、その後の医療界での接点は限定的なものとなりましたが、私にとっては医療者・研究者としての在り方に関して、初期刺激(イニシエーション)を与えてくれた同志の一人として、石橋君には今でも深く感謝しています。約40年の時を超えて、また新たな人生を迎えるに当たって、改めてお礼を述べたいと思います。求道者・石橋 俊先生のこれからの益々のご活躍を祈念します。今度、一緒にバーベキューでもしましょう。

石橋 俊先生の後輩として長く接しさせていただいて

国際医療福祉大学 市川病院

野田 光彦



石橋 俊先生は昭和 57 年の東京大学医学部医学科のご卒業で、私の 2 年先輩にあたる。東京大学第三内科における学兄でもある。

もう三、四十年も前のことになるが、第三内科時代には、医局のカンファレンスなどにおける内分泌代謝疾患についての討議やディスカッションを一手にお引き受けになり、議論をリードしておられたシーンが昨日のように甦る。Carney complex といった当時先駆的であった疾患概念についても言及しておられたことが脳裏に思い起こされる。

石橋先生は英語にご堪能な先生であったとも拝察する。第三内科の医局旅行だったかのバスの中で石橋先生が書物を読んでおられたことがあった。私が、先生が読書中のご本の中身についてお尋ねしたところ、ジャレド・ダイヤモンドによる『銃・病原菌・鉄』であったが、驚いたのは、それが英文原著であったことである。すなわち、英語で書かれた“Guns, Germs, and Steel”に熱心に目を落として熟読しておられたのであった。

私は、自治医科大学大宮医療センター(現 さいたま医療センター)に石橋先生より随分先に奉職し、5 年半近くに亘り内分泌代謝疾患の診療を中心に勤務した。その後、石橋先生が内科学講座内分泌代謝学部門の教授としてご着任され、学位審査や同窓会などの機会に、折に触れてお呼びいただき、お目に掛かるチャンスが多くなった。ご厚誼に感謝申し上げる次第である。

先生は、文京区の本駒込に居を構えておられ、まだ私の娘が小さかった頃、わが家から程近い神田明神の祭礼で、ご家族とご一緒にいらしていた石橋先生に、私ども夫婦と娘がぼったりお会いしたこともあった。懐かしい思い出である。その娘もすでに二児の母、月日の経過は早い。石橋先生におかれては、今後益々お元気に、是非、先達として私ども後進を、大所高所からご指導いただければ嬉しいかぎりである。この点をお願い申し上げつつ、擲筆する。

自治医科大学での石橋先生の功績を称える記念文集に寄せられる他の方々の原稿とは、この原稿は、だいぶ、文調が異なっていると予測されます。予めお断りします。

私は至って人付き合いにおいて不器用(というよりも無様)、臆病なくせに、時に失礼千万な態度をとる(緊張を強いられる分、億劫になってしまうため)人間で、したがって、世間が狭く、偏屈者とみられているのではないかと思います。そんな私にも心優しく向き合ってくださいる有難い(本当に、有難い)友人(とお呼びしてよいですね?)が石橋俊さん(本稿では石橋先生でなく石橋さんと書くことにします)です。

石橋さんとは、学生時代の外来実習でご一緒させて頂いたはずです。石橋、小林の陸上部コンビと、梶村、畑でしたねえ、石橋さん?(実は記憶があやふや)卒業研修でも同じ科で過ごしました。第一内科で一緒でしたねえ、石橋さん?(これは間違いない)小学校や高校の同窓会の席で、あの時、あんなことをした、その時、お前はこんなことを言ったと、微に入り、細に入り、何十年も前の出来事を再現する優れた記憶力の持ち主がいます。ところが、私においては、社会性・社交性欠損の一症状か、人との交流の具体的事実の輪郭が、数年のうちに曖昧となってしまいます。二十代の日々は、霧の彼方に霞み、外来実習や初期研修での石橋さんとの交流に関わるエピソードをビビッドに描出することができません。(残念)そんな私でも、アメリカはDallasのTexas大学、Southwestern Medical Centerに留学した時、Joseph Goldstein先生、Michael Brown先生の教室に在籍していた石橋さんに、空港への出迎えにアパート探しと、種々、お世話になった時期の交流となると、あれこれ思い出せます。特に留学初日の印象は強いのですが(涙が出るほど心細かったので)、その話は別のところに書きましたので、今回は省略します。Dallasでは、何度か石橋家にお邪魔させて頂き、奥様の手料理をご馳走になりましたし、三人のお子様に囲まれた暖かいご家庭に触れて、しみじみ羨ましいと感じました。私はその代わりに日本のテレビ・ドラマのビデオをお貸しました。鈴木保奈美主演のドラマ「愛という名のもとに」でしたねえ、石橋さん? 斉藤由貴主演「女事件記者立花圭子」もお渡ししましたね。さらに、その後は、私の研究室に学生を派遣して下さったり、まだ東大にいた当時の石橋グループで研究発表の機会を頂いたり、非連続的ながらも、コンスタントに接点を持ち、先日も夕食を共にしました。

こうした40年(長い!)余りを振り返るとき、私の中に立ち上がる石橋さんのイメージは、一貫してぶれません。私など昆虫並みに変態したのに、石橋さんの外見はあまり変わっていません。笑いをたたえた目(目じりに少し皺がよっている)と白い歯がのぞく口元(何か言いたそうなだけでも、あえて言わないことにするよと告げている)。石橋さんの方を向くと、何やら温かい空気が流れてくる感じがします。自治医科大学の教室員の皆様が石橋教授に対してもたれる印象は、もしかすると、全く異なるのかもしれませんが、鷹揚にして長閑、それが私の印象です。稀有な大人(たいじん)と思います。(ちょっと、褒めすぎか?)でも、実際、そのように思うのです。

石橋さん、温泉につかって手足を伸ばす時のように、脱力OKなゆるゆるとした御付き合いを、これからも末永くお願いします。

ひたすら感謝です

東京農工大学 保健管理センター

原田 賢治

石橋俊教授のご退任・ご退職にあたり、思い出を綴り、感謝を述べさせていただきます。

私が学生のころ、夏休みの期間に、高久史磨先生が当時教授をされていた東京大学第三内科のいくつかの研究室を訪問する機会がありました。その際に、矢崎義雄先生が石橋先生をご紹介くださり、第2研究室(2研、村勢敏郎先生の研究室)で一日見学をさせていただきました。この見学について、石橋先生ご自身は全く覚えていらっしゃらないようですが、私としては、研究室のアットホームな雰囲気が大変に良くて、全く知識のない学生に対して親切にして頂いた、という思いがありました。そのこともあって、大学を卒業して第三内科で研修し、山田信博先生からお誘いを頂いて研究室(2研・11研)に入ったのですが、石橋先生は研究室でも病棟でもパワフルに働いておられて、研修医への面倒見も良くて大変に慕われ、入院係をされていたときには同日入退院を駆使して病床稼働率が100%を超えることもあった、というのは、いかにも石橋先生らしいエピソードと思います。当時の研究室の状況の例えとして、山田先生が店の旦那さん(店主)で、石橋先生が働き者の大番頭さん、そして我々は丁稚どんたち、と言われていました。なお、石橋先生のご自宅に伺う機会があり、ばりばりと研究をする一方で、ご家族も大変大事にされている、ということが印象的でした。その後、石橋先生は、ノーベル賞受賞者であるゴールドスタイン先生とブラウン先生の研究室(テキサス大学)に留学され、ノックアウトマウスとアデノウイルスベクターという最先端の技術による成果を手土産に帰国されました。石橋先生の留学中、石橋先生が担当されていた患者さんの外来を私が担当していたことがありましたが、カルテを緻密に記載されていることに感嘆し、一方で、石橋先生の手書きの文字が、斜めの線がたくさん平行に並んでいるように見えて解読に苦労した、ということもありました。石橋先生が帰国されてしばらくしてから、American Heart Association の大会がダラスで開催され、石橋先生がテキサス大学を訪問される際にご一緒させて頂く機会がありましたが、ゴールドスタイン先生とブラウン先生が、石橋先生に対して「シユン、いま何をやっているのか、何を見つけたのか」と情報を探るようにずっと問い続けていて、ノーベル賞をとった二人からも石橋先生の活動が注目されていることを感じました。また、私がスタンフォード大学のクレマー先生の研究室に留学することができたのも、石橋先生が紹介してくださったおかげであり、本当に感謝しています。私が留学中におこなっていたことと、石橋先生が当時東大の研究室でされていた仕事を、共同研究ということにして頂いた件も、大変にありがたいことでした。さらに、私が帰国後、東大病院の医療安全の仕事の任期が終了する際に、石橋先生にご相談をして自治医科大学で雇っていただけそうにもなりました。最終的には、永井良三先生から私の今の勤務先である東京農工大学をご紹介頂き、自治医大での勤務のお話はなくなりましたが、困っていた時に何度も救って頂いた、ということについて心より感謝いたしております。石橋先生にはひたすらにお礼を申し上げます。ありがとうございます。

走り続ける Shun 石橋先生へ

東邦大学医療センター佐倉病院

武城 英明



石橋 俊先生、自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授ご退任ご退職を迎えられるとのことお慶び申し上げます。

石橋先生には論文や学会でたいへんお世話になりました。初めてお会いすることのできたのは私が留学から帰って間もないころと思います。留学中、卵を産まない鶏の原因となる LDL 受容体と似ているものの LDL 受容体とは違う卵黄受容体のクローニングを行なっていました。その大きな違いはネガティブフィードバックを起こさないことでしたので、世界の中心ダラスで先頭に立って LDL 受容体の仕事の最先端を走っていた”Shun”先生のお話は研究室のボス Schneider 博士よりよくよく拝聴していました。学会で先生からいただける核心のご質問やコメントを楽しみに発表の準備をしたこと、先生のお話を緊張しながら聞いていたことを思い出します。先生はいつも優しい笑顔でお話され、また、育った地が思いがけず近くだったこともわかり、それからほぼ 25 年、いろいろ楽しい時間を過ごさせていただきました。エピソードといえばやはり研究班で北 徹先生から大阪大学山下静也先生と3人にいただいた仕事、家族性高コレステロール血症の全国調査でしょうか。まだ個人のパソコンで統計処理するのは容易でなかった頃、私が初歩解析を担当し作った論文案を山積みのフロッピーとともに石橋先生に送ったところ、詳しく解析くださりリスクと合併症を表した図とともに素晴らしい内容にされ、今でもスタチンの普及する前の FH 像としてよく引用される論文とすることができました(JAT 2004;11:146)。その後、いろいろと一緒に仕事をさせていただきましたが、LCAT 欠損症のリポタンパクサブフラクション解析でお力をいただいたところ(ATVB 2014;34:1756)、先生は LCAT の基礎研究(JLR 2020;61:1287)で新たな知見を提唱され、さすが今なお最先端を走り続けていることに感銘し、また昔を思い出しました。ところで、アテネの研究会を覚えていますか。確か、2泊4日の予定で前夜遅く郊外のホテルにチェックインし、私はフロントで勧められたジョギングコースを走り朝食をとりに行くとそこにすでに石橋先生がいらしていました。市街地までのマップを持ちながら観光も含めて走ってこられたとのこと、爽やかに話されていました。その後、新幹線で登山の道具を持った先生にお会いしましたが、今も学会の合間に走っていますか。この度、羽生で新たに実地医療を始められるとのこと、いつまでも私たちのリーダーとして走り続けてください。



アテネのレストランにて

共同研究の思い出

幹細胞制御研究部

古川 雄祐

私が石橋先生と初めてお会いしたのは、先生が東大から赴任した翌年である2002年の夏のことで、当時の学長であられた故・高久史麿先生を顧問として立ち上げた「生活習慣病と明日の医療を考える会」という勉強会の代表世話人への就任のお願いに上がった時でした。先生の第一印象は、物静かで、物事をじっくり論理的に考える学究の徒という感じでした。以来20年、その印象は全く変わらず、実際、臨床と研究の両面で素晴らしい学問的業績を残され、自治医科大学に大きな足跡を残されたことは周知のとおりです。

勉強会の方は今にして思えば、教室の基盤形成の一番大事な時期に良くご了承いただけたものと改めて感謝する次第ですが、ご多忙の中、2005年まで代表をお務めいただき、生活習慣病の臨床と基礎研究を橋渡しするさまざまなテーマで講演会を定期的を開催し、ご出席の先生方に好評をいただきました。

その後、2007年の秋には、私共が行っていたマウスの造血幹細胞移植の手法を、先生のご専門である動脈硬化の成因解明のプロジェクトに応用するという共同研究がスタートしました。共同研究は順調に進行し、結果は2009年に *Cell Metabolism* 誌に publish されました。研究成果が一流誌に採択されることは研究者として最高の栄誉の1つではありますが、石橋先生は成果よりもデータの正確性や発展性に重きを置いており、研究者のあるべき姿を体現されていると感心したことを今でも思い出します。2005年に学内で「研究業績評価ワーキンググループ」という ad hoc の委員会が形成され、私と石橋先生もメンバーでしたが、委員会の席で先生が「研究者をインパクト・ファクターのような単純な指標で評価するべきでない」と強調されたことを覚えております。

退官後はお祖父様の医院のあった地で診療に当たられるとのことで、文字どおり原点に戻られて地域医療に大きく貢献されることかと存じます。体調にはくれぐれもご留意の上、益々ご活躍されることを祈念申し上げます。長い間、有難うございました。

石橋教授のお人柄に惹かれました！

市立砺波総合病院 集中治療・災害医療部

古村 芳樹

私は、医学部3年の系統講義を通して、内分泌・代謝内科(より限定すると甲状腺)に興味を持ちました。当時、石橋教授の温厚で物腰の柔らかい雰囲気の魅力を感じていたことも、内分泌がいいなと思ったきっかけとなりました。ぜひ石橋教授のセミナーを受講したいと思い、同期2人を誘って、一緒に身体所見について学ぶセミナーを取りました。お忙しい中、私たち学生とディスカッションをして頂いたことが印象的でした。またセミナーを受講した3人を、ご自宅にお招きして頂き、お肉を振る舞って頂いたこともとても楽しかったです。その際、私たちが大事な七輪を壊してしまい本当に申し訳ありませんでした(私ではありません笑)。そんな時も穏やで、懐の深さを感じておりました。他にも、フリーコースで私のメンターを担当して頂いて、内分泌・代謝内科での長期的な実習、学会発表、海外研修の機会を与えて下さいました。卒業後は、石橋教授が金沢に学会に来られる際にお声をかけて頂き、お寿司を一緒に食べられたことも嬉しかったです。私事で恐縮ですが、出身の富山県で9年勤務(臨床研修2年後は、一般内科・総合診療2年、救急・ICU2年、内分泌・代謝内科2年、山間部の診療所1年)しました。楽しかったこと、心が折れかけたこと色々ありましたが、どの職場でもスタッフに恵まれ、充実していました。今年度で9年間の義務年限が終了となり、2023年4月から甲状腺専門病院の隈病院に入職します。進む道のきっかけを与えてくだり、お世話をして下さいました石橋教授に心より感謝しております。本当にありがとうございます。新天地でもご活躍をお祈り申し上げます。

Ode-to-Shun-Ishibashi

University of Texas Southwestern Medical Center

Joachim Herz

Shun Ishibashi and I arrived in Dallas around the same time, in 1989. Both of us were drawn to the Department of Molecular Genetics, where Mike Brown and Joe Goldstein were the vanguards driving the understanding of cholesterol metabolism, lipid transport and atherosclerosis. Shun's goal was to learn everything about the LDL receptor. I, on the other hand, was obsessed with finding out whether my hypothesis that LRP1, a gargantuan cousin of the LDL receptor I had just discovered while working at EMBL in Germany, was indeed the long-sought-after - fabled - chylomicron remnant receptor, whose existence had been postulated by the ground-breaking work of Toru Kita in the same department several years earlier, was indeed correct.

We soon discovered that to succeed in our mutual quests, we needed each other. Only genetics could solve the mysteries that had enthralled us. What both of us needed were knockout mice in which we could study our favorite genes and how they interacted with each other and other metabolic pathways in the liver. So together Shun and I generated the LDL receptor knockout mouse, which remains one of the most indispensable and widely used animal models for drug discovery and preclinical research today. As of the time of this writing, these mice have been used in ~4500 studies by our colleagues all over the world.

But, as is common, yes, almost customary among scientists, Shun and I were not only friends, we were also fiercely competitive with each other. This competitiveness is what at its heart drives science and our knowledge of the natural world. But never did it come out more clearly than during my visit to Japan in 2019. And what a memorable visit it was! I was privileged to see again, not only Shun, but also many others of my old friends from Japan who had passed through our department in Dallas over the last 45 years. Together, they had convinced the committee organizing the meeting of the Japanese Atherosclerosis Society in Kyoto that year that they should invite me as a speaker.

I had a wonderful and unforgettable time in Kyoto in the company of Shun and all our mutual friends, but I had not anticipated what would come next: In a careless moment, I had confided to Shun that one of my dreams in life was to climb Mt. Fuji. Shun wasted no time arranging for my wish to come true. On July 13, 2019, we arrived at the top of Mt. Fuji, as the picture attests.

I leave it to the reader to determine who won.....

PS: To Shun, may fortune be with you, wherever life may lead you next (Your friend in the picture with you)



ランナーの石橋先生、 またホノルルマラソンを一緒に走りましょう！

医療法人南昌江内科クリニック

南 昌 江

ご退官、誠にありがとうございます。また大変お疲れ様でした。

記念誌の1ページに加えていただけることを大変感謝いたします。

私は福岡で1998年から糖尿病専門クリニックを開業しております。数年前に自治医大で1型糖尿病の講演をさせていただきました。その時に石橋先生がランナーだとお聞きし少し驚いた記憶があります。2019年の11月末に石橋先生から突然のメールがあり、私が毎年参加している12月のホノルルマラソンに参加されるとのこと！是非ともTDJ(Team Diabetes Japan)のTシャツで走ってくださいとお願いしました。はじめ、先生は「おじさんがそんな可愛いTシャツ着るなんて恥ずかしいなあ」と躊躇されていましたが、ホノルルでの懇親会ではすっかり気に入って？いただいたようでした(写真1)。

石橋先生はお名前の通り大変俊足で、ホノルルマラソンでは、途中のハイウェイですれ違いましたが(写真2)、先生のゴールが早すぎてゴール後の写真はご一緒できなかったことが残念でした。

ご退官後はクリニックをご開業されるとのことで、重ねてありがとうございます。さらに精力的に活動される先生の活力の源はランナーの精神からなのではないでしょうか。少し落ちつかれましたら、またホノルルマラソンをご一緒してくださいね。その日を楽しみに私もランニングを頑張ります。

※TDJ;日本糖尿病協会のマラソンチーム「糖尿病でもできないことは何もない、という No Limit! の精神」で、患者さん、ご家族、医療従事者が一緒に走る企画を行っています。



2019年 Honolulu Marathon、TDJ

東大時代の石橋俊先生との思い出

理化学研究所理事
東京大学大学院医学系研究科卓越教授

宮園 浩平



石橋先生と最初に会ったのは1976年の春、私が東大教養課程の2年で、石橋先生が1年生として入学されたばかりのことでした。私は中学生の頃に陸上部に所属していたこともあり、医学部の鉄門陸上部に所属していました。実は私は健康のために走ろうという軽い気持ちでいたので、選手としては全く役に立っていませんでした。そのころに入部してこられたのが石橋俊先生や竹内靖博先生(現・虎の門病院副院長)でした。石橋先生は体格も良く、見るからに短・中距離のホープという感じで、これからは大会でも勝てそうだと、先輩部員で大喜びしました。石橋先生は選手として期待に応えられたのはもちろんですが、温厚で優しい方で、鉄門陸上部全体がほっこりした雰囲気になり、部活動が楽しくなりました。

大学卒業後のことで忘れられないのは、私が東大第3内科で研究を始めた頃に、私の研修医時代の指導医だった村勢敏郎先生が、「石橋君が僕のグループに入ってくれることになった」ととても嬉しそうに私に話しかけられたことでした。石橋先生が入局された後は村勢先生のご配慮で、私も石橋先生と一緒に細胞の培養をやったりして短い期間でしたが大変楽しい時間を過ごしました。村勢先生と山田信博先生のグループは脂質代謝や動脈硬化の研究では大変有名でしたが、当時はまだ小さなグループでした。石橋先生が加わられた後の村勢・山田グループの発展をみると、石橋先生の入局とその後の貢献が大きな転機だったのでは、と思いを返しています。

石橋先生は自治医科大学を退任後はお祖父様の故郷に戻られクリニックを開院して臨床を続けられると伺いました。石橋先生は学生時代から物事をしっかりと丁寧に考えられる性格で、健康面でもさまざまなことに気を配られる方でした。医院の理念の最初に「心のこもった医療」とあるのを読み、先生らしいなと嬉しくなりました。石橋先生の今後のご発展を心より祈念いたします。

石橋 俊教授 退任記念：今後のご発展を期待して

公益財団法人 沖中記念成人病研究所

村勢 敏郎

この度は、石橋君が大学人として無事に責務を果たし終え、自治医科大学を退任なさる運びになったとの由、長い間ご苦勞様でした。

石橋君は、私が留学から帰国して東京大学の旧第3内科に脂質研究グループを立ち上げて間もない頃に入局し、2~3年後には今度は私が虎の門病院に移って、結局一緒に研究ができた期間は僅か2~3年間ほどでした。石橋君、その頃よく研究していましたね！ 仕事は早い！ 君は入局するとすぐに前向きに研究開始、まずは各種疾患の脂質代謝異常について、ということで“*Sheehan's syndrome*”に目を付けて症例を纏め、あつという間に論文に仕上げてしまったのですから立派でした。(論文は：Ishibashi S et al.

Hyperlipidaemia in patients with hypopituitarism. Acta Endocrinol. 110: 61, 1985)。

その頃のこと覚えておられますか？ 本郷に残された若い人たちは互いに切磋琢磨して、元気に頑張っていたらと思います。石橋君はまさにその筆頭、2001年に自治医大に奉職するまでグループのまとめ役だったのだらうとおもいます。

そういえば、石橋君と一度対談をしたことがありましたね。あれも懐かしい思い出です。(‘*The Lipid Vol 19, No3, 2008-7*)(日本語です)

石橋君、ところで、退職後の生活設計はもう出来ていますね？ 開業準備中との由、それを聞いてほっとしました。仕事始めにあたっては、まだまだ“*Sheehan's syndrome*”にもご注意ください！ です。今からちょうど半世紀前、私が駆け出しの頃にも同じような経験をしていますから：Murase T, et al.: *A survival case of myxedema coma of pituitary origin. Endocrinol Japon. 21:331, 1973*。

最後に、小生が80歳の時に経験した症例、“*Case report*”です。お読みいただければ幸いとここに提示させていただきます。これを契機に患者さんとのコンタクトが急によくになりました。論文は Murase T et al.

Biphasic dyslipidemia in a patient with painless thyroiditis. J Clin Lipidol (2018) 12, (1367-1370)。

石橋君、新しい環境の中で、興味ある症例をどんどん発掘して下さい。

君の新しい人生が実り豊かなものでありますように！

自治医科大学からは これまでに大学院講義、学生講義等々で、しばしば講演する機会を頂き、とても光栄に存じており、ここに深く感謝申し上げます。



2006年弘前での糖尿病合併症学会終了後、白神山地マザーツリーへの道すがら

動脈硬化研究の流れの中で

とちぎメディカルセンター 名誉院長 村野 俊一

私は 1975 年に千葉大学の医学部を卒業しました。学生時代から老化の研究を志し、熊谷朗教授の主催する母校の第2内科に入局し、臨床研修終了後、齋藤康先生が立ち上げた脂質代謝研究室に入れていただきました。当時は米国での Framingham study などから動脈硬化が癌と並んで医学研究の 2 大ターゲットとなった時代です。日本動脈硬化学会が設立され、この学会を基点に精力的な動脈硬化、脂質代謝の研究が始まりました。石橋先生の東京大学でも板倉弘重先生、村勢敏郎先生、内藤周幸先生、寺本民生先生などが参加されました。私も過酸化脂質の研究課題をいただいて研究を始め、初めての学会発表は動脈硬化学会でした。米国ではノーベル生理学・医学賞を受賞した Goldstein, Brown 両先生が LDL 受容体の研究を精力的に進めており、そこに京都大学の北徹先生、続いて石橋先生が留学されました。その研究室はテキサス州ダラスにあり、丁度その時期、私も隣のアーカンソー州リトルロックに留学して、遺伝性早老症、Werner 症候群の分子・遺伝学研究に取り組んでいました。リトルロックからダラスまでは車で7時間あまりなので、何回かお鮫を食べる目的でダラスに行きましたので、ひょっとすると石橋先生にはそんなところですれ違っていたかもしれません。千葉大学では熊谷教授の後任に自治医大の教授であった吉田尚先生が就任され、ご指導、ご薫陶をいただきました。石橋先生が自治医大の教授にご就任が決まった時、私も秋田大学老年科の助教授から栃木の JA 下都賀総合病院の副院長への転任が決まり、何かの会合の後に皇居近くの路上でお会いして、ご挨拶させていただいたことを思い出します。その後、2002 年に石橋先生を中心に栃木脂質代謝研究会を立ち上げることになり、第1回の講演会には筑波大学の教授になられていた山田信博先生、齋藤康先生、寺本民生先生、川上正舒先生と錚々たる先生方が記念講演を引き受けてくださり、石橋先生と私がパネルディスカッションの司会をさせていただきました。この研究会は現在まで脈々と続いており、栃木県の脂質代謝、動脈硬化診療の進歩に多大な貢献を続けています。脂質代謝や糖尿病関連の講演会がある度に石橋先生とは親しくお話させていただき、学問以外にも趣味の城跡歩きや加藤周一先生の著作のお話などを聞かせていただいたことを楽しく思い起こします。私はその後、JA 栃木厚生連下都賀総合病院の病院長職に就きましたが、臨床研修制度改変の大波をかぶり、千葉大学からの医師派遣が難しくなった時に、佐藤(齋藤)奈緒子先生、次いで若林徹治先生と大変優秀な先生方をご派遣いただいて糖尿病、高脂血症、内分泌診療を支えていただいたことには心から感謝をしております。栃木市内の 3 病院を統合してとちぎメディカルセンターを設立するに際しては、獨協医科大学内分泌・代謝内科の笠井喜久男教授、後任の麻生好正教授とも快く協力してご支援をいただき、自治医大、獨協医大が協力して運営するとちぎメディカルセンターが誕生しました。私の今日あるのは先生方のお蔭であると心から感謝申し上げます。石橋先生が大学を離れられることは大変寂しく感じますが、今後お仕事の間を変えられて、ますますのご活躍を期待しております。

石橋俊先生との思い出

京都大学大学院理学研究科

森 和俊

私が石橋先生に初めてお会いしたのは米国テキサス大学サウスウェスタンメディカルセンター(ダラス)留学中であった。石橋先生は1989年11月～1994年2月、私は1989年4月～1993年9月とほぼ重なっていた。ダラスにいた日本人研究者は多からず少なからず、ちょうど良かった。年に1回家族も含めてほぼ全員が参加するBBQパーティが開かれていたし、休日に一緒にゴルフするグループや土曜日夕方に一緒にテニスをするグループなどがあり、アパートに集まって飲み会をすることもあった。

石橋先生が所属していたBrown & Goldsteinの研究室は指導が厳しいことでよく知られていた。私にとって一番印象的だったことは、ある土曜日の夜の出来事であった。日本人研究者何人かが家族と共にある方のアパート(石橋先生宅だったような気がしている)に集まり夕食を共にしていたら、石橋先生が突然「これから大学に行く。今日何々の実験をしておいたら来週の実験が楽になるから」と言ってお出かけられた。石橋先生は下戸なので飲酒運転にはならないのだが、凄いなあと感心した。私も実験好きだったが、酒好きでもあったのでそんな真似は到底できなかった。

日本では、サウスウェスタンメディカルセンターに留学した研究者が集まるダラス会が4年に1回開かれていたが(日本医学会総会に合わせて)、私は参加していなかった。ある年、石橋先生が幹事を務めるというのでその会には参加すると返事をした。そのダラス会が開かれるのは、2011年3月下旬の予定であったが、その直前に東日本大震災が発生し、お流れとなった。

石橋先生が自治医科大学教授になられた後、2010年1月と2019年12月の2回、セミナーに招いていただいた。最善を尽くしたつもりだったが、石橋先生の研究のお役に立てたかについては心許ない。自分の研究で精一杯で、共同研究もさせていただけなかった。心残りである。

2021年に学会で京都に来られた際に、石橋ご夫妻と私共2人で夕食を共にして、楽しいひと時を過ごさせていただいた。感謝申し上げますと共に、石橋先生の第2の人生に幸あれとお祈り申し上げます。

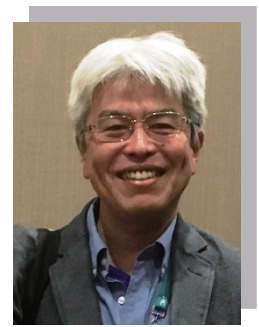


2019年12月16日 大学院特別講義

正直者の頭に神宿る

住友商事株式会社・住友商事診療所・所長

森澤 雄司



石橋俊先生の御退官に際し、僭越ながら一言、御挨拶を申し上げます。

振り返りますと、不肖私、石橋先生とは、東京大学医学部附属病院以来、実に長いお付き合いになっていきます。もともと石橋先生が第 3 内科、私は第 1 内科といわゆる医局が違っていたのですが、東大病院で 1998 年に内科学講座の臓器別再編成があり、そこから御縁をいただいております。再編成の少し前に木村哲先生（現・東京医療保健大学名誉学長）が感染制御部・感染症内科の教授として着任され、私は感染制御部・助手に拾っていただき、感染症診療を続けていました。その再編期に教授が不在であったという事情もあり、感染症内科と糖尿病代謝内科が木村哲先生の下で単一の医局として運営されることになりました。そして、今から考えると不思議にも思いますが、感染症内科と糖尿病代謝内科は合同で教授回診を実施することになり、ということで毎週 1 回はチャートラウンドおよび病棟回診で石橋先生と御一緒することになったのでした。

当時は若気の至り、自分の担当症例でなくても平気で‘つつこむ’戦闘モードを常としていました私は、当然のように糖尿病代謝内科の症例にも“この抗菌薬はないでしょう”とかウザク突っ込んでいた訳ですが、そんな中、（不肖私の勘違いいかもかもしれませんが）石橋先生は嫌がられることなく、むしろ楽しそうにこちらのコメントを聞いて下さっていたように思います。

その後、石橋先生は 2001 年に自治医科大学に教授として赴任され、私も遅れて 2004 年に感染制御部長として着任しました。感染症科の立ち上げや臨床栄養部の運営などで大変に御世話になりました。そんなある日、いつだったか石橋先生がすれ違いざま、“モリサワくん、HFpEF って知ってる？”とおっしゃられたので“えっ、EF の保たれた心不全ですよ”とお答えしたところ、“なんだ、知ってるのか、つまらん。ところでそれって常識？”と少年のような瞳でおっしゃられたのが忘れられません。内科学講座の教授でありながら、何と飾らない態度でしょうか。一方、新型コロナ流行の中でも、日々の対応に右往左往するばかりの私とは違い、COVID-19 症例におけるマクロファージの脂質代謝物について論文をまとめられ、その中で不肖私も末席に加えていただきました。‘真の科学者とは知らないことを知らないと明言できる者のことだ’という言葉は石橋先生のためにあるような気がしていましたが、その思いを一層に強くしました。真の臨床家もそうなのでしょう。

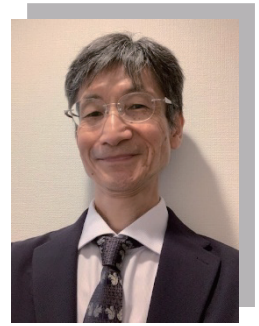
たまたま石橋先生が退官されるのに先立って私も自治医科大学を離れることになりました。このことから勝手ながら浅からぬ御縁を感じています。石橋先生、これからもどうぞ御健勝で一層に御活躍くださいますように衷心よりお祈り申し上げます。

（前・自治医科大学附属病院・感染制御部長・感染症科（兼任）科長）

山紫水明の人、石橋俊先生

関西電力医学研究所 統合生理学センター長
岐阜大学糖尿病内分泌代謝内科 招へい教授

矢田 俊彦



医学部、病院は、良きにつけ悪しきにつけ、社会と向き合っており、日常に振舞わされる。石橋先生はそれをこなしつつ、それに埋没せず、迎合せず、常にご自身の思いで歩まれた。

私は2000年に自治医大に着任したが、石橋教授は1年後の2001年に着任され、すぐに私を訪ねてくださった。その時、はじめてお目にかかったが、共通の趣味である登山の話になったことを鮮明に覚えている。その後17年間、大学、大学院の仕事から共同研究まで、多くの作業を共同でさせていただいた。その際、石橋教授以外からは聞けないコメントやご意見を度々いただいた。しがらみやポリティックスに左右されず、原点に立ち返ること、プアアな視点を示して下さいました。先生が大切と思われていることから発していたのだと思う。その点で、山の言葉で表現すると、先生は「山紫水明」の人である。先生が定年退職後、出身のさいたまの田舎でクリニックを始められると伺った時、先生らしいと思った。いろいろな選択肢のうちから、そこに、ご自身の納得のいく活動を感じられたのだと思う。

長年、自治医大でのご奉仕お疲れ様でした。公私にわたりお世話になり有り難うございました。今、自治医大を登頂・下山され、次の峰をめざす石橋先生、地域の方の心身の霧を晴らすお働きに幸あれ！最後に、イギリスの冒険家、ベア・グリルスの言葉を贈りますー良い登山とは、野心や誇りではなく心や本能で登ることだー。



2008年6月30日 セミナー終了後の懇親会



2007年3月7日 セミナー終了後の懇親会

石橋俊先生との出会い

自治医科大学 内科学講座 内分泌代謝学部門 教授

矢作 直也



石橋俊先生、この度は定年ご退官、誠にめでたうございます。また、長い間、大変ご苦労さまでした。22年もの長きに渡るご貢献は前人未達の偉大な記録であり、おそらく今後も塗り替えられることはないように思われます。本学の歴史に不滅の足跡を残されましたことに深い敬意を表したく存じます。

石橋先生は、小生にとりまして、故・山田信博先生とともに内分泌代謝学の道へ誘って頂き、また最初の手ほどきを施してくださいました恩師です。最初の出会いは1994年頃のことですので、当時まだ36歳のお若さだったこととなりますが、当時すでに大教授の風格を備えておられました。米国留学から戻られて間もない頃で、世界最先端の分子生物学と発生工学をノーベル賞ラボ(ゴールドスタイン・ブラウン博士研究室)から持ち帰られ、我々に教えて下さった伝道師でした。当時は分子生物学全体が急速に発展しつつあり、かつまた医学分野に強烈なインパクトを与え、molecular biology が game changer になった時代でしたが、まさにその最先端で game change を自ら行っていたスーパースターのお一人であり、そのような世界に強い憧れを抱き入門させて頂きました。

そんな、まさに新進気鋭の若きスター研究者だった石橋先生ですが、実は自分が一番最初に出会わせて頂いた場面は、確か、旧第3内科の深夜の病棟だったと記憶しています。1年目の研修医に成り立ての頃で、文字通り右も左もわからず、点滴の指示書なども見よう見まねで書き方を教わっていた時分に、北病棟に入院していた患者さんの病状が未明に悪化し、どうしてよいかわからず、たまたま病棟当直をされていた石橋先生にご相談申し上げたところ、とても丁寧に診てくださって、その上、優しくご指導頂き、本当に救われたことがございました。あの頃の3内の病棟というのは大講座(大内科)でしたので、血液疾患から呼吸器や循環器、消化器疾患などすべての内科疾患を受け持っていましたし、また今のようにHCUなどもなく、人工呼吸器管理なども一般病棟で行っていて、その上、1年目の研修医が少なくとも形の上では主治医として診療に当たるといって過酷な環境でしたので、自分などは毎日、戦場にいるかのような極度の緊張感に包まれ、生きた心地もしない日々でしたが、そんな中で石橋先生の優しさ、お人柄に触れることが出来、文字通り、救われました。

そして大学院に進学後、本格的に石橋先生に研究のご指導を頂くようになり、先生が自治医科大学へ赴任される2001年頃まで集中的に脂質代謝学を学ばせて頂きました。この頃は駒込のご自宅にも度々お邪魔させて頂いたり、医局野球などでご一緒させて頂いたのもよい思い出です。その後も今日に至るまで、大所高所からご指導を賜って参りました。そうして授けて頂いた学問が今の自分の礎となっていることは言うまでもありません。この度、たまたまのめぐり合わせで、恐れ多くも先生の後任として着任させて頂くことになり、身の引き締まる思いですが、先生を北極星のように道しるべとして仰ぎ見ながら、これからも進んで行かれたらと気持ちを新たにしております。

石橋俊先生、これまで長年に渡り、公私共に大変お世話になり、本当にありがとうございました。今後の益々のご活躍と御家族皆様のご健勝を祈念申し上げます。



東大病院医局対抗野球大会、荒川土手グラウンド

石橋俊教授のご退任にあたって

東京大学大学院医学系研究科 糖尿病・代謝内科 教授

山内 敏正



石橋俊先生、自治医科大学内分泌代謝学部門教授のご退任、誠におめでとうございます。

思い起こしますと、石橋先生のお名前を知ることとなりましたのは、やはり何と申しましてもその研究業績の素晴らしさでございました。山田信博先生の研究室における LPL や ApoE と VLDL の代謝の関係を明らかにされる素晴らしい研究業績を引っ提げて、世界の Goldstein JL & Brown MS 研究室にご留学され、家族性高コレステロール血症の原因となる LDLR の個体レベルでの機能に関して、ノックアウトマウスを作製されて証明されたのは石橋先生である、と諸先輩方から伝説の先生として教えていただきました。

ご帰国後も「原発性高脂血症に関する調査研究班」の研究代表者を務められる等、患者さんの為に、研究と臨床の橋渡しにもご尽力賜り、タンジール病等が難病指定される上でも大きなご貢献をされました。

研究・臨床のみならず、教育にも大変ご熱心で、情熱的に後輩をモチベートしていただきました。糖尿病・代謝内科の会等で、予防の大切さをお話いただいたのが大変印象的でした。「名医はすでに生じた病気を治すのではなく、未病の内に治す」と紀元前の中国の「黄帝内経」の話でディスカッションさせていただき、感銘を受けました。2018年7月に私山内が東京大学の糖尿病・代謝内科の教授に就任して後も、母校の出身教室のことを気にかけて下さり、研究会の世話人会や懇親会で、毎回のように、グローバルな視点を忘れないこと等、見識高く将来を見渡すご高説を賜りました。新人を勧誘して、若手を育成することの大切さも繰り返し、ご指導・ご教示いただきました。2019年度より来年度 2023年度まで、毎年10名以上の新人が、東京大学の糖尿病・代謝内科の専攻医として専門医研修をはじめていることをご報告することが出来、石橋先生の教えを少しは実践出来て良かったと私自身もほんの少しホッとしましたが、石橋先生も少し安心されたご様子であったことをとても嬉しく感じました。

石橋先生は、特に陸上部の後輩等にも大変良くしていただいております、現在の教室員の中にもそのご恩を胸に刻んで頑張っている者がございますこと、本当に有難く心より御礼申し上げます。

この様に、石橋先生から多くのご指導を賜りまして、私は今感謝と御礼の気持ちでいっぱいでございます。石橋先生の自治医科大学内分泌代謝学部門、ならびに東京大学医学部・大学院医学系研究科における長年のご功績に感謝申し上げ、心より教授ご退任のお祝いを申し上げます。

石橋 俊先生との思い出

地方独立行政法人りんくう総合医療センター 理事長 山下 静也



石橋 俊教授と初めてお会いしたのは、日本動脈硬化学会学術集会ではなかったでしょうか？その頃は故山田信博先生のもとで、リポ蛋白リパーゼや細胞内コレステロールの調節を行う ACAT や NCEH の研究を精力的にされており、Goldstein & Brown 教授のところへ留学されました。ご帰国後は自治医科大学の教授として赴任され、特に原発性高脂血症研究班の班長をされていたので、大変お世話になりました。その際に原発性高脂血症(脂質異常症)の全国の症例登録(PROLIPID 研究)を企画立案され、それが現在も登録が続いています。一方、全国レベルの講演会では動脈硬化 UPDATE や Atherosclerosis & Biolipid カンファレンスで、世話人の1人としていつも会の企画や運営で一緒させて頂きましたし、全国の家族性高コレステロール血症の調査研究班(FAME)では運営委員として一緒に頑張り、英文論文を3つ発表することができました。また、選択的 PPAR α モジュレーターであるペマフィブラートの開発に関しても共同研究メンバーに入れて頂き、国内での多くの臨床試験の企画や学会・論文発表を一緒にさせて頂き、現在も多くの論文投稿の準備をさせて頂いています。石橋教授は大学時代に陸上部であったそうで、よく山登りをされ、特に日本百名山を制覇されたことを大変喜んでおられました。今はまた次の百名山制覇を実行されているのではないのでしょうか？ 日本動脈硬化学会では釣り好きが多く、よく皆で集まって全国各地で船釣りを楽しみ、釣った魚はバーベキューで一緒に食べ、飲みながらワイワイ楽しく宴会をやっていたことが懐かしく思い出されます。最近ではコロナ禍で釣りには行けなくなっていますが、また一緒させて頂きたいものです。今回、自治医科大学を御退官され、開業医としての新しい人生を歩まれるそうですが、大学時代とは違った楽しさがあると思いますので、思う存分エンジョイして研究も続けて頂きたいと思います。石橋 俊先生の今後のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。

石橋俊教授のご退官に添えて

群馬大学大学院 内分泌代謝内科学

山田 正信

石橋先生、長年にわたる教授の重責を果たされここに無事にご退官を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

私は日本内分泌学会や各種研究会などで先生には大変お世話になりました。先生は脂質代謝系をご専門とされ、私は脂質系で疑問があるといつも先生にうかがって、その度に丁寧にご教授いただき大変感謝しております。

また、先生は日本内分泌学会において第13回の関東甲信越支部会を宇都宮で2012年の12月に開催され、多くの参加者を集められました。その際今でも大変残念に思っているのが、市民公開講座で芸能人の菊池桃子さんといっしょに講演をご依頼頂いたのですが、私の都合があわずかなわなかった事です。後でお聞きしたのですが、菊池さんといっしょにお食事の機会があったとお聞きして、今でもテレビで菊池桃子さんを観るとこの市民公開講座の事を思い出します。

また、研究会では北関東糖尿病研究会を自治医科大学、群馬大学、筑波大学、獨協医科大学の内分泌代謝学教室の先生方と毎年開催していたのですが、この会では、各大学から最新の研究成果が発表され賞を競いあっていました。石橋先生のご教室からは、最近では Valosin-containing protein についてなどいつも非常に質の高いご研究成果が発表され、当科教室員も毎回刺激を受けていました。

私も同時期に群馬大学を退官いたしますが、先生も健康にはくれぐれもご留意され、益々のご活躍を祈念しております。

本当に長い間お世話になりありがとうございました。

石橋 俊 先生のご退職に際して

山本 徳男

石橋先生とは、ブラウンとゴールドスタインの研究室での同窓生として、長いお付き合いをさせていただきました。私の印象では、先生とのお話よりも、奥様とのお話により楽しい時間を費やしたように思います。

今から遙か昔の話ですが、モントレーで行われたブラウンとゴールドスタインの何十周年のパートナーシップの集まりの際、講演に少々飽きた私はロビーに出ました。そこでお会いした奥様とお話しさせていただきましたが、私のとりとめのない話にもかかわらず、奥様は全く迷惑そうな表情を見せず、丁寧に耳を傾けてくださいました。石橋先生は、恐妻家として知られていますが、実は奥様が寛容で、スケールが大きすぎて、そのような話になっているのではないかと、理解できるようになりました。

最近、自治医大を退職され、羽生にクリニックを開業されたと伺いました。羽生の住民の方々には、優れたホームドクターを得たと言えます。地方において、石橋先生のような名医に診てもらえる機会は皆無で、先生は貴重な存在となることでしょう。一見クリティカルに見える部分もある石橋先生ですが、それは実際には物事を客観的に捉えているからこそその印象かもしれません。羽生の人々は得難い名医に恵まれたと言えるでしょう。

私たちは、石橋先生が故・山田信博先生の学生として始まりましたが、山田先生が突然お亡くなりになった後、先生がその代わりのように感じられることがしばしばあります。やはり、山田先生の薫陶を受けた影響は大きく、山田色をしっかりと受け継いでいらっしゃるためではないかと思われま。

この限られた時間とスペースでは石橋先生を十分に語るには短すぎます。ダラスでのこと、デイビットとのこと、サイエンスのこと、石橋先生ともっと、時間を取って、話ができたら、面白いだろうと感じるこの頃です。

どうかお身体に留意され、幸せな第二の人生をお過ごしくださることを、心よりお祈り申し上げます。



2015年 ダラス会、京都にて

石橋俊先生の教授ご退任に寄せて

国立大学法人 千葉大学長 横手 幸太郎

石橋俊先生の教授ご退任にあたり、心よりお祝いと感謝を申し上げます。

石橋先生は、同じ高校の先輩であるとともに、それぞれの師である山田信博先生と齋藤康先生が親しい間柄でもあったことから、長らく様々な場面で大変お世話になりました。動脈硬化学会や糖尿病学会をはじめ、かつて多く開催されていた研究会などでも、学術面はもとより、その後の懇親の場において楽しく交流させていただきました。

特に印象深い思い出は、石橋先生が主催された学会の市民公開講座で、私の大学の友人である作家の海堂尊氏およびタレントの菊池桃子さんとご一緒させていただいたことです。その後、銀座の高級すし店で石橋先生ご夫妻を交えて慰労会を開いていただきました(写真)。今でも海堂氏とお会いするたびに、その時の出来事が話題に上がります。

石橋先生の素晴らしい研究業績については、私が述べるまでもありませんが、その背景にある研究に対する真摯なご姿勢には、学会や研究会でのご発言、共著論文の作成過程におけるコメントを通じて、常に感銘を受けていました。また、必要なこととそうでないことを的確に仕分けるそのメリハリのつけ方には、学ばせていただくことが多々ありました。

大学でのご定年とともに、それまで全力を投じられていた研究活動から離れ、地域医療に転じられたというご決断も、まさに石橋先生らしいと感じています。大学とは異なる新たな生活を楽しまれていることと思いますが、くれぐれもご健康に留意され、第二の人生においても益々のご活躍を祈念申し上げます。



2012 年内分泌学会地方会市民公開講座準備会：菊池桃子さん・海堂尊氏らと

石橋俊先生の御退任に寄せて

一般財団法人 京都予防医学センター、京都大学名誉教授

横出 正之

石橋俊先生

このたびは教授御退任誠におめでとうございます。23年間にわたり教室の教育、診療、研究に務められこの日を迎えられること心よりお慶び申し上げます。

先生との出会いは米国テキサス州ダラスの UT Southwestern Medical Center の分子遺伝学教室で共に学んだことに始まります。教室は Brown、Goldstein 両教授の厳しい指導で有名でしたが、先生は文字通り早朝から深夜まで休む日もなく研究に没頭されていたことが今でも鮮明に思い出されます。その成果は LDL 受容体ノックアウトマウスの作出として結実し、今なお世界中の研究に広く貢献しているところです。先生はその後 1994 年に東京大学に帰学されましたが、その頃京都大学に戻ってありました私も研究会などで一緒する機会が増えました。先生は 2001 年からは自治医科大学に教授として着任され、内分泌代謝学部門で数多くの後進の先生方を育てられますが、その間ライフワークとされたマクロファージと動脈硬化との関連に関する研究に加え、臨床医学分野では厚生労働省原発性高脂血症調査研究班長として、わが国の原発性高脂血症の診断、治療の研究を精力的に率いられました。このような研究への取り組みから第 22 回日本動脈硬化学会賞を受賞されたことは、先生の永年にわたるご尽力の賜物と存じます。

傑出した研究者である一方で、先生は心優しい思いやりにあふれた方でした。休日に家族同士で郊外に一緒に行ったことが懐かしく思い出されます。子供たちと地平線を眺めながらのお弁当など、そのときは研究室とは違って、ご家族を暖かく見守られる先生の姿がありました。

退官後はお祖父様が開業された地で地域医療に取り組まれるとうかがいました。優しいお人柄の先生が最善最新の医療を展開されることは、地域の方々にとっては本当に心強いと信じてやみません。

これからは是非ともお身体を大切にされ、新しい目標に向かって進まれますようお願い致しまして、私のご挨拶とさせていただきます。



1990年頃ダラスでのパーティー、Bob Hammer、Kayらと

石橋俊先生へ

中部大学応用生物学部 客員教授

横山 信治

石橋俊先生が定年退職されると伺い、思わず「まさか」と思ってしまいました。まだまだお若いと思っていた方々がそういう年齢に達していると言うことで、とりもなおさずいつの間にか喜寿を過ぎてしまった自らの年齢を否応なく自覚させられることばかりです。

卒業年次に10年の開きがあり、若い頃スピンアウトして長年海外で過ごしてしまった私にとっては、長く自治医大の内分泌代謝内科をあずかり臨床や研究に多くの成果を積み上げてこられたことを知らないはずはないのに、失礼極まりないとは分かっている、石橋先生にはいつまで経っても「東大第三内科の若手のホープ」としてのイメージがつきまといます。しかし、人生百年時代とは冗談でも誇張でもなく現実のことです。聞けば、先生は開業という新しい人生に挑まれるとか。なんとうらやましいことかと、他人事ながら胸躍らせる思いがいたします。

私の高校時代にKという尊敬すべき友人がおりました。今は昔となった60年安保闘争の余韻は地方の県立高校にも残っていた頃のことです。Kは怒っていました。世のあらゆる不正義不公正不条理に怒り、時には学校やクラスメートの手に負えない有様でした。そして彼は思うところあってか医学部に進み、私もたまたま同じ道をとることになりました。時は1960年代後半、医学部激動の時代です。遠く離れた進学先で我々はそれぞれ時代の中で学生生活を送り医師となってゆきました。Kは大学や研修先で抱腹絶倒の武勇伝を数々のこしながら若くして開業、岐阜県の農村で地域医療のみちに飛び込んでゆきました。私はといえば国内外を転戦する暮らしを送り、50を過ぎて名古屋の大学に落ち着いてから、またKとの交流が始まりました。しかし彼の世の不条理に対する怒りが彼を酒に向かわせてしまい、それは既に健康を蝕んでいたのです。Kが入退院を繰り返す中で、大学勤務の合間を縫って私は彼の患者さん達を他院へ紹介する仕事を手伝うことにしました。しかし、彼らの多くが「K先生を見限ってよそへ行くことなどできん、先生が帰ってくるまで医者にはかからん」と私を困惑閉口させたものです。私は、これだけでも彼の人生は報われたと思いました。中途半端な大学生活を送ってしまっていた自らを省み、それぞれに限られた時間をどう生きるべきだったのか、残された時間をどう使うか、突きつけられた思いをしたものです。

Kが逝ってから既に十数年、結局私はそのまま中途半端に人生を終えることになりそうです。石橋先生がご退職後に開業の道を選ばれたと伺い、Kのことを思い出し、先生のこれから踏み出される新しい天地になんともいえぬ羨ましさを感じる次第です。それは自らが社会に存在する意味に直接の手応えを感じる道であるとともに、世の不正義不公正不条理にも日夜直接曝されることでもあります。石橋先生が踏み出される新しい道に心からの応援エールを送りたいと思います。